

小屋ノ内館跡 大麻古墳群(3・4号墳)

調査報告書

1997年12月

麻生町遺跡発掘調査会

序

茨城県の東南に位置し、縄文海進期には大きな入り江であったと考えられる霞ヶ浦と北浦のふたつの大きな湖が西と東によこたわる麻生町は、人が生活するのに極めて良好な自然環境であったことを、先人の残した多くの遺跡が物語っています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところではありますが、近年の産業構造や生活様式の変化に伴う開発や造成が増加するなかでの遺跡の現状維持保存は年々難しくなってきております。

この度、麻生町麻生字小屋内 2536 番地を中心として土採取工事が計画されました。この地は埋蔵文化財包蔵地であるので、文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。

本調査を実施するにあたり、県教育庁文化課の指導のもとに鹿行文化研究所・汀安衛氏を調査主任として「小屋ノ内館跡及び大麻古墳群（3号墳）遺跡発掘調査団」を発足させ、地元の方々の協力を得て無事発掘調査を完了することができました。これもひとえに調査主任の汀先生はじめ関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

また、文化財保護に深いご理解を示し調査経費を負担してくださいました有限会社幸新取材の金山貢大氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げ、あいさつといたします。

平成 9 年 12 月

麻生町 遺跡発掘調査会

会長 橋 本 豊 荘
(麻生町教育長)

例　　言

1. 本報告書は、茨城県行方郡麻生町大字麻生字小屋内 2536 番地他の発掘調査報告である。
1. 本遺跡の調査は、土砂採取事業に先行する埋蔵文化財の調査である。
1. 本遺跡の調査は、平成 9 年 3 月 9 日～5 月 26 日でおおかたの作業はほぼ終了し測量及び補足調査のみとなった為 5 名を残し四部切遺跡に移動した。整理作業は平成 9 年 4 月 20 日～8 月 20 日まで行なった。（水洗、注記は 6 月中で終了していた）
1. 本遺跡の現地調査は、麻生町遺跡発掘調査会を組織し、鹿行文化研究所の汀安衛が担当し、整理作業は、岡面を前田京子、トレース・実測を戸島和子、図版組み・拓本を佐々木トミ子、水洗い・注記を横田泰隆・山本茂、復元は、新聞農子がそれぞれ行い、汀が写真・執筆及び総括して行った。
1. 本報告書の縮尺は、遺構に関しては、1/20, 1/30, 1/60 を基準とし、その他は図中に表示した。遺物は、1/3, 1/2 が基準である。水系レベルは、統一表示を基準としたが、不可能な場合はその図中に表示した。
1. 本調査の組織は、次のとおりである。

職　名	氏　名	所　属
会　長	橋　本　豊　榮	麻生町教育委員会教育長
副　会　長	辺　田　弘	文化財保護審議会会长
理　事	羽　生　幸　三	文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	羽　生　均	文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	平　輪　一　郎	文化財保護審議会専門調査員
〃	植　田　敏　雄	文化財保護審議会専門調査員
〃	汀　安　衛	調査主任
〃	金　山　貢　大	(有)幸新取材代表取締役
〃	糸　賀　洋　一	麻生町教育委員会事務局長
監　事	永　作　栄　吉	(有)幸新取材
〃	羽　生　文　男	麻生町出納室長
幹　事	額　賀　修　一	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	永　作　賢　司	麻生町教育委員会社会教育主事

1. 本報告書で使用したスクリーントンは、焼土、カマドの袖、粘土であり、炭化物は出土状態のまま図示した。

1. 本調査にあたり次の方々の協力を受けた。記として感謝の意を表したい。

茨城県教育行政文化課 鹿行教育事務所 麻生町教育委員会

(有)幸新取材・金山賀人 永作栄吉 箕輪リース

鹿行文化研究所・横田泰隆 佐々木トミ子 新関豊子 前田京子 戸島和子 山本 茜

協力者・根本武雄 菅谷益尚 高須松男 大川善久 佐々木文雄 新関尚賢 清宮 久

金田美知子 大久保和子 内田さく 小瀬智倫 大森道子 鈴木巳三子 金倉美和子

福沢恵子

蓮城院住職・宮川孝栄

目 次

序 文

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 調査に至る経過	2
調査日誌	
III. 調査経過	3
IV. 調査の概要	4
V. 遺構と遺物	4
1. 小屋ノ内館の繩張り	7
2. 遺存する館の遺構	7
3. 建 屋	8
1号建屋	8
2号建屋	10
3号建屋	11
4号建屋	11
5号建屋	12
4. 土 壘	12
5. 堀	18
土 器	
石 器	
6. 住 居 跡	21
3号住居跡	21
5号住居跡	24
4号住居跡	25
6号住居跡	27
9号住居跡	31
7号住居跡	33
8号住居跡	34
1号住居跡	36
2号住居跡	37
10号住居跡	38

7. 土 坑	38
1・2・2'号土坑	38
3・4・4'号土坑	39
5・6・7・8・9・10号土坑	41
11・12・13・14・15号土坑	43
16・17号土坑	45
18・19・20・21・22・23号土坑	47
24・25・26・27・28・29号土坑	49
30号土坑	50
31・32・34・35・36号土坑	51
37・38・39号土坑	54
40・41・42号土坑	55
42'・43・44・45・46・47・49号土坑	56
50・70・71号土坑	58
8. 近世の建屋遺構と柵列	59
6号建屋	
7号建屋	
8号建屋	
7・9・10・11・12号柵列	59
13・14・15・16・17号柵列	61
9. 溝	64
1・4・5・6号溝	64
7・8・9号溝	66
10・11・12号溝	67
13・14・15号溝	68
16・17・18号溝	71
19・20・21号溝	72
22号溝	73
10. トレンチ	74
M. 大麻古墳群	78
1. 住居跡	78
11号住居跡	78

12号住居跡	79
13号住居跡	82
2. 土 坑	83
60・61・62・63・64・65・66号土坑	83
67・67'号土坑	85
68号土坑	86
VII. 古 墳	86
1. 古 墳	86
3号墳	86
4号墳	88
2. その他の遺物	92
3. 溝	93
23・24号溝	93
25号溝	94
26号溝	95
4. 墓 坑	95
1・2・3号墓	95
4・5・6・7・8号墓	97
9号墓	98
10号墓	100
VIII. 総 括	100

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺地形及び位置図	1
第 2 図	遺構全測図	5
第 3 図	小屋ノ内館・堀位置図	6
第 4 図	第 1 号建屋実測図	8
第 5 図	第 1・2・3 号建屋実測図	9
第 6 図	第 2 号建屋実測図	10
第 7 図	第 3 号建屋実測図	11
第 8 図	第 4 号建屋実測図	12
第 9 図	第 5 号建屋実測図	12
第 10 図	土壙・内堀 1・3・4 土層実測図	13
第 11 図	内堀 1・3・6・7 号土層実測図	14
第 12 図	内堀 1・3・4 及び溝エレベーション実測図	15
第 13 図	トレント土層実測図	16
第 14 図	第 2・3 号溝実測図	17
第 15 図	第 3・6 号掘出土遺物実測図	19
第 16 図	第 3・4・5・6 号堀・表採出土遺物実測図	20
第 17 図	第 3 号住居跡実測図	22
第 18 図	第 3 号住居跡出土遺物実測図	23
第 19 図	第 5 号住居跡実測図	24
第 20 図	第 4・5 号住居跡出土遺物実測図	25
第 21 図	第 4 号住居跡実測図	26
第 22 図	第 6 号住居跡実測図	27
第 23 図	第 6 号住居跡出土遺物実測図	28
第 24 図	第 6 号住居跡出土遺物実測図	29
第 25 図	第 9 号住居跡実測図	32
第 26 図	第 9 号住居跡出土遺物実測図	33
第 27 図	第 7 号住居跡実測図	34
第 28 図	第 8 号住居跡実測図	35
第 29 図	第 8 号住居跡出土遺物実測図	35
第 30 図	第 1・2 号住居跡出土遺物実測図	36

第 31 図	第 1 号住居跡実測図	37
第 32 図	第 2 号住居跡実測図	37
第 33 図	第 10 号住居跡実測図	38
第 34 図	第 2 号土坑出土遺物実測図	39
第 35 図	第 1 • 2 • 2' • 3 • 4 • 4' 号土坑実測図	40
第 36 図	第 5 • 6 • 7 • 8 号土坑実測図	42
第 37 図	第 9 • 10 • 11 • 12 号土坑実測図	44
第 38 図	第 15 号土坑出土遺物実測・拓影図	46
第 39 図	第 13 • 14 • 15 • 16 • 17 • 18 号土坑実測図	46
第 40 図	第 19 • 20 • 21 • 22 • 23 • 24 • 25 号土坑実測図	48
第 41 図	第 26 • 27 • 28 • 29 • 30 • 31 • 32 号土坑実測図	50
第 42 図	第 34 • 35 • 36 • 37 • 38 • 39 号土坑実測図	52
第 43 図	第 1 • 15 • 22 • 24 • 30 • 43 • 50 • 70 号土坑出土上土器実測図	53
第 44 図	第 40 • 41 • 42 • 42' 号土坑実測図	55
第 45 図	第 43 • 44 • 45 • 46 • 47 号土坑実測図	57
第 46 図	第 49 • 50 • 51 • 70 • 71 号土坑実測図	58
第 47 図	近世の建屋遺構、第 6 • 7 号建屋と柵列（1 • 2 • 3 号柵列）	60
第 48 図	8 号建屋と 6 • 7 • 8 号柵列	61
第 49 図	9 • 10 号柵列	62
第 50 図	11 • 12 • 13 • 14 • 15 • 16 • 17 号柵列	63
第 51 図	第 1 号溝実測図	64
第 52 図	第 4 • 5 号 A • B • C 溝実測図	65
第 53 図	第 6 • 7 • 8 号溝実測図	66
第 54 図	第 9 号溝実測図	66
第 55 図	第 10 • 11 • 12 号溝実測図	67
第 56 図	第 13 • 14 号溝実測図	68
第 57 図	第 15 号溝実測図	68
第 58 図	第 15 号溝出土遺物実測図	69
第 59 図	第 1 • 2 • 11 • 9 • 15 • 18 号溝出土遺物実測・拓影図	70
第 60 図	第 9 • 16 • 18 号溝・第 15 号ピット出土遺物実測図	70
第 61 図	第 16 • 17 • 18 号溝実測図	72
第 62 図	第 19 • 20 • 21 号溝実測図	73

第 63 図	第22号溝実測図	74
第 64 図	各トレンチ出土上器・石器実測図	75
第 65 図	表探出土遺物実測図	76

大麻古墳群

第 66 図	3号墳・4号墳・溝・土坑・墓全測図	77
第 67 図	第11号住居跡実測図	78
第 68 図	第11号住居跡出土遺物実測図	79
第 69 図	第12号住居跡実測図	80
第 70 図	第12号住居跡出土遺物実測・拓影図	81
第 71 図	第12号住居跡出土遺物実測図	82
第 72 図	第13号住居跡実測図	82
第 73 図	第60・61・62・64・65・66号土坑実測図	84
第 74 図	第67・67'・68・63号土坑実測図	85
第 75 図	第3号墳周溝実測図	86
第 76 図	第3号墳出土遺物実測図	87
第 77 図	第4号墳墳丘土層実測図	88
第 78 図	第4号墳周溝実測図	89
第 79 図	第4号墳埋葬施設実測図?	90
第 80 図	第4号墳出土繩文・弥生式上器実測・拓影図	91
第 81 図	第4号墳出土遺物実測図	92
第 82 図	第23号・24号溝実測図	94
第 83 図	第25号・26号溝実測図	94
第 84 図	第1・2・3・4・5・6・7号墓実測図	96
第 85 図	第9号墓人骨遺在状態	98
第 86 図	第8・9・10号墓実測図	99
第 87 図	第1号墓・7号墓・古銭及びカワラケ出土遺物実測・拓影図	100

写 真 図 版 目 次

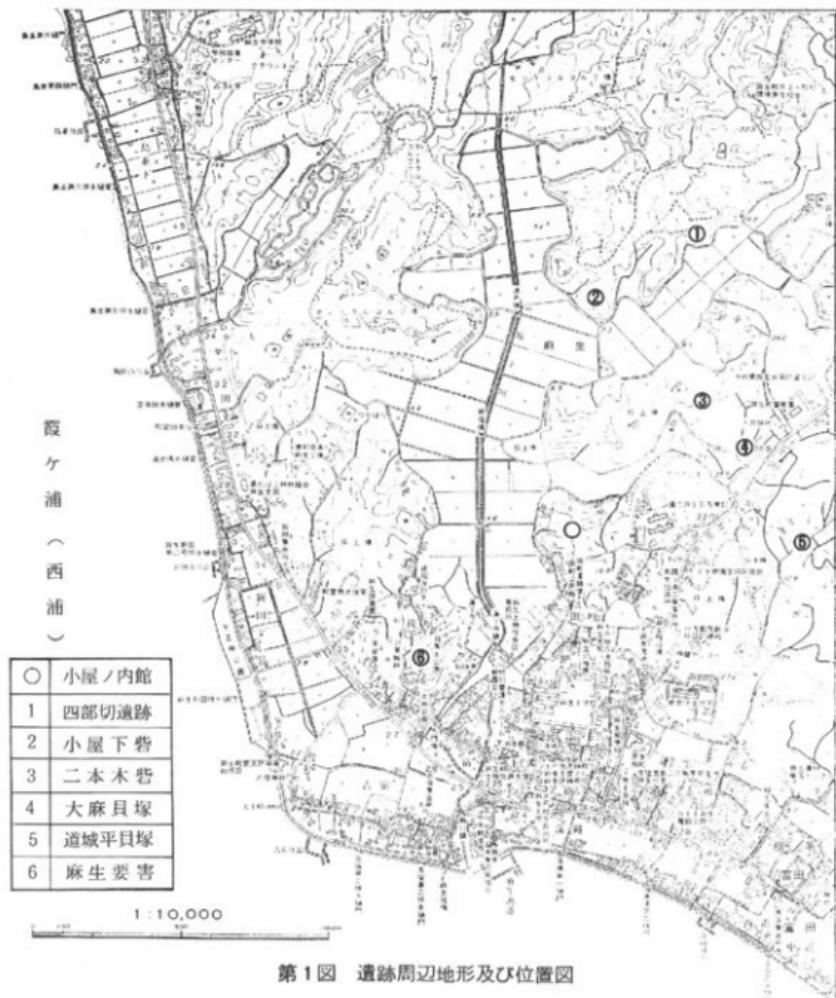
- P L- 1 調査区中央部（上）同北東部（下）
P L- 2 西側欠失した土壘と内堀（上）同中央部（下）
P L- 3 北側土壘（下）同西側土壘
P L- 4 北東側から見た調査区（上）同内堀部（下）
P L- 5 外側からの土壘西側（上）同北側（下）
P L- 6 テラス状部（上）同調査後（下）
P L- 7 南側からテラス状部分を見る（上）同土壘（下）
P L- 8 裏門と思われる部分（上）同調査後（下）同右
P L- 9 土壘の構築状態（上）同近景（下）
P L- 10 北側土壘構築状態（上）建屋とピット群（下）
P L- 11 3号建屋と焼土（上）同完掘（下）
P L- 12 内側土層（上）3号堀完掘（下）
P L- 13 3号堀全景（下）4号堀全景（下）
P L- 14 6号堀南東部（上）同北側（下）
P L- 15 4号溝完掘（上、下右、下左）
P L- 16 8号・9号・10号溝完掘（上、中、下）
P L- 17 19号・16号・17号・21号溝全景（上右、上左、下）
P L- 18 1号住完掘（上）3号住遺物出土状態（下）
P L- 19 3号住土層（上）5号住遺物出土状態（下）
P L- 20 6号住遺物出土状態（上）同完掘（下）
P L- 21 8号住遺物出土状態（上）同細部（中）同完掘（下）
P L- 22 1号土坑・2号土坑完掘（上）2号土坑完掘・同土層（中）2号土坑上部土層
・3号土坑完掘
P L- 23 4号土坑遺物出土状態（上）5号土坑完掘・7号土坑遺物出土状態（中）6号
土坑完掘・8号土坑完掘（下）
P L- 24 9号土坑完掘（上）10号土坑完掘（中）11号土坑完掘（下）
P L- 25 14号土坑完掘（上）15号土坑土層（中）同遺物出土状態（下）
P L- 26 16号土坑完掘（上）17号土坑完掘（中）18号土坑完掘（下）
P L- 27 19号土坑完掘（上）20号土坑完掘（中）21号土坑完掘（下）
P L- 28 23号土坑完掘（上）24号土坑完掘（中）25号土坑遺物出土状態（下）

- P L- 29 26号土坑完掘（上）27号土坑完掘（下）
- P L- 30 31号土坑完掘（上）35号土坑・38号土坑完掘（下）
- P L- 31 39号土坑完掘（上）41号土坑完掘（中）42号土坑完掘（下）
- P L- 32 43号土坑完掘（上）45号・46号・47号土坑完掘（中）50号土坑遺物出土状態（下）
- P L- 33 50号土坑完掘（上）70号・71号土坑完掘（中）100号土坑完掘（下）
- P L- 34 100号土坑完掘（上）15号ピット完掘・45号ピット遺物出土状態（中）78号ピット完掘・83号ピット完掘（下）
- P L- 35 3号墳周溝出土土器・同皿状土器（上）3号埴完掘（中）同完掘全景（下）
- P L- 36 3号・4号墳周溝と溝（上）4号墳周溝遺物出土状態（下）
- P L- 37 4号埴土層と周溝（上）同東側周溝（中）4号埴調査風景（下）
- P L- 38 11号住居跡完掘（上）12号住居跡遺物出土状態（中）同完掘（下）
- P L- 39 1号墓人骨出土状態（上）同完掘（下）
- P L- 40 2号墓完掘（上）3号墓完掘（下）
- P L- 41 4号墓完掘（上）5号墓・6号墓完掘（中）64号土坑完掘（下）
- P L- 42 7号墓遺物出土状態（上）同細部（中）同完掘（下）
- P L- 43 9号墓・10号墓・25号溝・63号・66号土坑完掘・60号土坑完掘（上）65号土坑完掘（中）66号土坑遺物出土状態
- P L- 44 8号墓完掘（上）10号墓完掘（下）
- P L- 45 9号墓全景（上）同細部（中）同完掘全景（下）
- P L- 46 2号・3号住出土遺物
- P L- 47 大麻1・7・8・9号墓・4号埴出土遺物
- P L- 48 12号住出土遺物（上）4号埴出土遺物（下）
- P L- 49 9・11・15・18号溝・1・2・15・18・22・28・30・43・50・70号土坑出土遺物
- P L- 50 3号・6号・1号掘出土遺物（上・中・下）
- P L- 51 6号・8号・9号住出土遺物



I 遺跡の位置と環境

本遺跡は、茨城県行方郡麻生町大字麻生字小屋ノ内、大麻に所在し遺跡は麻生の街並みを見下ろす台地上に占地し標高32mを測り、対岸には桜川村浮島、土浦入り、美浦村大山、岡平遺跡、筑波山を望み遠く日光連山を遠望する。眼下には洋々たる霞ヶ浦が満々たる水をたたえ広がり南



側には麻生、牛堀の台地と街並みが伸び、指呼の間には香取神宮の森、佐原の街並、間には常陸蘇州、水郷が広がる。半島状台地先端部に位置する館下には城下川に依り開析された沖積平野が広がり豊かな水田地帯が形成されている。

本館は、このような自然環境に恵まれた半島状部分に土塁、空堀を巡らした館と推察された。東側 500 m には二本木城（砦）が存在、西側は城下川を挟んで麻生城（要害）が存在している。また北側 500 m には小屋下城（砦）が位置している。その他本館東側には大麻古墳群が存在したが明確な時期は不明で有る。本調査では 2 基の方形墳が検出された。遺物等から奈良時代に入る可能性が高い。埋葬施設は 4 号古墳は横穴式と推察されるが遺物等は一点も検出されず、3 号古墳も上部を燧に依って削平され規模を確定する事が精いっぱいであった。南側には盛土をもった墓が存在した。（古墳とする人もある）常滑の甕に埋葬され盗掘された状態で検出されている。本地区はこのような自然環境に所在する。（墓と古墳を混同して、古墳としているものが一部にみられる。）

南側 500 m には麻生町役場。東側 100 m には県立麻生高校が位置する。

II 調査に至る経過

平成 9 年

- 2 月 3 日 (有)幸新取材から埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。
- 2 月 3 日 周知の遺跡（小屋ノ内館跡、大麻古墳群）が所在する旨を(有)幸新取材に回答。
- 2 月 6 日 町教育委員会、(有)幸新取材及び汀氏で協議をした結果、予備調査を行うことにした。
- 2 月 12 日～13 日 予備調査実施。大麻古墳群 3 号墳を確認。
- 2 月 18 日 発掘調査打合せ会を開き、予備調査の結果報告及び調査見積りについて協議する。
- 2 月 28 日 遺跡発掘調査会発足。3 月 13 日か 6 月 6 日までの期間で調査することとした。

III 調査経過

本遺跡は、前述のとおり土砂採取に係る埋蔵文化財の記録保存である。当初小屋ノ内館と、大麻4号古墳の調査で調査対象面積120,000m²と予定し調査に入った。なお大麻古墳群の中には近世の墓が存在すると推察された。

以下、調査日誌を抜粋し調査経過にかえたい。

- 3月9日 蓮城院住職により古墳周溝部分で供養を関係者で行なう。
- 3月12日 本日より小屋ノ内館の表土層除去開始。前述のとおり確認調査にならって。
- 3月13日 前述に続いて畠地の部分の耕作土排土。
- 3月14日 9時から調査の説明会、10時30分から現場へ道具搬入、整備、遺構確認作業開始す。全測図作成。
- 3月17日 前述につづいて遺構確認作業。遺構すくなし。内堀確認される。全測図。
- 3月18日 全員で遺構確認、一部重機に畠地開墾に依る搅乱が認められた。二列。
- 3月19日 10人程度内堀、1号堀の調査開始する。
- 3月21日 1号内堀調査、表土除去し遺構の確認作業。
- 3月24日 土坑、ピット調査開始。遺構確認。内堀調査続行。一部立木伐採。
- 3月25日 上坑、ピット、内堀の調査。遺構確認はほぼ作業は終了。テラス部分残し。
- 3月26日 建屋と推察される若干の掘り込みを認める。切り合いから3軒分か。
- 3月28日 内堀調査続行、ピット、溝調査。
- 3月29日 1号住居跡調査、大半搅乱。内堀調査。溝、土坑調査。
- 3月31日 内堀2、3号堀調査、2、4、5号溝調査、土坑調査。
- 中略
- 4月15日 大麻古墳群の草刈り立木伐採終了。
- 4月20日 西南3号住居跡調査。2、3、4号堀調査。
- 4月24日 3号堀、5、6号堀調査。土坑、ピット調査。道路入り口部分に調査移る。
- 4月30日 プレハブ周辺、1号堀東側調査。西側テラス部分雑木伐採終了。
- 中略
- 5月1日 大麻古墳群周辺の伐採終了し測量、写真終了耕作土除去。古墳残し。
- 5月2日 大麻部分の旧畠の表土除去。遺構確認作業。
- 5月10日 3号古墳、4号古墳調査開始。
- 5月13日 一部西側テラス、土壤調査。東側からは9号住居跡検出。

- 5月18日 古墳は方形古墳。埋葬施設から遺物は検出出来ず、4号古墳中央から弥生期後半稻吉に近い住居跡が確認された。その他周辺から墓坑が8基検出された。
- 5月29日 一部測量を残し本日で終了。残りの測量は3人で6月3日で終了。

IV 調査の概要

本遺跡は前述のとおり城下川に依って開析された沖積平野に半島状に伸びだす標高32mほどの台地上に占地し大部分畠地として利用されてきた。調査時点では約半分程は荒地と化し篠竹が密生していた。北側、西側の一部に土塁が存在（第2図）西側、東側にテラス状の小曲輪が存在したか？。畠の為の擾乱の可能性も有り特定は出来ない。これらの諸点から方形館跡〔実際は長方形〕の可能性が高い。遺構、遺物から時期を特定するものはない。土塁は南、東には存在しなかった可能性が強い。建屋と推察される遺構が3軒みられたが特別な遺物、痕跡は認められなかった。

遺物は3点程の常滑の胴部、江戸初頭の磁器破片が3点程見られ、その他猿投げ窯の山茶わんの破片が1片等が出土し時期を特別断定出来るものはない。

その他、弥生、古墳、奈良時代の住居跡が土塁下、テラス部分から9軒が見られた。近世の遺構と思われる掘立遺構、畠寄せの溝等が認められ半の貯蔵穴は20基以上に上る。また縄文時代の土坑も5基程見られた。

大麻古墳群は2基の方形古墳が検出され埋葬施設は4号古墳に横穴式の遺構が認められたが埋葬施設と断定出来る遺物は検出されなかった。3号古墳は周溝のみで埋葬施設は検出されなかった。その他江戸時代初頭～江戸末期の墓が4基、墓と推察されるもの5基が見られ一部の墓は常滑の水瓶に埋葬され、かなり遺存状態は良好であった。いずれも六紋銭が出土している。

遺跡の全体像は西側は館、東側は墓域と分ける事が可能である。以下、館、住居跡、土坑、溝、古墳、墓の各遺構について後述していく。

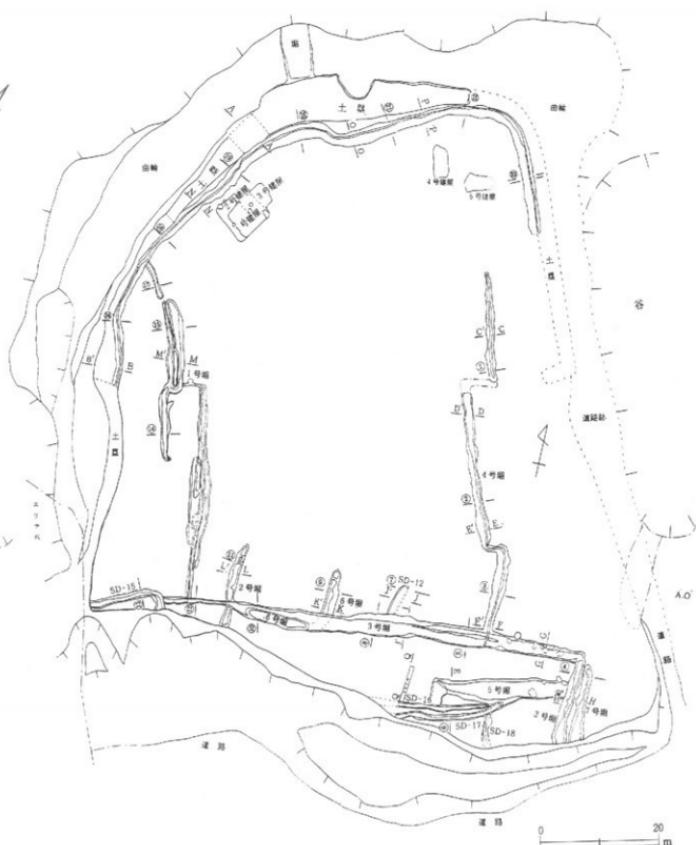
V 遺構と遺物

小屋ノ内館は、麻生町遺跡地名表にも記載され周知の遺跡として知られていた。遺存状態はあまり良くなく大半は畠地耕作の為欠失し測量図から復元は不可能であった。調査でも本来の姿を確定するには無理がある。

〔館〕として捉え、縄張り、遺構、遺物の順に述べる。



第2図 遺構全測図



第3図 小屋ノ内館・堀位置図

1. 小屋ノ内館の縄張り（第3図）

屋敷は、単純で北側が地形の制約でやや丸みを持ち北側で東西45m 西側で75m の小型な在地名主の屋敷として作られたと推察され、幅の狭い西側に残る1号堀、2、3溝、南側の3号堀、東側の4号堀と続く長方形縄張りで面積約3,200m²程の屋敷と推察される。本時期の遺構は、大半が後世の館に依って消失し僅かに1号堀、4号堀、2、3号溝に面影を残し南北の2、6堀の遺構が伴うと考えられ6堀は排水を計算した堀と推察される。

本遺構の掘り込みは幅40cm～60cm程で深さも20cm～50cm程でかなり削平をうけていると推察される。北側は消失していると推察し屋敷と推定する。

時期は麻生氏が入って来る以前が推定されるがこれに該当する遺物は出土していない。

時期を特定するには北側の内堀でV字状形態の掘り込みで時期に時間差が認められる。南側の16、17号溝が当時の屋敷裏口、通路として使用されたと考えられる。

門は西側の内堀から分かれる部分で1号堀と書かれている部分が想定される。2、3号溝が生きる遺構であろう。

建屋、門等は確認出来ず削平され消失したと思われる。それ程の規模をもたない屋敷と推察する。遺物、遺構、規模は確認できなかった。東、西、北側に平坦な広場が存在したと推定される。

2. 遺存する館の遺構（第3図）

本館は、主軸をN-20°-Wに置く台形状形態でかなり後世の畠地耕作で搅乱が入る。北側、西側に土塁が存在する。その他東側にも若干の土居が存在した可能性が見られた。東西100m、南北85m、面積約9,000m²で単曲輪で北側に円形状のテラス状の部分をもつ。明確な遺構は無く境も堀切り、土塁等は存在しなかった。北北西側は土塁下端に犬走り状の狭い部分があり東西4.5m、南北8m、深さ50cm前後の堀切りに依って遮断している。これより西側は幅7m前後の帯状テラスが西側迄巡る。その下には後世通路として利用されたような道が存在する。テラス下は40°程の角度で10m程下る。特別な遺構は存在しなかった。西側南部分から浅い堀が南北に掘られている。U字状で南側に自然地形に流れる。東西17m、南北5m、深さは30～50cmで粘土層迄掘こんでいる。東側には土塁が存在する。西南側から土塁は消失し当初から存在しなかったと推定される。南側では直線的な3号堀と東側部分に5号堀が存在する。南側は館以前は斜面でかなり大規模な土木工事が行なわれ広場状空間を作りだしている。トレーンチを設定し確認したが5号堀の延長は認められなかった。大半は北側からの流れ、押し出して拡張している。（トレーンチの土層から）3号堀と5号堀の間には土塁が存在したと推定できる。東側では現在の道路がいぜん

の堀を利用していると推察され、そのまま北に伸び自然地形の谷につながると思われる。一部土壘の残存部と思われる部分も測量によって確認されている。北側の内堀は北から20m程直線的に伸びていたが全容は把握出来なかった。(植木植込の攪乱がひどい) 東側には狭い道路が存在し一部テラス状に見られる。

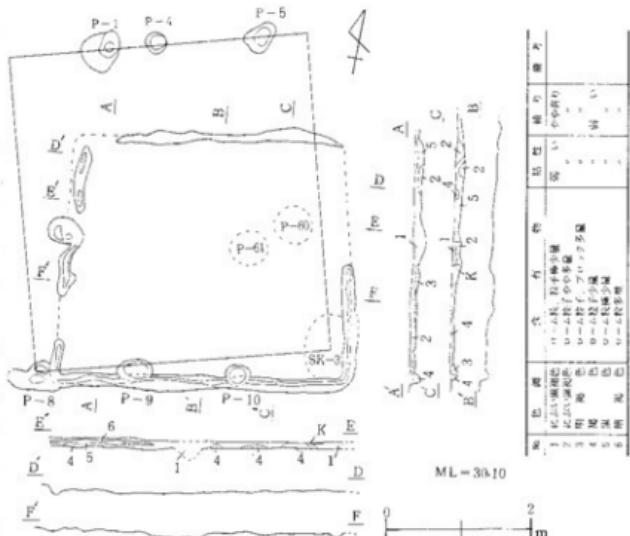
内部にはこの遺構に伴う建屋が5棟検出された。いずれも北側の土壘に添った位置に確認された。

3. 建屋 (第4図, 第5図, 第6図, 第7図, 第8図, 第9図)

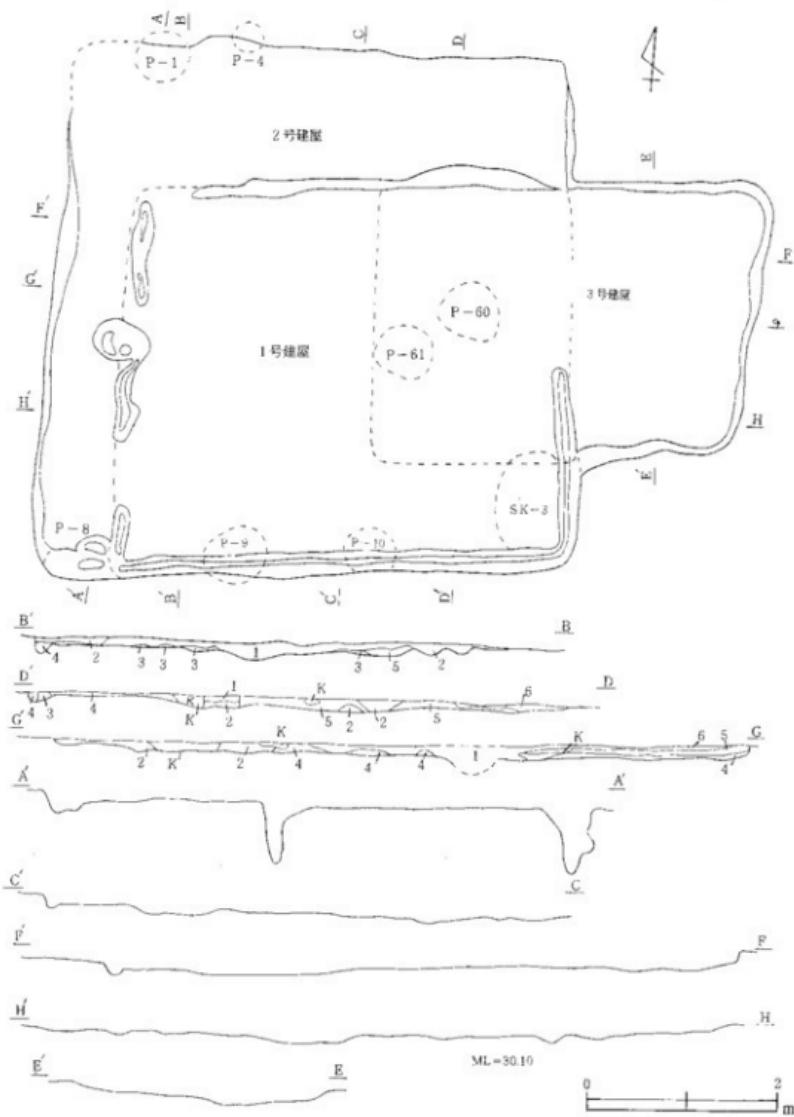
建物は、柱穴をもつ建屋を掘立建屋と掘り込みのみで柱穴を確認出来ないものとの二種類が認められ、これらはいずれも同時期で若干の時間差が見られる。僅かに掘り込みをもつ遺構は3軒、切り合い、複合関係にある。他の2軒はいずれも単独で検出された。その他時期が新しくなる掘立が3軒ほど見られ、これらは江戸時代末から明治～昭和期戦前の遺構と推察される。

○ 1号建屋 (第4図, 第5図)

本遺構は、北西のやや丸味をもつ部分の内堀近くに3軒の切り合い関係で検出された。さも古い遺構と推察されるが土層からは西側では断定出来ない。東西5m、南北5.3mで掘り込みとは東側に差が見られる。掘り込みは東西4.5m、南北4.3mの方形に近いプランで中央部がやや深く15cm前後で床面の縁りは弱い。南、東西に浅い周溝が見られる。柱穴と推定されるものは南北に長く掘り込みプランとはかなりの差があり掘り込みプランが本来の建



第4図 第1号建屋実測図



第5図 第1, 2, 3号建屋実測図

屋と理解すべきか。南側は明確な柱穴と思われるビットが見られた。

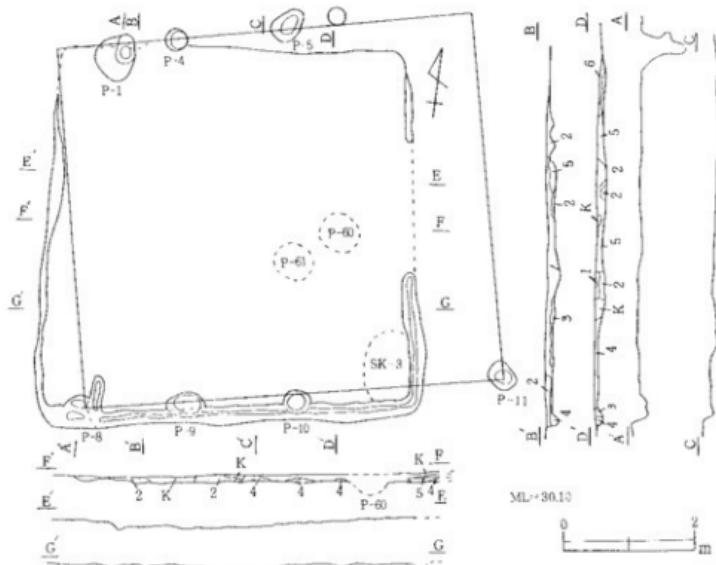
遺物は、大部分土師器で本造構に該当する遺物はない。鉄滓が出土している。その他見るべき遺物はない。主軸はN-2°-Eに置く。面積約20m²である。

覆土は、6層で上部は黒褐色、褐色、暗褐色、明褐色等が見られた。土間は粘性は弱く、締りはやや有る。土層からは特別な変化は認められなかった。物置か？。性格は不明。

○ 2号建屋 (第5図、第6図)

本造構は、切り合い関係にある3号建屋を掘り込む。掘り込み形態は方形で東西南北5.8m前後のプランで主軸をN-10°-Wに置き1号建屋とは家屋の方向に違いが認められる。南側にそってビット群が見られる。明確な柱穴は確認出来なかった。掘り込み深さは10cm前後で床面に凹凸があり締りは無い。北側は、確認面迄上る。土層は、1号建屋とそれ程の差はない。鈍い黒褐色、明褐色、褐色、黒色、暗褐色等で締りは弱い。粘性はやや有る。

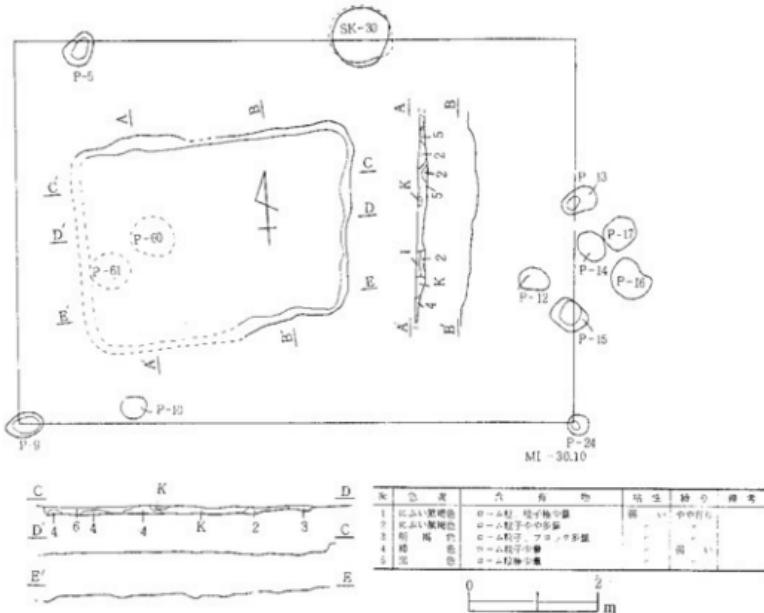
遺物は、土師器甕が大半で古墳時代の遺構とは違いが有る。以上の遺構からは、本造構にかかる遺物は検出はされなかった。本造構も物置か？。性格は不明。



第6図 第2号建屋実測図

○ 3号建屋 (第5図, 第7図)

本遺構は、複合関係のなかでもっとも古い遺構と推察される遺構で半分程を1, 2号建屋に掘り込まれている。推定で東西4.3m, 南北3.2mの長方形プランを呈し, 主軸をN-2°-Eに置く。本遺構も掘り込みは浅く10cm程度床面は凹凸があり縫りは悪く遺物も弥生, 土師器が多く時期を特定する資料は検出されていない。面積は約14m²前後で有る。諸相から物置の可能性が高い。

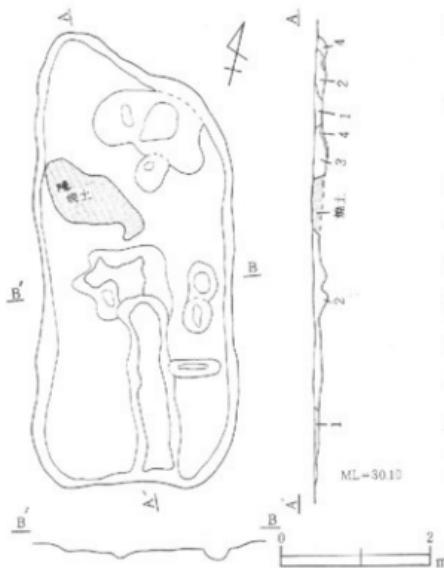


第7図 第3号建屋実測図

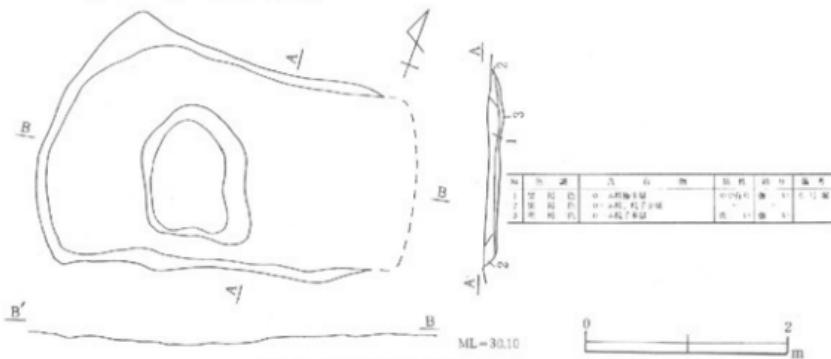
○ 4号建屋 (第8図)

本遺構は3号建屋の東側25mに位置し、北側に長い長方形状プランで中央西側に焼土ブロックが認められた。主軸をN-11°-Wに置き東西4.1m, 南北2mの長方形状形態で面積8.2m²程度で炊事場的様相を認める。床面は、若干の凹凸があり縫りは弱く掘り込みは5~10cmと浅い。焼土周辺は縫りを認める。粘土等は認め無い。

遺物は、土師器破片が70片程出土しているが本遺構と係る遺物は検出されない。前述の遺構の時期と差程の時間差はもない時期【館】厨の遺構と推察される。



第8図 第4号建屋実測図



第9図 第5号建屋実測図

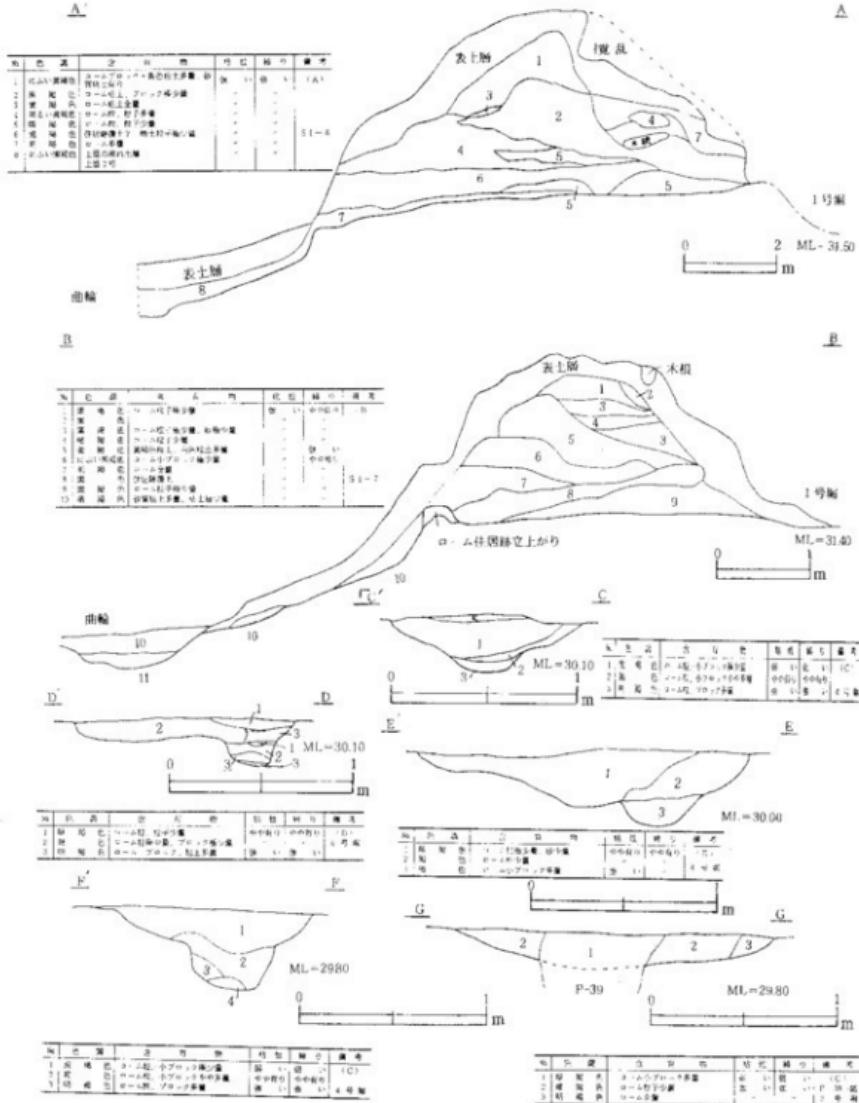
4. 土 壁 (第3図, 第10図, 第11図, 第12図, 第13図, 第14図, 第15図, 第16図)

小屋ノ内館の遺存していた土壁は北側と西側の一部でこれらの一一番良好な部分を切断し土壁の構築状態を観察した。その結果土壁下から古墳時代の住居跡が検出された。

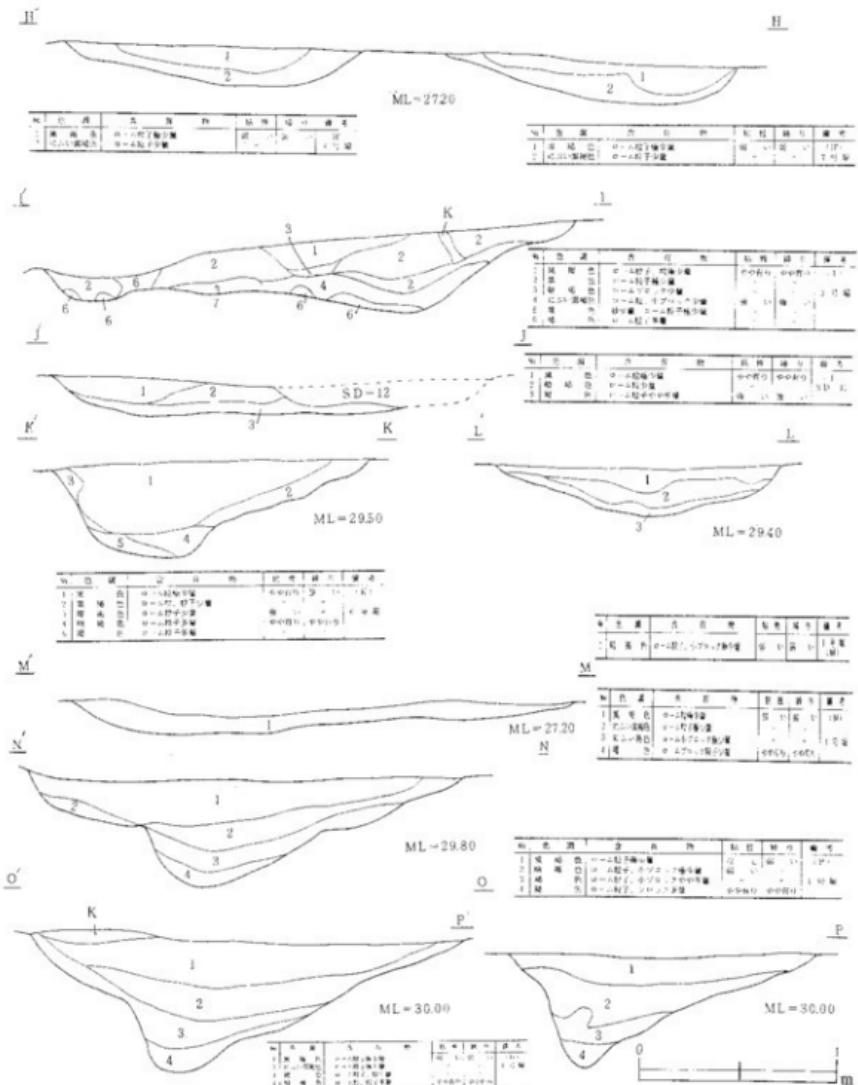
○ 5号建屋 (第9図)

本建屋は4号建屋の東側3mに位置し主軸をN-12°-Wに置き東西3.7m, 南北2.2mで面積約8.2m²で中央部がやや低くなる。底面の縮りは悪く小さな凹凸を認める。明確な境目は確定出来ない。土層の黒褐色, 明褐色層を掘りこんだ所前述の形態が検出された。プランからは物置状の建屋と推察される。明確なピット, 遺物は検出されず時期, 性格は断言は出来ないが前述の見解が妥当と推察される。

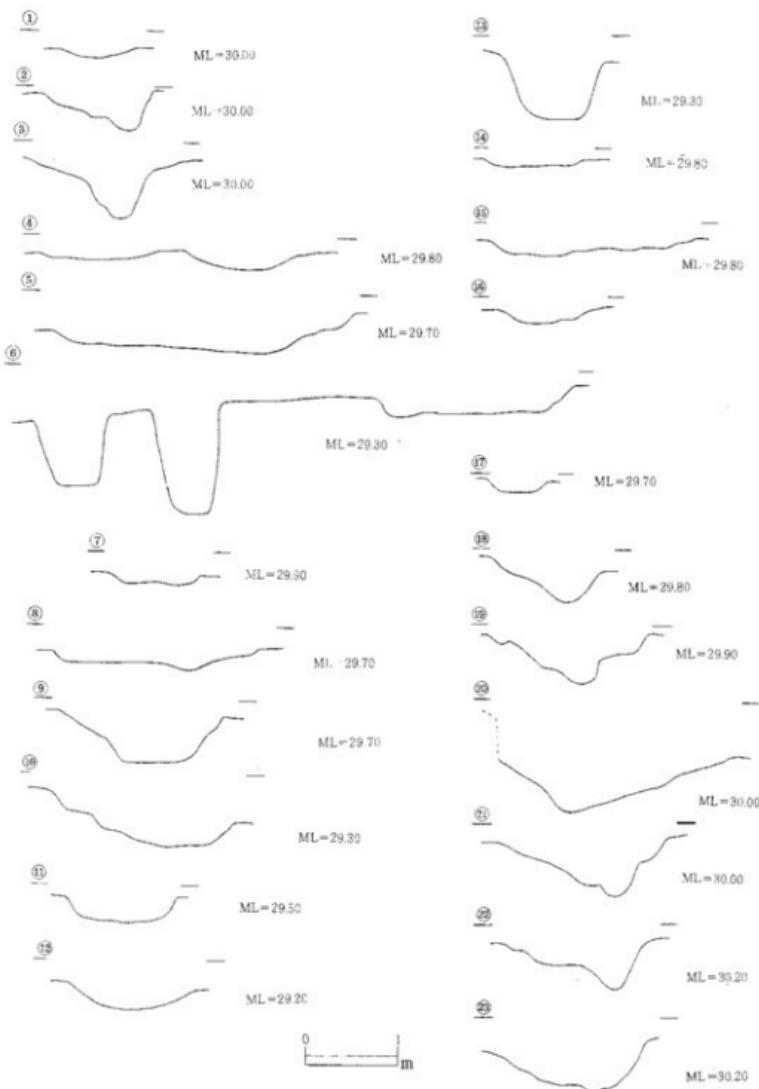
No.	色 調	器 物	基 性	縫 り
1	赤い黒褐色	ローム粘土少量	中等	弱い
2	黒 色	ローム粘土、小プロック少量、炭化	+	-
3	黒 色	瓦子灰少量	+	-
4	黒 色	ローム小プロック、瓦子灰少量	+	-
5	黒 色	ローム多量	+	-



第10図 土壌、内堀 1, 3, 4 土層測定図



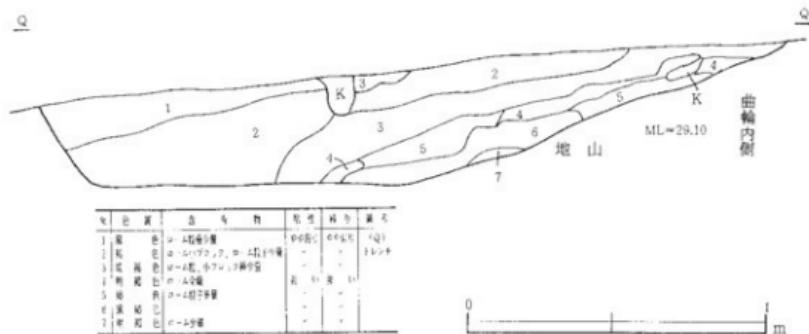
第11図 内堀1, 3, 6, 7号土層実測図



第12図 内堀 1, 3, 4 及び溝エレベーション実測図

北側から述べる下幅 1.6 m, 上幅 40 cm で高さは 70 cm を測る。構築の基本は表土をカットした後 7 層、明褐色層を外側からクサビ状に積み、その上に 6 層黒褐色層を同様に積み上げ中央部が一段下るように積み、その上に黄褐色の粘土粒子の多量に混じった 5 層を三角形状のクサビ状形態に積み上げている。内側には 1 ~ 4 層まで黒褐色、暗褐色、黒色等の土を水平に積み裏側から補強し、その上に表土層が 10 ~ 20 cm 程覆っている。下端は住居跡のため地山は一部しか検出されなかった。各層とも粘性は強く、縮りはやや有る。全体に小型な作りで規模からは館の範囲を越えない。構築状態は室町時代前半の様相を呈している。

西側の土塁は、北側同様下端は住居跡の覆土を若干整形し 4 層、黄褐色の粘土層を外側からクサビ状に積み中央部で三角形状を呈する。2 層は中程から黒褐色層を台形状に積み、上部は粘土粒子の黄褐色層が積まれている。上には表土層が 20 ~ 30 cm 程堆積している。内側は烟の沟かなり擾乱が見られる。下端には内堀が不隨し巡る。北側も同様で内側には内堀が付随、外側には浅い掘り込みが見られ掘状様相を呈している。これらの住居跡の在り方から推察すれば内側の遺構の大半は館構築のさいほぼすべて消失、煙滅したと理解される。そして土塁自体小型で低いものであったと推定出来る。土居に近い規模で方形館主の流れをもつ形態と理解される。これから本館は麻生氏土着前後に滅亡した一族か、麻生氏の館のどちらかと推察出来る。



第13図 トレンチ土層実測図

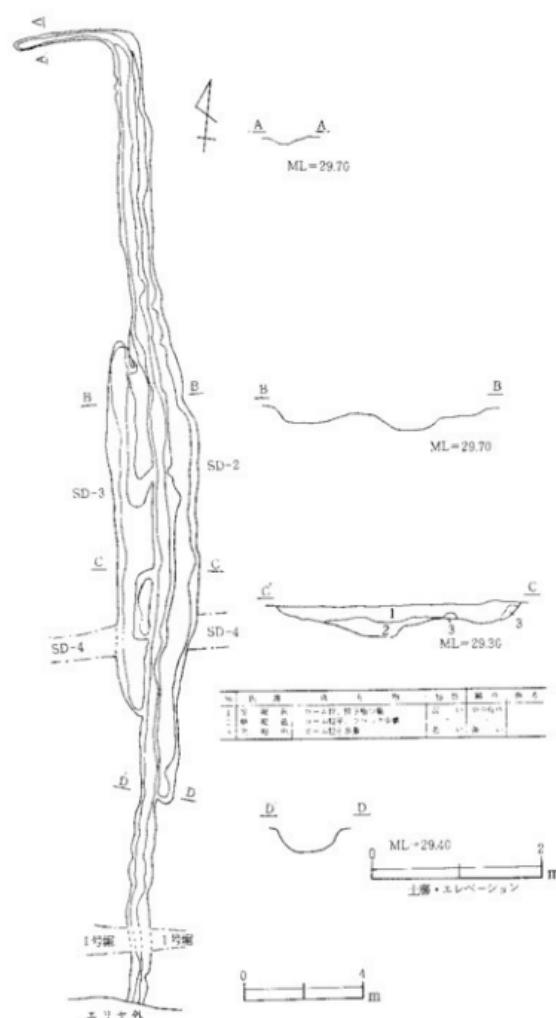
堀形態は、東、北、西側では緩い U 字形態で 2 号堀は旧の堀で上堀と共に存する堀は 3, 4 号堀が時期を同じくすると断定される。東側は道路から古墳周溝が境となると断定される。3 号堀と 4 号堀の間には土塁が存在したと考えられる。南側のこの部分はかなり大規模な土木工事が行なわれている。地形状かなり落ち込みが入り込む。トレンチの断面からかなり自然的な埋積と人

工的埋積が認められる。これは館構築時に凹地を埋めて方形館を構築すべき土木工事を行なったと理解される。この部分から検出された土坑は以前の屋敷時代の【門】と推察される。

東側は古墳が外側の土塁の役割を担っていたと推定される。東側は町道として一時使用されていたため旧状は、不明。土塁を削平した可能性があり測量図に示した範囲は館のプランとは断定は出来ない。東南側の道路部分に虎口が存在し、北側、東寄りの土塁の低くなる部分に裏門が存在したと考えられる。方形館跡の域はでない造構で有る。

遺物は、江戸時代から戦前のものが大半で本館に該当する遺物は少ない。猿投窓の山茶碗2、天目の破片2、その他、時期不明破片5が本造構に該当する遺物有る。

以上の諸点、土塁構築工法、堀、テラス、建屋の位置と虎口、裏門の配置形態から本館の時期は資料不足から断定は出来ないが室町以前の【屋敷】の大きなもの、言い換えれば【館】のさも小さいものと推察する。



第14図 第2，3号溝実測図

5. 堀出土遺物(第3図)

本遺構からは、これらに伴う遺物は皆無に近い。3堀と6堀から出土した弥生式土器と3, 4, 5, 6堀から出土した石器について後述する。

○ 土 器 (第15図, 第16図)

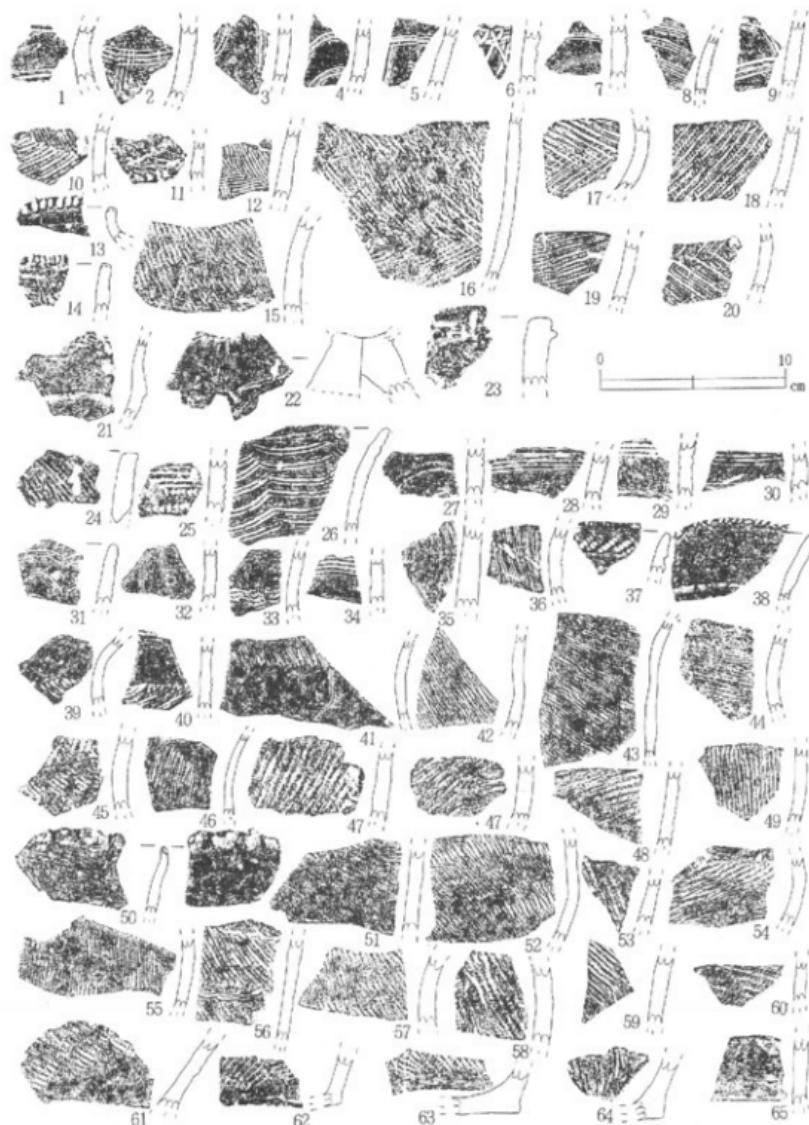
3号堀と6号堀の覆土から多量の弥生式土器が出土した。1~9はいずれも頸部破片で磨消部に2本単位、4本単位の平行沈線を直線的、円形状に施す。1は半裁竹管の平行沈線。2~5, 7~9は4本単位の櫛描き沈線を施す。13, 14は口唇部に米粒状の凹凸を加える。単純口縁で前述の上器とは時代的に差がある。10~12, 15~20は剥部文様で羽状構成で附加状1種、2種、撚り糸の附加が16に見られる。21は刷毛状の整形痕をもつ口縁部の破片で五領式に近い。22は高杯状形態で刷毛目をもつ土器である。23は近世の鉢状の土器で口縁部に隆帯が巡る。

24は口縁部まで附加状縄文を施す。25は三角形の文様をもつ土器。26は平行沈線を波状に施す。27, 31は円形状モチーフをもつ頸部破片である。28~30, 32, 34は4本~6本単位の沈線で頸部文様を構成する。これらは足洗式に比定される土器群である。33は後半末葉の東海系の土器頸部か?。35, 36は細い撚り糸文土器で本類は2点のみであり、どこに位置するか不明である。37, 38は口唇部に縄を施す土器で広径壺か、東中根系の一群。39~64の一群の中で50は松延、印西系か。54, 55は五領式に近い末葉の一群で類例は少ない。3堀の中には松延系の土器も見られる。

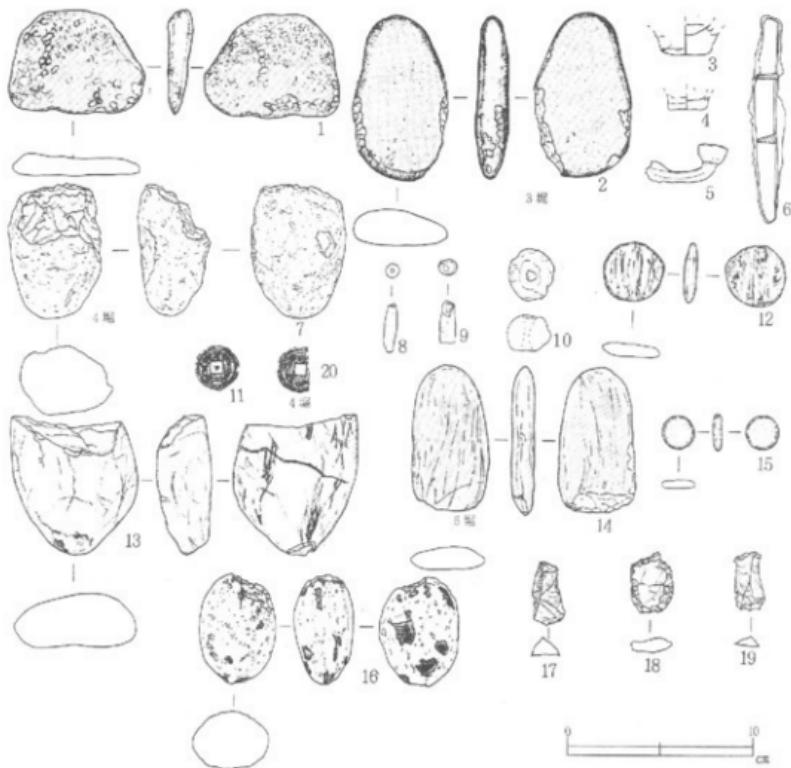
○ 石 器

本館の堀からは10点程の石器が出土している。いずれも川原石を加工した単純な石斧、摺り石状のもの、遊び道具的な物などが出土している。以下簡単に述べて行きたい。

3堀1は川原石で扁平、若干の使用痕磨耗が見られる。2は先端部両側に加工痕と使用、磨耗が見られる。3, 4は手握の土器で祭司用の土器。5は煙管で吸い口は欠失し雁首のみで火皿は朝顔形で銅製。6の刀子は長さ11cmで刃部長8cm棟幅4mm片闊で厚さ3mmでやや新しい時割の所産か、4堀からは石斧7と8.9の管状土錘の小型の物が出土している。10は上製の丸玉で一部欠失、12は薄い摺り石状の円形製品。11は1737年代の元文年間鋳造の寛永通寶。13はやや大形の石斧で一部欠失先端部に磨耗、欠失部分が見られる。12, 13は5号堀出土。14からは先端部片側に剥離面を残す片刃の石器で川原石を利用している。15は子供の遊具化?。16は一部欠失した倒卵形の石器である。17~19は緑閃門岩の石核でかなり細部まで利用している。特に目立つ石製品は検出されなかった。



第15図 第3, 6号堀出土遺物実測図



第16図 第3, 4, 5, 6号堀表探出土遺物実測図

石器・土製品・銅品一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
1	石斧	5.6	5.2	1.2	69	安山岩	3号掘 ×	河原石を利用先端部使用痕をもつ。
2	石斧	8.9	5.2	2.0	125	安山岩	3号掘 ×	河原石を利用。片面加工している。
5	燧管	4.2		0.5	0.2	銅	3号掘 ×	朝顔型の火皿をもつ吸口部欠失。
6	刀子	11.2	1.2	5.5	21	鉄	3号掘 ×	目くきはなし。茎は一部欠失片闊。刃部断面三角形。
7	石斧		4.8	3.8	0.2	安山岩	4号掘 ×	上部欠失ややもろい。
8	管状土錐	2.7	0.7	0.1	2	土 製	4号掘 ×	管状で新しくなる可能性高い。
9	管状土錐	2.3	0.8	0.2	3	土 製	4号掘 ×	〃

石器・土製品・銅品一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚					
10	土玉	2.8	2.4	0.5	10	土製	4号掘×	やや扁平な形状	
11	古鉄				0.25	銅	遺構確認面	表十中、ほぼ完形書体は新しい。	
12	遊具	3.2	3.2	0.7	15	滑石	5号掘×	円形状で子供の遊具?	
13	石斧	6.8	6.6	2.9	200	綠岩	4号掘×	一部欠失する。	
14	石斧	7.8	4.1	1.2	60	綠岩	6号掘×	片面、ハマグリ刃状に加工。完形	
15	遊具?	1.8	1.7	0.5	3	砂岩	6号掘×	子供の遊具と思われる。	
16	石斧	5.9	4.1	3.0	90	安山岩	6号掘×	上方は使用痕で欠失し下方を使用	
17	フレイク	3.3	1.6	1.0	6	緑閃門岩	6号掘×	かなり別離されて石斧に近い。	
18	フレイク	3.3	2.2	0.7	9	〃	6号掘×	加工面をよく残しやや古いかー。	
19	フレイク	3.2	1.6	0.5	4	〃	6号掘×	石斧状に近い。	
20	古鉄				0.25	銅	4号掘3区×	1/2欠失	

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形核法	胎土・色調・焼成	備考
3	手捏	C 2.8	手すくねで指頭で押えたような形態	指頭、ナデ	選、暗褐色、普通	欠失多し
4	手捏	C 2.2	〃	指頭、ナデ	精選、暗褐色、普通	欠失多し

6. 住居跡

本遺跡からは、規模、時期を問わず10軒の住居跡が検出された。これらの住居跡は土塁下から3軒、テラス状部分から2軒、館内部から3軒が検出された。その他時期不明1軒が検出された。時期別に大別すれば弥生時代の住居跡1軒、古墳時代の住居跡3軒、奈良時代の住居跡2軒、平安時代の住居跡2軒、その他住居跡か掘り込みか断定しかねるものが1軒?であった。以下各時代別に遺構について後述していきたい。したがって番号は順不動である。

○ 3号住居跡 (第17図、第18図)

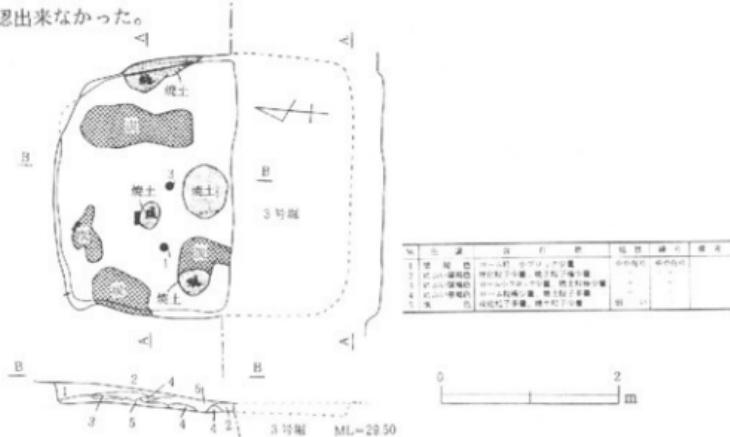
本遺構は、館南側中央部中程から検出された遺構で南側は3号堀に掘り込まれ約半分を欠失している。主軸をN-10°-Wに置き東西約4m、南北3m前後の長方形プランを呈し掘り込みは北側で25cm前後、南側は10cmと浅くなり南傾斜部分に位置していた。床面は貼り床で良く固められ良好な状態であった。炉は明確な掘り込みは認められず円形に焼土が遺存していた部分が相当すると思われる。その他炭化粒子を多量に含む層がかなり散在して検出された。いずれも家屋材料を判断出来る程のものではなく粒のみであった。

炉は前述のとおり掘り込みをもたない地床炉と推察される。

覆土は、5層に分類され黒褐色、鈍い黒褐色、黒色層でローム粒、焼土粒子、炭化粒子が含まれている。5層を除き粘性、締りはやや有る。

遺物は、炉北側から広頸壺と大型の壺が床面に散在して出土している。(第16図) 1は複合口縁部に縦長の細い貼り瘤をもつ広頸壺で四個で等分する。口縁部下頸部は、磨消し胴部は節の細かな羽状繩文を施す。口唇部には大きめの単節の繩が施文されている。2は底部に木葉痕もつ大型の壺で1より細かな羽状構成もつ胴部で有る。3~6は頸部の磨消部に竹管による平行沈線の3、4と5本単位の5が見られる。5は左回りで〔×〕の構成。6は平行沈線を3本単位で横走している。7は複合口縁部破片で頸部に3本単位の沈線が巡る。口唇部には附加状の繩が口縁部から延長して施されている。8~11は附加状繩文が羽状に施されている。12は磨消で頸部。

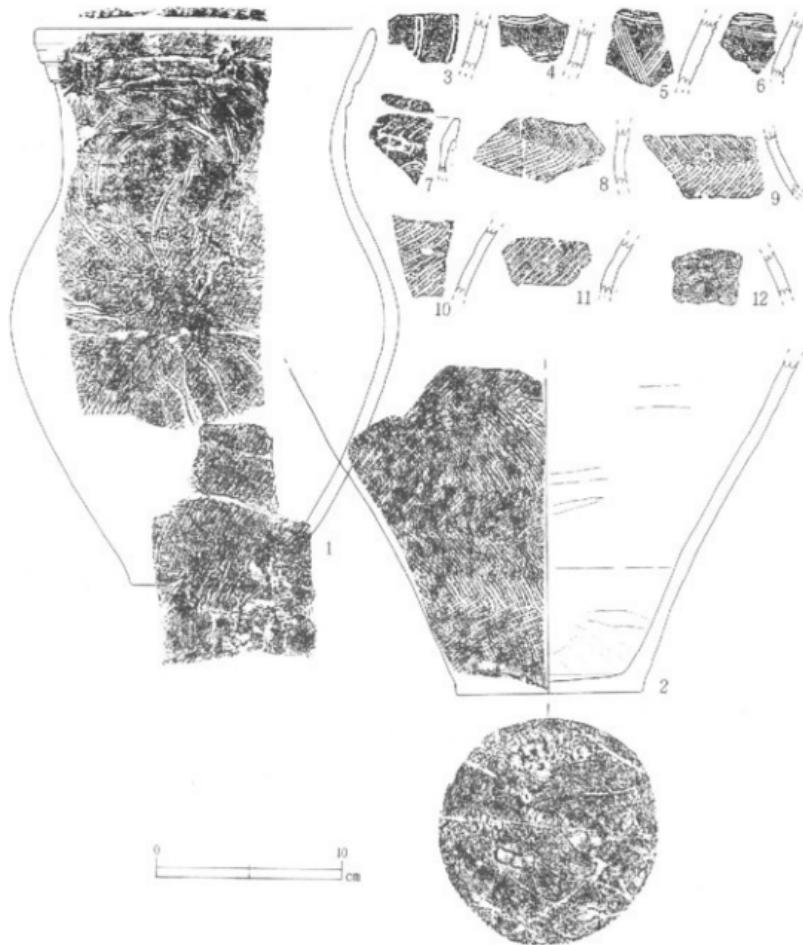
柱穴は確認出来なかった。



第17図 第3号住居跡実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 弥生	広頸壺	A 30.0 B 18.4 C 8.0	長胴形状で二段に複合の口縁部をもつ 2個一組の貼り瘤をもつ。頸部は磨消で 下部に胴部文様帯の無節。端部のループ が横走する。	ナデ 横ナデ 付加条繩文	細石 長石 にぶい黒褐色 普通	50 % 床直
2 弥生	広頸壺	A — B — C 10.0	付加状繩文を底部から施文している。 胴上部欠失。	ナデ 付加条繩文	細石,長石, 暗褐色 普通	覆土中
3 弥生	広頸壺	—	沈線2本を頸部の磨消部に施す。	ナデ, 磨消	褐色, 普通	覆土中
4 弥生	広頸壺	—	〃 黄こんに施す。	ナデ, 磨消	褐色, 普通	覆土中



第18図 第3号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
5	広頭壺		X状の格子区画を頭部にもつ。	ナデ、磨消	褐色、普通	覆土中
6	広頸壺		竹管を指位に施文、頭部	ナデ、磨消	褐色、普通	覆土中

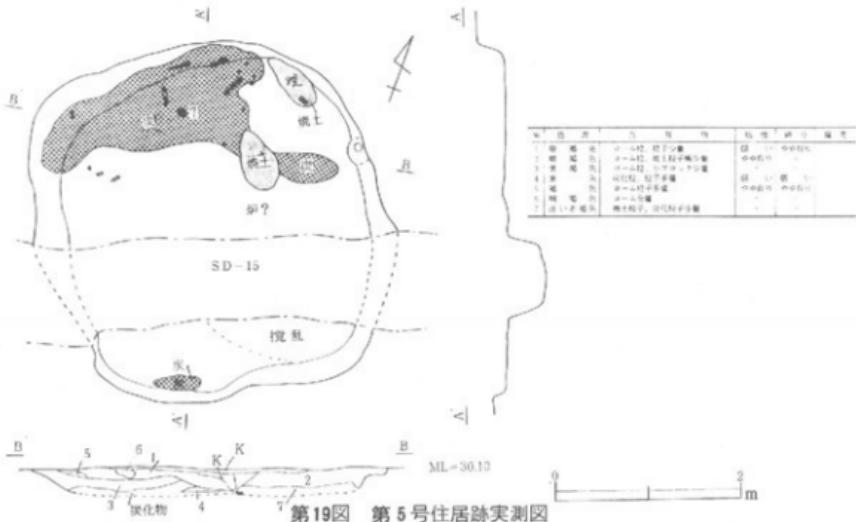
出土土器観察表

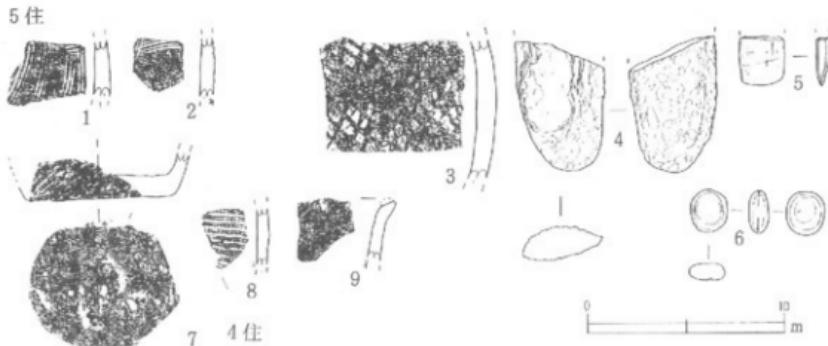
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
7	広頸壺		口縁部で複合口縁で横位にこぶをもつ	ナデ、磨消	黒褐色 普通	覆土中
8	広頸壺		頸部磨消部、裏面に指頭の調整痕をもつ	ナデ、磨消	暗褐色 普通	覆土中
9	広頸壺		付加条繩文、羽状構成	ナデ	褐色 普通	床直
10	広頸壺		"	ナデ	褐色 普通	床直
11	広頸壺		"	ナデ	褐色 普通	床直

○ 5号住居跡 (第19図、第20図)

本遺構は、橢円形状形態で南側よりを15号溝に掘り込まれ全体の2割程を欠失している。東西南北3.7m前後のプランで床面はあまり締りは無い。掘り込み深さは北側では30cm、南側では15cm程で地形が傾斜を示している。床面には炭化物、焼土が散在して認められた。一部搅乱も見られる。炉は焼土と表示下部分は掘り込みをもたない地床炉。覆土は、7層に分類され暗褐色、黒褐色、黒色、褐色、明褐色、淡い赤褐色等に見られた。粘性、締りはやや有る。柱穴は確認されなかった。

遺物も少なく断定しがたいが弥生末十王台式の範疇か?。住居跡を掘り込む15号溝は五領式の溝。8、9は附加状で弥生。遺構の時期は特定しがたいが一応弥生時代末とした。





第20図 第4, 5号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	広頸壺		縦位のスリットが施文される。	頸部磨消	細石褐色 普通	覆土中
2	広頸壺		横位の部分	頸部磨消	細石暗褐色 普通	覆土中
3	広頸壺		付加条縄文をもつ	暗褐色	細石暗褐色 普通	覆土中
7	広頸壺 弥生	A 一 B 一 C 7.4	底部に布目痕あり、底部のみで 時期不能。	ナデ 褐色	細石、 褐色 普通	覆土中 覆土中 覆土中
8	広頸壺		頸部	ナデ	細石、暗褐色、普通	覆土中
9	広頸壺		口縁部に凹凸あり。無文	ナデ	ク ハ ハ	覆土中

石器一覧表

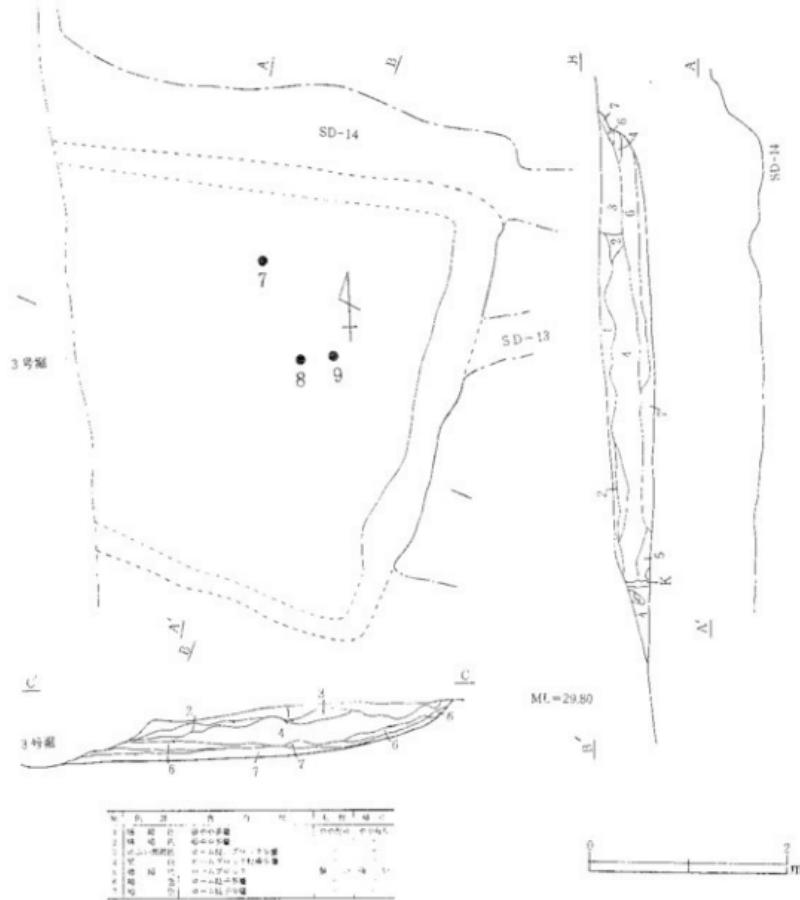
番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
4	石斧	6.2	4.7	1.6	60	安山岩	覆土中	大半欠失。
5	石斧	2.5	2.3	0.7	10	緑泥岩	覆土中	弱いハマグリ刃。刃部のみ。
6	石斧	2.2	1.9	0.9	8	緑泥岩	覆土中	石器? 子供の遊具的形状。

○ 4号住居跡 (第20図, 第21図)

本遺構跡は、南側を3号溝、西側を14号溝、中央部を13号溝、東側を11号溝に掘り込まれ遺存状態は悪い。竈は遺存部からは検出されず住居跡かどうか断定できないが覆土の堆積、色調、遺物から一応住居跡とした。覆土は、8層に分類された。暗褐色、鈍い黒褐色、黒色、褐色で白砂を含む1、2層とローム粒。ブロックの層に分けられる。いずれも粘性、繊りは強い。主軸はN-57°-Eに置き東西4.8m前後である。柱穴は、確認検出されなかった。

遺物は少なく、格子の叩きを残す甕が見られた。5は、弱い蛤刃をもつ緑泥岩の石器先端部の

みである。4は、表面に凹凸をもつ惰性石器で半分欠失していた。6は、円形の遊具的でかなり良く円形に加工されてる。いまで言うおはじきに近い。1, 2は弥生式土器で1は、頸部に3本単位の沈線による縦位のスリットが見られる。2は、2本単位の平行、頸部で沈線が2条、4本単位で横走している。時期は出土した遺物、土層、切り合いから弥生時代末、十上台式の範疇にはいると推察する。



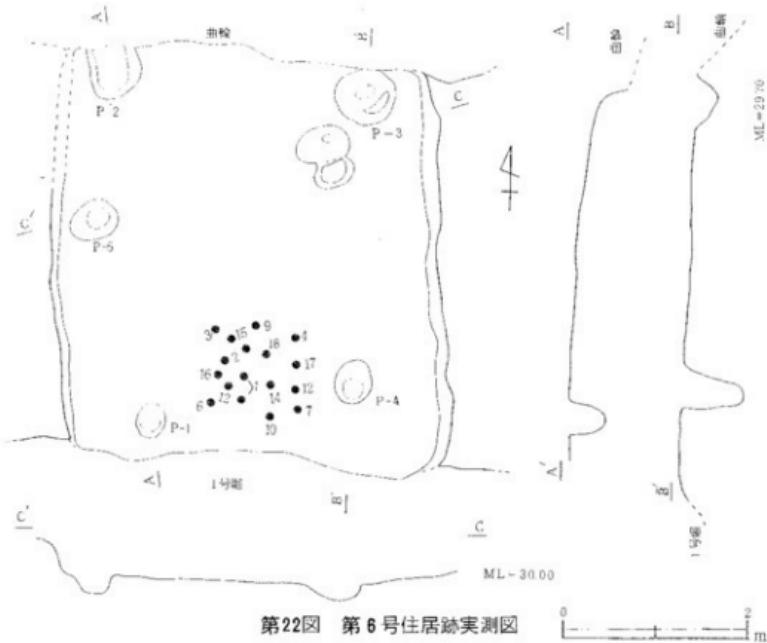
第21図 第4号住居跡実測図

○ 6号住居跡（第22図、第23図、第24図）

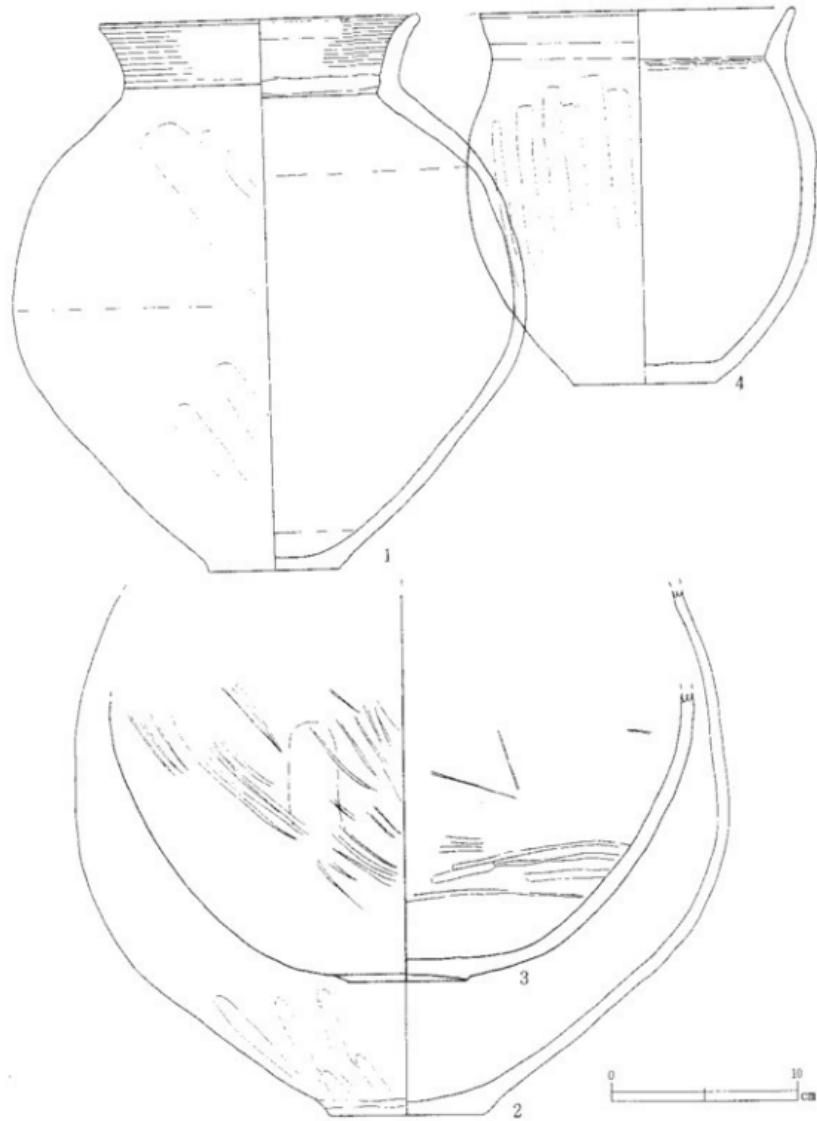
本遺構は、北側の土塁を調査したさい検出された遺構で拡張してプランを確認した。主軸をN - 20° - Wに置き東西約4.2m、南北約5m前後の長方形プランを呈す。北側で立ち上がりが30cm程確認された。遺存していた土層は3層で繋り、粘性はやや有る。（土塁の土層参照）床面はほぼ平坦で貼り床で中心部は繋りは良い。炉、竈は確認されず1号堀、又は土塁外側で削平されたと思われる。柱穴は4ヶ所確認され径40cm前後のものと60cm前後のふたとうりに分かれともに円形状を呈する。深さは25cmから65cmと不規則で有る。その他P2、P5がみられた。これらの性格は不明で有る。

遺物は、南側に投げ込み状に一ヶ所に集中して出土している。甕は胴部球形状から長胴気味に変化が見られ口縁部は〔く〕の字状に変化していく。小型の甕も同様な変化を示す。壺は、碗状のものと口縁部短く外反するものが見られ、これらは赤彩が見られる、須恵器高壺は短冊状の透かしをもつ脚部と弱い降帯を2条めぐらす坏部が有る。坏部は全体に深い器形で有る。その他、

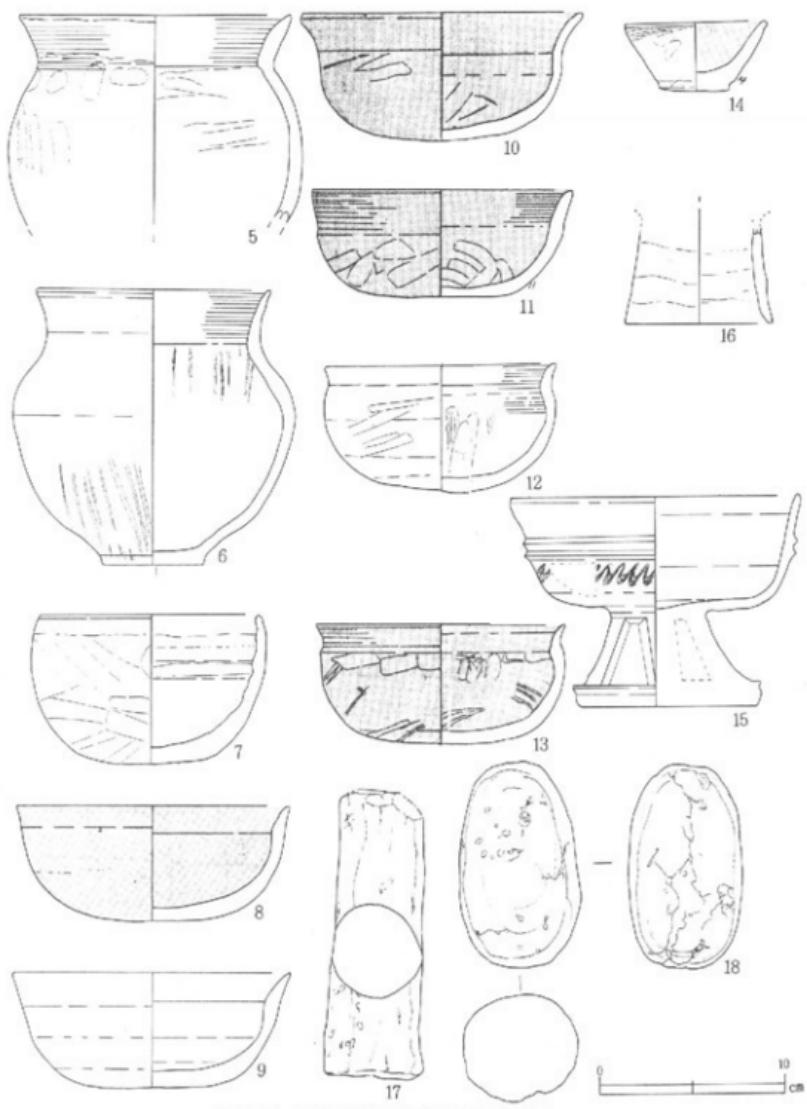
支脚、打製石斧、小型の猪口状鉢等が見られた。これらの遺物から本遺構は若干の投げ込みがあり遺物には和泉式と鬼高式が混同し見られた。遺構の時期は和泉Ⅱ式が妥当で有ろう。



第22図 第6号住居跡実測図



第23図 第6号住居跡出土遺物実測図



第24図 第6号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A 28 B 7.1 C 7.2	ほほ球形状器形に近い甕で頭部は弱くくびれ口縁部はやや長目に外反し口唇部は丸く収めている。	ナデ ヘラケズリ	細石、スコリア 褐色 普通	90% 床直
2	甕 土師器	A — B — C 8.6	ほほ球形肩を出す大型の甕で口頭部を失す。内面剥落多い。	ナデ ヘラケズリ	細石、スコリア 淡い赤褐色 普通	60% 床直
3	甕 土師器	A — B — C 6.2	小さな底部から球形状胴部に移行するが大半を失すため不明。器肉の薄い大型の広頸甕。	ナデ ヘラケズリ	細石、雲母、スコリア 普通	50% 覆土中
4	甕 土師器	A 17 B 20 C 7.5	やや長胴丸味の小型甕で頭部のしまりは弱く口縁部は外反。口唇部は丸く収める。内面剥落多し。	ナデ ヘラケズリ	スコリア、砂 赤褐色 やや悪い	70% 床直
5	甕 土師器	A — B 15.2 C —	小型の甕で底部及び胴部の大半を失す。口縁部は外反。口唇部のみ丸く粗雑。	ナデ 横ナデ ヘラケズリ	細石、スコリア 黄褐色 普通	30% 覆土中
6	甕 土師器	A 12.5 B 14.8 C 5.6	小型の甕。底部は小さく円形状で胴部へ移行し頭部は弱い。口縁部は弱く外反し長目に伸展している。	横ナデ、ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ	細石、スコリア に似た赤褐色 普通	95%
7	碗 土師器	A 12 B 8.0 C 4.5	平底気味の底部から内湾して立ち上がり口縁部は内傾し器肉を減らす。口唇部は薄い。内外赤褐色。	ナデ ヘラケズリ	細石、スコリア 赤橙色 普通	60% 床直
8	土師器	A 7.2 B 14.2 C 4.2	瓶に近い器形で体部は円形状口縁部。若干外反。口縁部は丸く収める。内外赤褐色。内外とも剥落多し。	ナデ	砂、スコリア 赤褐色 普通	和泉 97% 床直
9	土師器	A 6.1 B 15 C 6.1	瓶に近い器形。付部はつぶれた球形。内側に稜をもち口縁は外反し、口唇部尖る。砂を多く含む。	ナデ	砂、スコリア 黄褐色 普通	和泉 70% 床直
10	土師器	A 15 B 6 C 3.5	丸味をもつ底部から内湾して立ち上がり口縁部は長日で外反し口唇部は丸く収める。内外赤褐色。	ナデ ヘラケズリ	スコリア 淡い赤褐色 普通	60% 覆土中
11	土師器	A 14.8 B 5.8 C 8.0	安定した平底から内湾して立ち上がり直立気味に口縁部に移行し、口縁は若干開く。内外赤彩。	ヘラケズリ ナデ	細石、スコリア 淡い赤褐色 普通	99% 覆土中
12	土師器	A 12.6 B 6.6 C 3.0	瓶に近い形態で、口縁は短く外反し、口唇部は丸味をもつ。不安定な底部。輪積み。	ナデ ヘラケズリ	砂、スコリア 赤褐色 普通	95% 床直
13	土師器	A 13.5 B 6.5 C 3.5	瓶に近い器形で、口縁部短く外反し口唇部尖る。表面とも赤彩。	横ナデ ヘラケズリ	スコリア 赤褐色 普通	60% 覆土中
14	猪口 土師器	A 7.6 B 3.3 C 3.8	合付状の小型の鉢形土器で、直線的に口唇部に移行し、赤彩が施されている。	ナデ 横ナデ	スコリア、細石 に似た赤褐色 普通	95% 床直
15	高环 須恵器	A 15.6 B 11.4 C 8.5	脚に短冊のスカシが3ヶ所位置し、环部は筒状形態で底部は平で、体部は直立的に立ち上がる。体部に2列の隆起、下位に指頭状文を施す。振入品か?	ナデ ミガキ	細石、砂 青灰色 良い	60% 床直
16	高环? 土師器 長頸?	A — B — C 8.0	直立的に立ち上がり高环になるのか、鉢形土器なのか不明である。内側赤彩。反対で長頸になるか?	ナデ	細石、長石 黄褐色 普通	40% 覆土中

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
17	支脚	15.4	5.0	4.9	440	土製	復土中	にぶい赤褐色。円形状や粗雑な作り。
18	石器	11.0	6.2	5.6	560	安山岩	床直	両端に若干の摩耗痕有り。

○ 9号住居跡 (第25図、第26図)

本遺構は、東北側のテラス状台地の突端、北側に傾斜を示す位置から検出された。この部分がそれ程館に削平、変化をみなかった事の証でも有ろう。主軸をN-12°-Wに置き東西5m、南北5m前後でやや菱形気味の方形プランの遺構で有る。壁面は南側では45cm、北側で25cmを測る。中央部には炭化粒子を多量に含む層が大きく広がる。僅かに粘土、焼土を含む。その東側には径90cm程の円形状の後世の掘乱が有り1m程掘り下げた所洋釘が出土した。以下調査を中断した。その他焼土、炭化物が散在して出土しているが主構造物に該当する炭は検出されなかった。遺存炭化材の出土状態は全面的に散在している為主部材を抜き取り後焼却したと推察される。散在するものは、も垂木系統の部材と推察される。床面は中央部を中心にかなり良好な締りをもつ貼り床で有る。

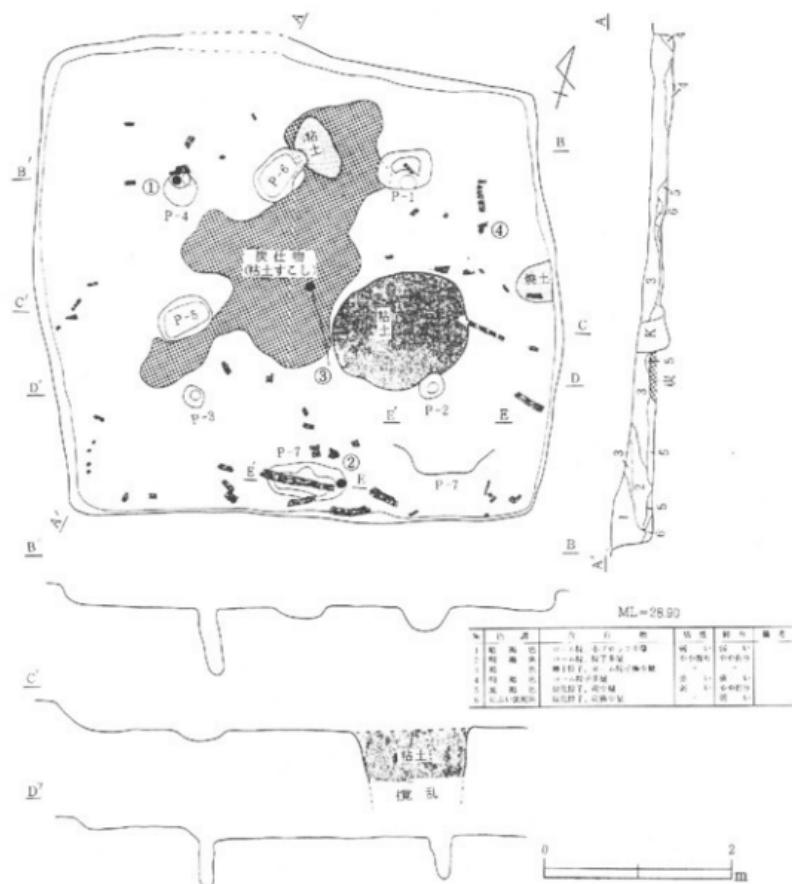
柱穴は、6本検出され、北、南側には3本づつ認められた。この形態、構造は理解出来ないが補強材の一様?。P1を除き径20cm程の円形で深さは40~70cmと深い。P1は、径55cm、深さ25cmを測る。他の柱穴とは差違が認められる。

覆土は、6層に分類され暗褐色、明褐色、褐色、黒褐色、鈍い黒褐色等でローム粒、ブロック、焼土粒子、炭化粒子、炭等を含む。粘性、締りは弱い。自然埋積の感じである。

窯、炉は検出されず炭化物の下にがらしき部分が見られたが断定は出来ない。掘り込みは無く地床炉の可能性は有る。

遺物は、全体的に散在して出土している。1は、確認トレンチを入れた部分から出土した土器で土圧でかなり細片化していた。復元により70%程度旧状に復した。かなり変形し胴部は球形状で頸部は「く」の字状、口縁部は長めで強く外反、部分的にヘラ調整が施されている。床面から出土している。3は、中央部の炭化物の下から出土し鉢形に近く口縁部は弱く外反する。口縁部は内傾し口唇部は尖る。胴部はややつぶれた感じ、頸部はくびは弱く内側には調整痕が残る時期の土器で有る。内側には、整形の指頭痕が残る。2は、南側の壁面近くから出土した壺形土器で胴部は長胴気味に近い。2は完形。体部ヘラケズリを持ち体部は外反して立ち上がる碗で口縁部

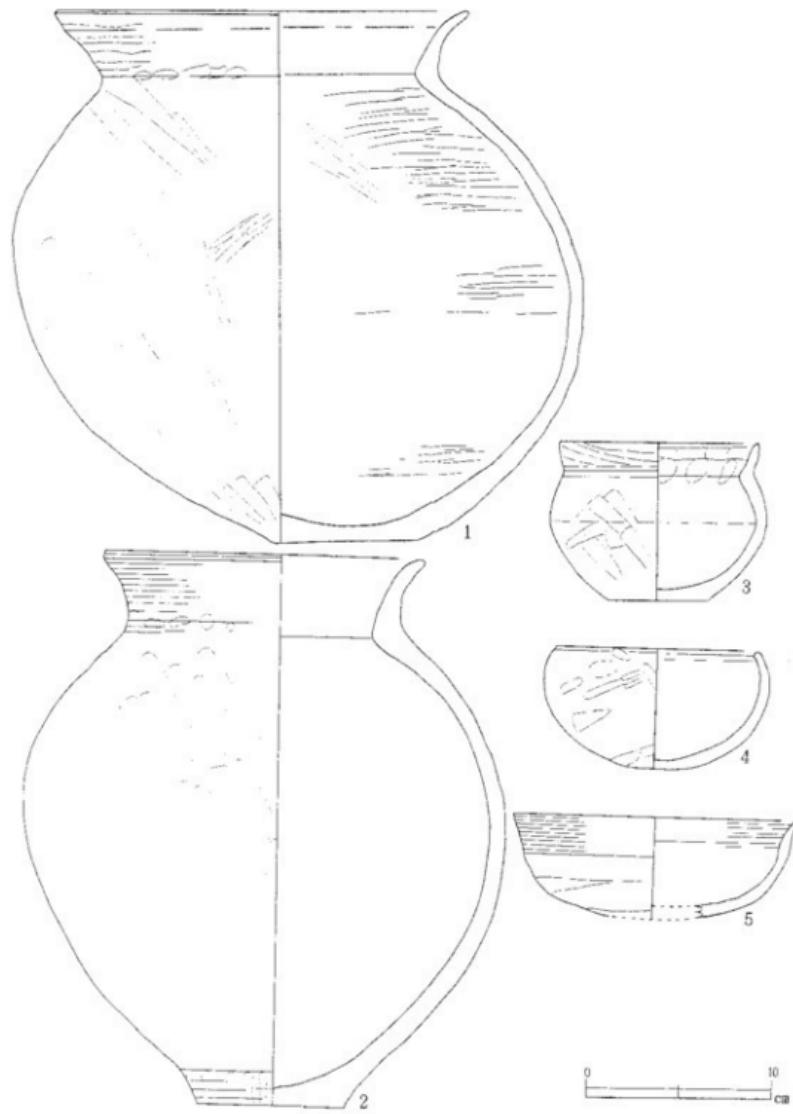
は弱く外傾し口唇部は尖り氣味。横ナデが見られる。5は坏で縁部外反する。



第25図 第9号住居跡実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A 28.8 B 30.0 C 8.0	かなり細片化した甕で、ゆがんだ球形胴部で頸部は短く口縁は外反し口唇部は丸く収まる。復元によりほぼ原形を保つ。	ナデ ハケナデ	細石、スコリア 淡い赤褐色 やや不良	80% 床直



第26図 第9号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
2	甕 土師器	A 11.1 B 8.5 C 6.0	小型でややつぶれた器形で口縁部は短く直立気味で頸部のくびれも弱い。	ナア ヘラケズリ	細石、スコリア、精選にない赤褐色 普通	100%床直
3	甕 土師器	A 11.3 B 6.5 C 3.0	甕型土器で口縁は内傾し、つぶれた円型状形態。やや粗雑なつくり。 頸部は「く」の字状、浅鉢形態。	ナデ ヘラケズリ	砂、スコリア 黒赤色 やや不良	99%床直
4	甕 土師器	A 15.4 B — C —	赤採が内外にみられる調で平底気味の 底部から立ち上がり口縁部は弱く内反し 口唇部は丸みをもつ。焼成は良い。	横ナデ ナデ ヘラケズリ	長石、スコリア 赤褐色 ヘラケズリ	30%覆土中
5	壺 土師器	A 17. B 6.0 C —	口唇部は薄く、外反し尖る。体部は直立 状の立ち上がり。	ナデ 横ナデ	長石、スコリア 赤褐色 ヘラケズリ	30%覆土中

○ 7号住居跡（第27図）

本遺構は、西側の土塁したから検出された遺構で主軸をN-5°-Wに置き東側は内堀、西側は外堀状掘り込みのため不明。南北3.5m前後でやや小型の遺構か？。覆土は、土塁土層の下層部分が該当する。色調は黒褐色、暗褐色で締り、粘性はやや有る。柱穴は確認出来ず南側にピットが4ヶ所見られたがプランから柱穴の可能性はない。P4は径25cmは70cmを測る。その他はいずれも浅く10cm前後で有る。床面は貼り床で中心部のみ締りをもつ。

竈は、検出されないが北



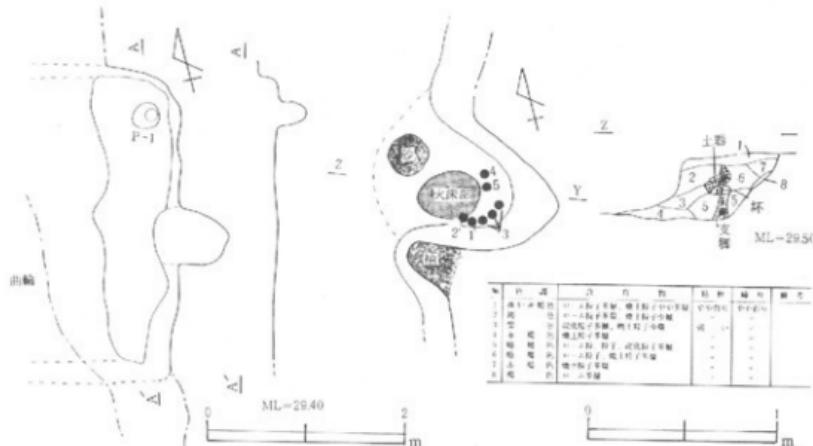
第27図 第7号住居跡実測図

側の床面ぎりぎりに砂質粘土の断片がごく少量見られた。砂質粘土が竈の一部であれば本遺構は鬼高期遺構の時期の所産と理解される。遺物は弥生式土器破片が1点みられ、大半は土師器片である。

○ 8号住居跡（第28図、第29図）

本遺構は、7号住居跡の北側4mに位置し土壘下端から検出された遺構で東側の一部のみ遺存していた。西側は畑耕作の為に消失し全体のプランは不明である。主軸をN-15°-Eに置き南北3.3m程のプランを呈する遺構と推定される。東側中央部には外側に掘り込む竈が見られた。短い袖部が付設されていた。掘り込みはU字形状で火床部は中心部に位置は僅かに掘り込む。土層は、淡い赤褐色、褐色、黒色、赤褐色、暗褐色等8層に分けられた。焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子等の土層が見られ掘り込みの深さは35cm。

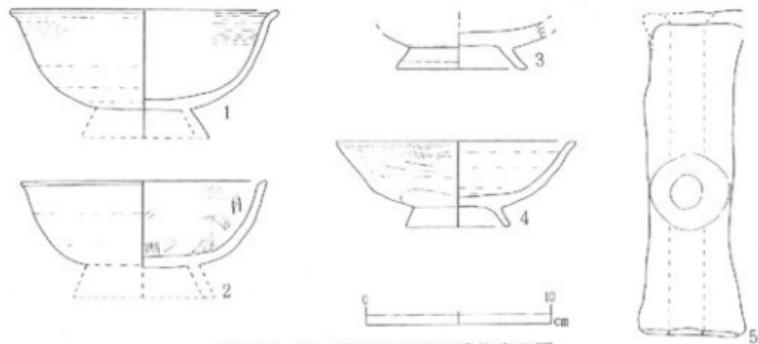
遺物は、いずれも竈周辺から出土している。いずれも台付窯で碗に近い器形と皿に近いものが認められた。高台はいずれも「ハ」の字状に張り長めのもの1、2と短い3、4が見られる。5は羽口で竈支脚として使用されていた。本遺跡からはその他2号住居跡から2本出土している。羽口は長さ17cm、孔部は径1.7cmを計測する。時期は真間期。



第28図 第8号住居跡実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	高台付土器	A 13.4 B — C —	底付部、高台部欠失している碗に近い器形の土器で内面は丁寧に調整している。	ナデ	長石、砂 暗褐色 良い	80% 覆土中 K中
	高台付土器	A 14.5 B — C —				
	高台付土器	A 14.5 B — C —				



出土土器観察表

第29図 第8号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
3	高台付 土師器	A 一 B 一 C 8.1	付高台部はやや短く「ハ」の字状に強く開きやや短い広部は大部分欠失で不明。	ナデ	細石、スコリア 長石 褐色 良い	15% 覆土中 K中
4	高台付 土師器	A 12.9 B 4.6 C 5.6	皿に近い器形で「ハ」の字状台付で口クロ水引き調成?付部は直線的に外反して立ち上がり口肩部は丸味をもつ。器肉は全体に薄い。	ナデ ロクロ成形	長石、細石 黄褐色 普通	60% 覆土中 K中

土製品一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
5	羽口	17.4	5.1	2.0 5.8	439	土製	K中	上部はラッパ状に開く。かなり使用した様相で最後は支脚として利用されている。奈良時代

○ 1号住居跡 (第30図、第31図)

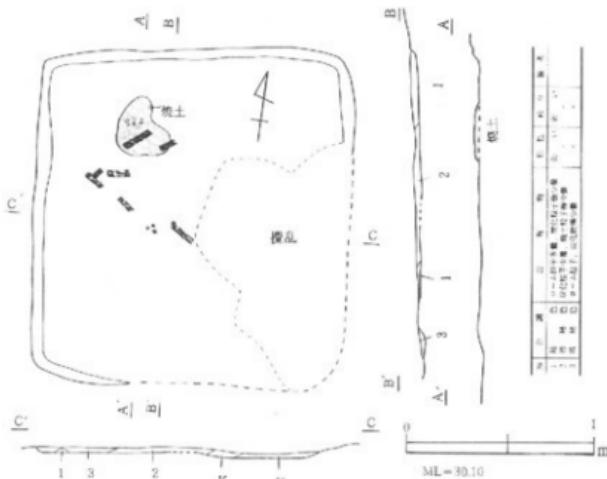
本遺構は、館内部から検出された住居跡で東側の大半を重機により消失、搅乱されている。遺存部から推定すれば主軸をN-5°-Wに置き、東西3.5m、南北3.6mの方形状プランを呈し掘り込みは5cm前後で床面は貼床で中心部に縞りをもつが周辺はかなり弱い。床面には炭化物と焼土が見られた。柱穴は、確認出来ず竈も東側に位置すると推察されるが、搅乱の為検出できなかった。



第30図 第1、2号住居跡出土遺物実測図

覆土は、3層で褐色、暗褐色等でローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を含む。粘性、締りは弱い。床面はほぼ平坦である。

出土した遺物は31図1、2でかなり新しい形態の壺口縁部で口唇部はやや下方に下がる。平安時代後半の遺物と推定され時期も同様であろう。その他弥生式が1片出土し、附加状1種の繩をもつ。



第31図 第1号住居跡実測図

出土土器観察表

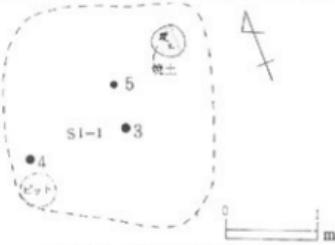
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	壺 土器	A — B 15.2 C —	頸部のしまってやや大型の壺の口縁部と思われる。大半を欠失している為、不明な点が多い。	ナデ ヘラミガキ ミガキ	細石、長石、スコリア 赤褐色 普通	10% 覆土中
2	広頭壺	—	附加条の縛をもつ。胴部?		細石・長石・普通	覆土中

土製品一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
3	羽口	14.2	7.1	1.3 3.2	450	土 製	床 直	ほぼ完形。ラッパ状の形態、黒褐色。S1-2
4	羽口	13.9	4.5	1.5	210	土 製	床 直	半分欠失し中央にかなり大きな孔石をもつ。"

○ 2号住居跡 (第31図、第32図)

本遺構は、館の東北側墨部から検出された遺構で床面と焼土のみ、明確なプランは捉えられた。遺物は羽口が2点出土し本遺構が銀治関係に係る遺構と推察され遺物形態等から平安時代前半の時期推察される。かなり削平を受けピット等が掘り込まれており館の時代とは調査時の観察から時間的に差違があると考えられた。



第32図 第2号住居跡実測図

5は、滑石のやや未製品に近い〔く〕の字状形態の勾玉で重さ3才を測る。床直で出土。

○ 10号住居跡 (第33図)

本遺構は、館北西側のテラス状部分から検出された遺構で大半を畑耕作の為削平を受け、約半分を失する。一部は床面のみで明確な範囲は不明である。主軸をN-3°-Wに置き遺存する範囲は東西2.8m、南北3mで東側に周溝をもつ。規模は不明。床は貼り床で締りは良い。覆土は褐色1層で粘性、締りは強い。柱穴と考えられる穴は検出されなかった。竪は、確認出来ず北壁面に存在したか。

遺物は20片程出土したが時期を決定する遺物はない。33図に図示した猪口状の底部は灯明皿の可能性がある。これから推察すれば平安時代後期に該当する。



第33図 第10号住居跡実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎上・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A — B — C 2.9	底部の小さな甕形 土器と推定される。	ナデ	長石・褐色・普通	床直

7. 土坑

本遺跡からは、47基の土坑が検出された。これらは時期、性格は多様で分類は最後にし、番号を付した順に後述していく。時期は縄文時代、古墳時代、中世、近現代と多様である。総じて遺物は少ない。

○ 1号土坑 (第34図)

本遺構は1号建屋の西側、館の北西部土壘近くに位置し検出された円形状の形態で径2.1mで掘り込みは15cmで壁面は緩やかに立ち上がり底部幅1.5mで有る。底面は平坦でやや締りは有る。遺物は、土師器甕が3片程出土している。その他川原石が7個が有る。覆土は2層で黒褐色、明褐色が見られれば水平に堆積していた。粘性、締りは強い。

これらから、本遺構の時期は古墳時代の遺構の可能性が高い。

○ 2号、2号'土坑 (第34図、第35図)

本遺構は井戸状遺構形態で地山の粘土層に達していた。北側の掘り込みは浅い入り口状形態で

同一の可能性が強い。2号遺構は径2.3mで深さ2.4mで底部径50cmで粘土層迄掘り込みU字状形態、井戸状のプランを呈する。覆土は総体的にはレンズ状を呈し自然堆積と推察される。2回前後の埋積が推察される。色調は、黒色、黒褐色、鈍い黒褐色、褐色、明褐色、暗褐色、赤褐色等11層に分類された。ローム粒、粒子、焼土粒子、炭化粒子、炭化物、粘性、縦りはやや有る。

遺物は甕破片が183片、鉢、高杯、壺56片が出土している。川原石125片が出土している。これらの遺物からは本遺構の性格、利用方法は検討がつかない。建屋の東側から検出されていることから時期は建屋の時期と同じと推察される。遺物は縄文時代の田戸下層式1.2と3.4.5.は弥生式土器で付加条の縄文と5の頸部がある。



第34図 第2号土坑出土遺物実測図

○ 3号土坑 (第34図)

本遺構は建屋隅部から検出された倒卵形状プランで長径1.1m、幅80cmで掘り込み深さは12cmで壁面は直立気味で有る。土層は1層で黒褐色でローム小ブロックをごく少量含む。粘性、縦りはやや有る。遺物は皆無で時期、性格を特定する物はない。

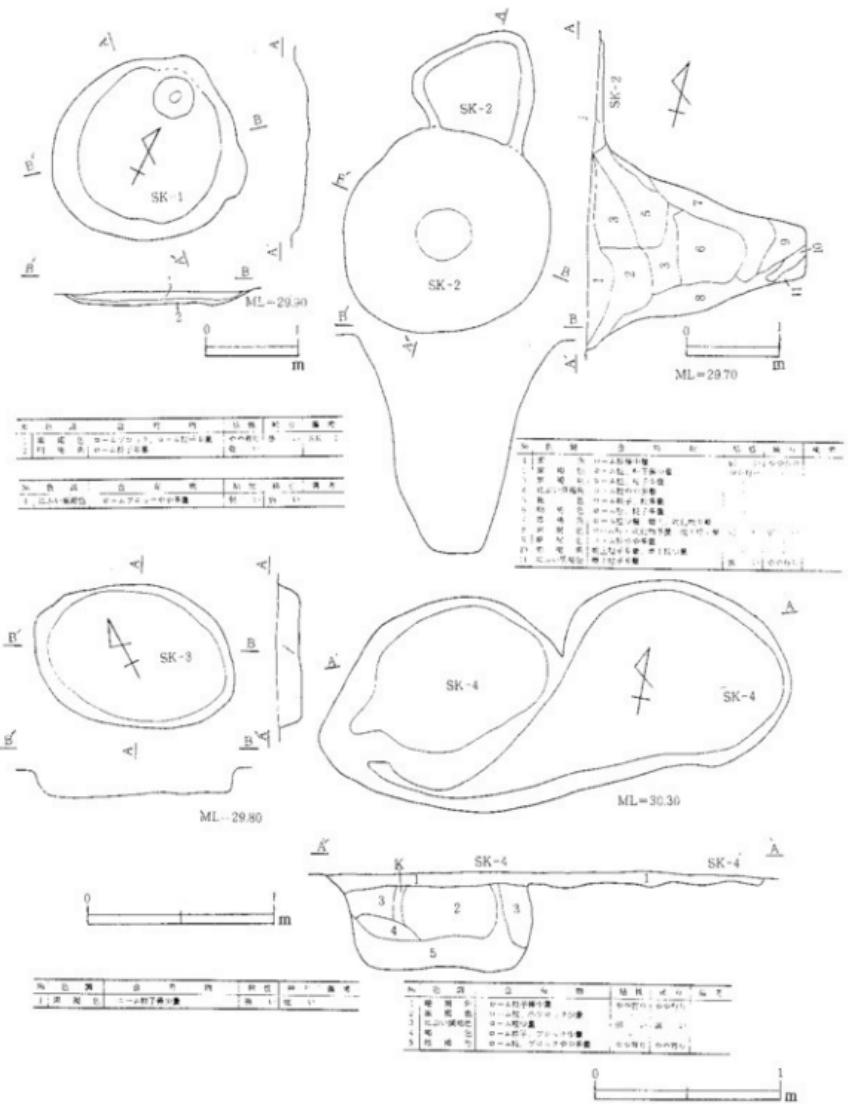
建屋上層と比べると覆土から建屋以前の遺構と思われる。

○ 4号、4号'土坑 (第34図)

本遺構は、建屋南側から検出された遺構で東側に浅い溝状が西側迄続、その下に本来の土坑4が存在する。覆土からみると1層は溝状遺構の可能性が強い。2層から5層が本来の掘り込みで一部木の根の攪乱が入る。色調は暗褐色、黒褐色、鈍い黒褐色、褐色等でローム粒子、小ブロックを含む。粘性、縦りはやや有る。底面の縦りは強い。

遺物は、甕48片と壺17片が見られた。その他縄文土器、弥生式土器が出土した。その他管状土錘が見られ川原石の小さい物が16個出土した。

時期は古墳時代後半鬼高期の遺構と推察する。



第35図 第1, 2, 2', 3, 4, 4'号土坑実測図

○ 5号土坑（第36図）

本遺構は、建屋南側11mに位置し検出された遺構で径1.5mの円形状プランで掘り込みはやや緩やかな壁面を呈している。深さは30cmでやや深い。覆土は5層で投げ込み的感じの埋積状態である。色調、含有物は黒褐色、赤褐色、鈍い赤褐色、黒色、明褐色と5層に分類された。ローム粒子、焼土粒子、ロームブロックを多量に含む。2層と3層は同様な色調であるが焼土粒子多量と少量の違いである。粘性、締りはややある。遺物は甕の破片1点のみである。時期は出土遺物から古墳時代前後か。底面の締りはややある。

○ 6号土坑（第36図）

本遺構は、5号土坑の東側15mに位置して検出された。径90cm程の円形状形態出墻面はだれて底面は幅70cm程で凹凸がある。締りは弱い。

覆土は1層のみで黒褐色でローム粒をごく少量含む。粘性、締りは強い。底部は締りは強く、出土遺物は皆無で時期は不明である。

○ 7号土坑（第36図）

本遺構は、6号土坑の東側5mに位置し径1.3mの円形状プランで壁面はややだれ気味で底部幅1.1mで底面は弱く中央部が落ち込む。底面は締りは良い。覆土は人工的な埋積で7層に分類された。色調、含有物は黒褐色、鈍い褐色、暗褐色、褐色等でローム粒子混入の差である。粘性、締りはややある。土師器甕18片、壺3片、川原石15個が出土している。時期は古墳時代か？。

○ 8号土坑（第36図）

本遺構は、7号土坑の東側に位置し径80cm程の円形状プランで底部が若干膨らむ。謂わば縄文のフラスコ状形態。底部の幅は90cm程で壁面の立ち上がりは内部に食い込む。底面は総じて平坦、締り強い。覆土は、4層で自然埋積状、色調は黒褐色、黒色、暗褐色、明褐色で粘性、締りはややある。出土遺物は土師器甕、壺等が出土している。これらから本遺構は古墳時代の可能性が高い。

○ 9号土坑（第37図）

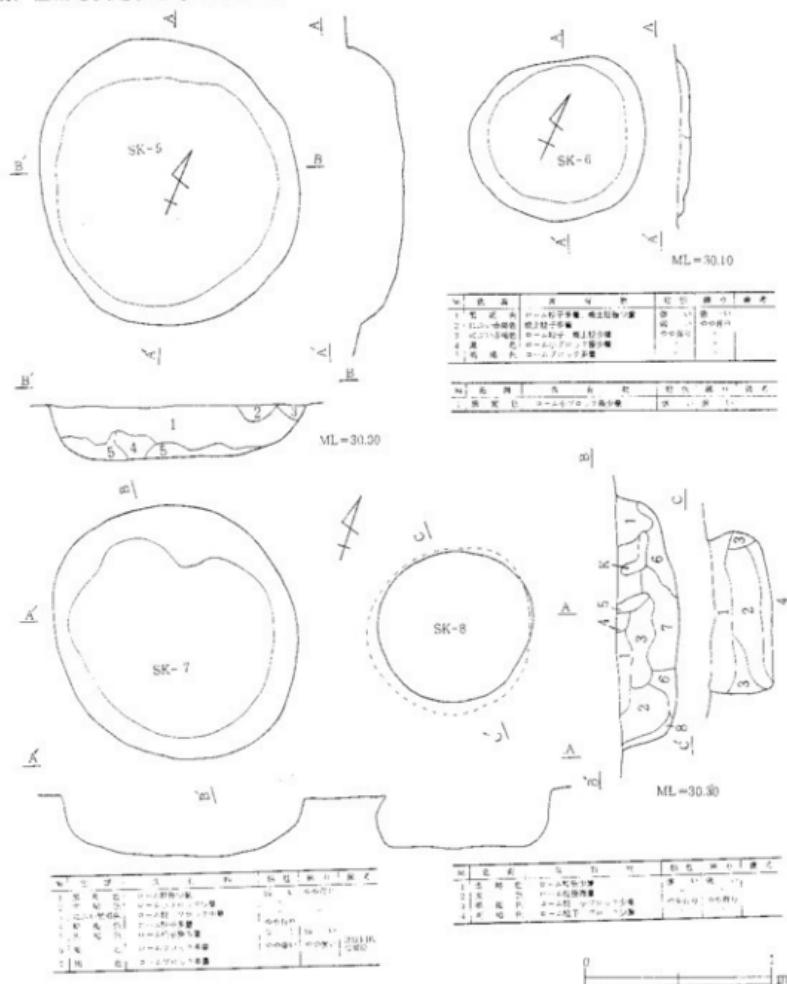
本遺構は、館東南の3号堀の南側から検出された土坑で長軸1m、幅75cmの変形な長方形形状プランを呈している。掘り込みは55cmと深く底面長さ60cmを計り締りは強い。壁面は垂直に近い立ち上がりで有る。覆土は、3層で色調、含有物は暗褐色、褐色、鈍い暗褐色層、ローム粒子、ブロックの混入の差。粘性、締りは強い。

遺物は、皆無で時期を特定出来る資料はない。

○ 10号土坑（第37図）

本遺構は、9号土坑の東側に近接し検出された遺構で主軸をN-13°-Eに置き東西1.9m、幅1m長方形プランの遺構である。壁面は垂直に近く中央部がやや深い。90cmを測る。覆土は4

層に分類され色調は暗褐色、褐色、明褐色等に分類された。いずれもロームブロック、粒子の混入の差で埋積が短時間で進んだ事を示す。粘性、締りは弱い。底面は締りをもつ。遺物は皆無で時期、性格を決定するものはない。



第36図 第5, 6, 7, 8号土坑実測図

覆土からは墓壙の可能性が推察されるか？。

○ 11号土坑（第37図）

本遺構は、ピット群の集合体と推察されるが一応1基の土坑として後述する。楕円形状で東西19.5m、南北1.5mで東側が1.1m程の深さをもつ。建屋、柵列の一部と推察される。覆土は、自然堆積と推察される層序を示す。黒褐色、明褐色、褐色、黒色、鈍い黒褐色でローム粒子、ブロックの混入量の差で有る。粘性、強く締りはやや有る。

遺物は、弥生式土器が3片、土師器甕9片、坏5片、川原石13個が出土しているが図示出来る遺物はない。これらから時期、性格を特定すべき物はない。北西隅部の柵列の一部か。

○ 12号土坑（第37図）

本土坑は、11号土坑の東側に位置し径95cmの円形状プランで壁面は垂直に掘り込まれ深さは30cmを測る。底面は平坦で締りは強く、良好で有る。覆土は、2層で自然埋積と推定される。色調は、鈍い黒褐色、黒褐色の2層で粘性、締りは弱い。遺物は、甕6片、坏2片が出土している。これらから時期、性格は決定出来ない。

○ 13号土坑（第39図）

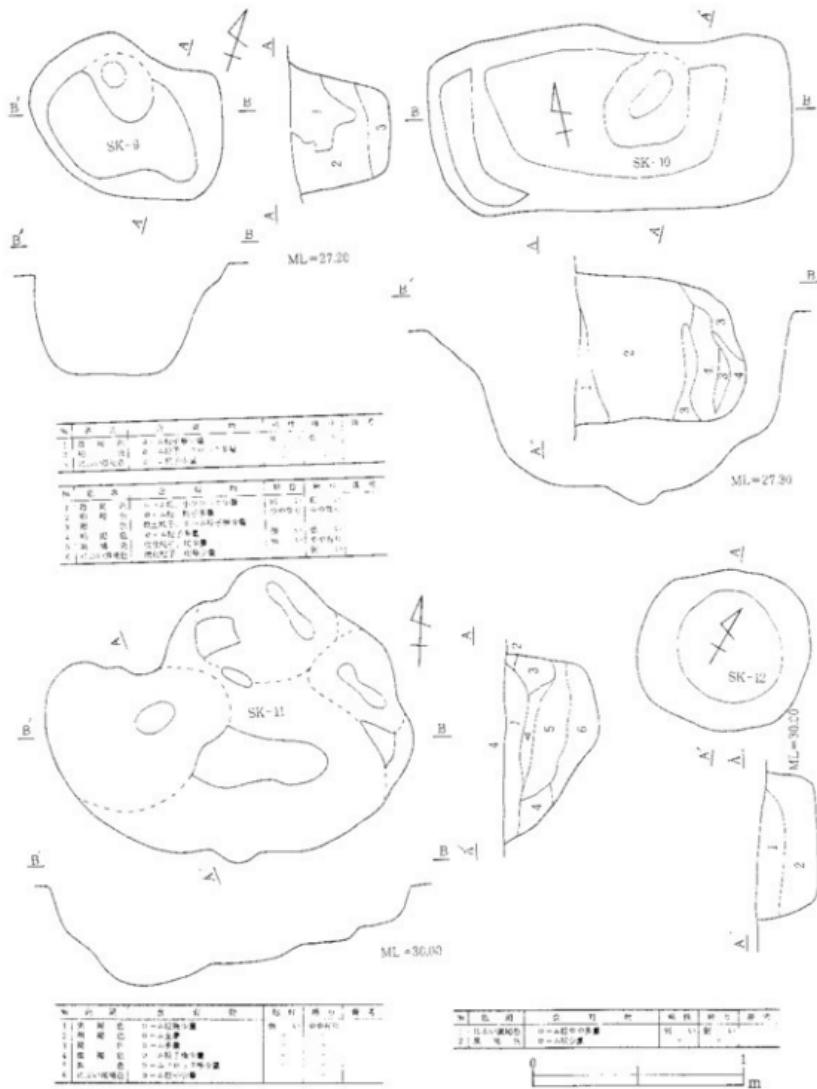
本遺構は、10号土坑の北側に位置し検出された遺構で有る。一部3号堀に掘り込まれている。やや楕円形長で径1.3m、短径1mで掘り込み深さは55cmで底部は三角形状、凹凸があり中央部がやや深い。形態的には柱穴の感じで有る。出土遺物は皆無で時期を特定する物はない。柵列のはし、もしくは楕的な建物の柱穴の可能性がある。

○ 14号土坑（第39図）

本遺構は、13号土坑の北側に位置し13号土坑と連続する土坑と思われる。溝中央に検出され長径1m、短径80cm、底部は卵形状で長さ50cmを測る。掘り込み深さは80cmで底部の締りは強い。柵列の一部の可能性が強い。覆土は3層で締りは弱い。締りはやや有り13号からの連続性をもつ他柵列、櫓の一部と推察される。出土遺物は甕1、瓦1、陶器1、川原石2個が出土している。遺物から江戸時代以降の所産と理解する。

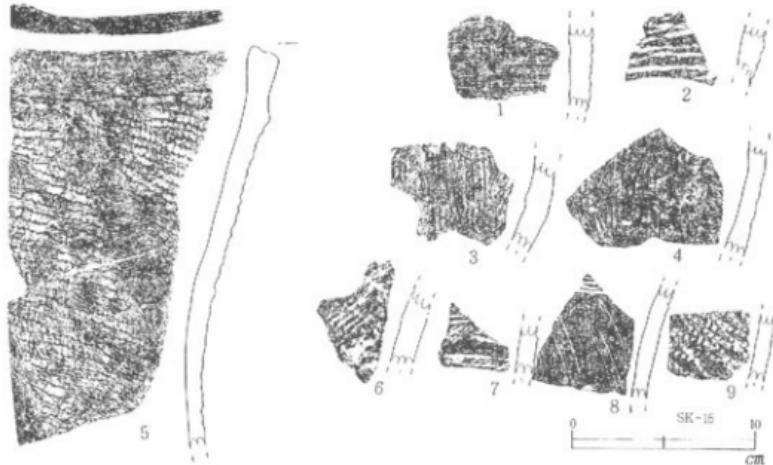
○ 15号土坑（第38図）（第39図）

本遺構は、館中央部やや東側に検出された。径2.1mの正円形のプランで掘り込み深さは30cmで底部はほぼ平坦で締りは良い。壁面は垂直に近い掘り込みで有り覆土は、自然埋積と推定出来る。土層は、5層に分類され褐色、黒褐色、鈍い黒褐色、黒色、明褐色等5層に分類された。ローム粒子、ブロック混入の差で有る。1層を除き2層からは粘性、締りは強い。遺物は、繩文式土器が100片程出土している。床面からは38図に示す遺物が出土している。いずれも破片で土師器が55片、川原石が156片程見られた。5は加曾利E N式の弱い波状口縁をもつ土器で口縁部に磨消部、胴部は同様に微隆起線を垂下させて文様帯を形成する。1、2はアナグラ属の貝殻沈を



第37図 第9, 10, 11, 12号土坑実測図

もつ田戸下層式の洞部破片、3、4、6は器面に擦痕をもつ茅山式土器で有る。胎土にかなりの繊維を含む。7～9は弥生式土器で7、8は頸部で格子状モチーフをもつ、8は頸部上端に半裁竹管の平行沈線、頸部に2本単位の沈線が磨消部にやや斜めに間隔を置いて施されている。9は附加状一種の縄を施す。これらの土器は足洗式土器に範疇で有る。その他石器、すり石が有る。5は加曾利E N式の深鉢で底部から出土している事から本時期が土坑の時期と断定される。



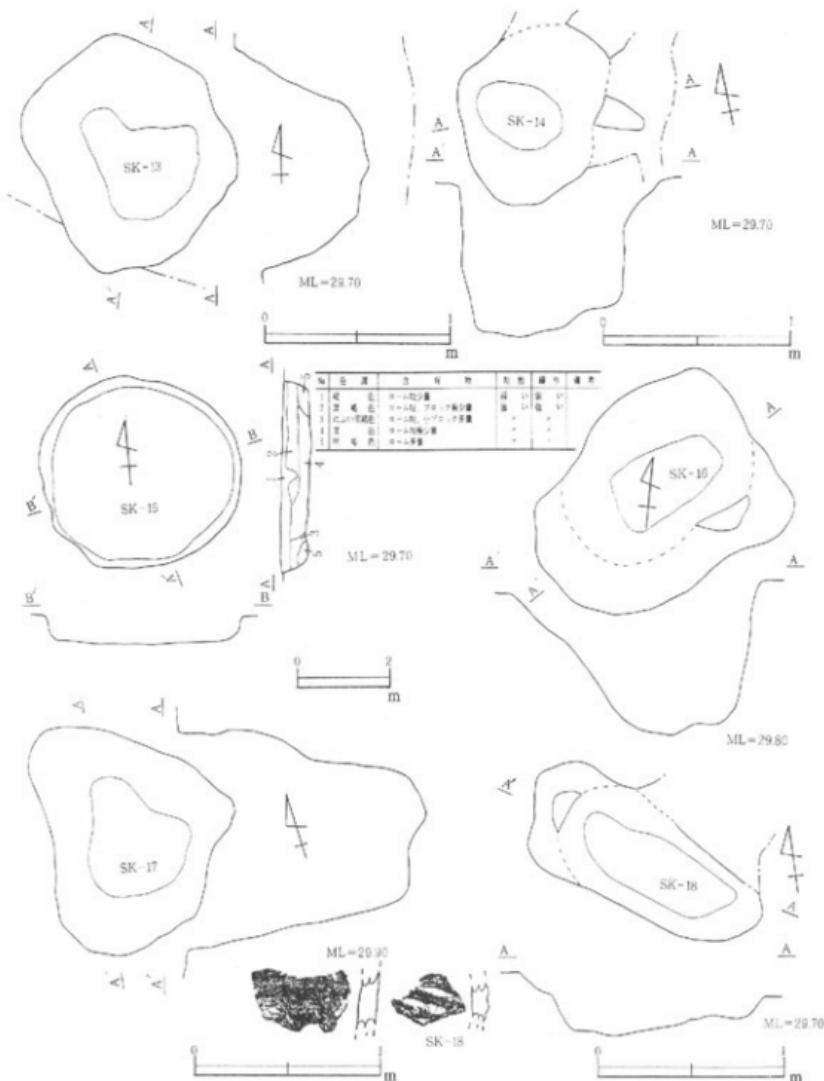
第38図 第15号土坑、出土遺物実測・拓影図

○ 16号土坑 （第39図）

本遺構は、14号土坑の北側に位置して検出された遺構で長方形プランで東西1.3m、南北1mの長方形形状で深さ80cmで底面は凹凸があり締りは強い。掘立遺構、もしくは榾状建屋の柱穴と思われる。覆土は、3層で黒褐色、暗褐色、明褐色で締り、粘性はやや有る。遺物は、土師器杯が2片、瀬戸の茶碗が1片出土している。その他川原石17個が出土している。遺物からは江戸時代以降の年代が推察される。

○ 17号土坑 （第39図）

本遺構は、16号土坑の北側2mに位置して検出された。不整形形態で長軸をN方向に置き東西1m、南北1.2mの五角形状プランで覆土は、4層で黒褐色、鈍い黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色で層序は人為的埋め戻し状に見られた。掘り込みは垂直に近く深さは1.3mで底部は二ヵ所に底部が分かれ、かなり良好な締りをもつ。遺物は皆無で時期は不明。形態から建屋、榾状掘立遺構、柱穴が推察される。



第39図 第13, 14, 15, 16, 17, 18号土坑実測図

○ 18号土坑 （第39図）

本遺構は、14号土坑の西側に位置して検出された遺構で一部19号溝を掘り込む。長軸を西側に置き長さ1.4m、幅50cm前後の方形状プランを呈していた。底部は中央部がさも深く35cm前後を測る。南北は緩やかに立ち上がる。底面の縞りはあまり明確ではない。覆土は3層で色調は暗褐色、褐色、明褐色で粘性、縞りはやや有る。遺物は繩文土器が3片、昭和初期の瓦1、川原石2個が出土している。時期性格は不明、柵列、墓壇、性格は不明。時期は近世以降と推察する。図示した繩文土器が出土し、中期か？

○ 19号土坑 （第40図）

本遺構は、館西北側の土壘欠失部近くに検出された。溝と溝をつなぐ狭い部分にピット状に掘り込まれていた。円形で径70cm円形プランで壁面はなだらかな立ち上がりで深さは15cmを測る。底部は縞りはやや有る。覆土は2層で暗褐色、褐色で粘性、縞りは有る。遺物は皆無で時期は溝の時期と前後すると推察する。

○ 20号土坑 （第40図）

本遺構は、館西側土壘近くから検出された長方形プランの土坑で有る。長軸を東に置き東西1.4m、幅75cmで底部は東西1m、幅55cmで近世以降の墓壇状態で有る。掘り込み深さは60cm程で覆土層序、色調からはサツマイモの貯蔵穴の可能性も推察される。覆土は人為的埋積を示す。粘性、縞りはやや有る。

○ 21号土坑 （第40図）

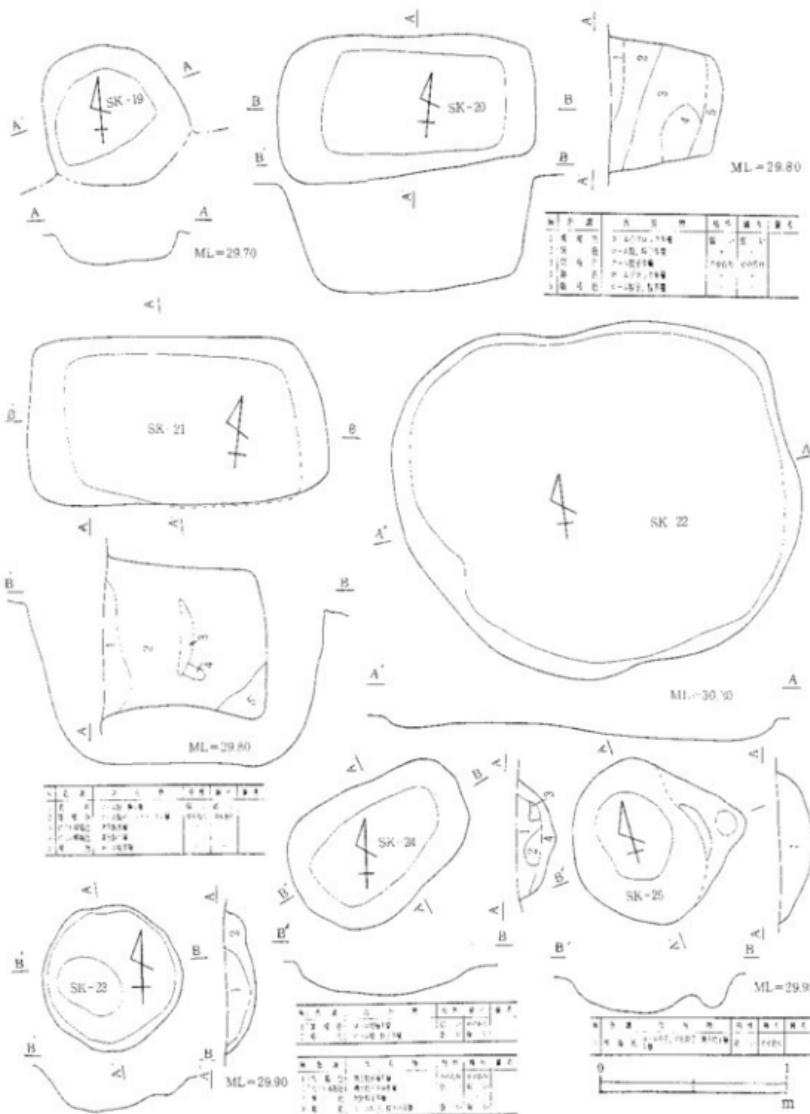
本遺構は、前述の20号上坑の東側に位置し検出されれば同様な掘り方プランを呈し、東西1.6m、幅1.8mで深さは1.8mと深い。20号土坑と比べると一回り大きい。覆土埋積状態を観察すれば完全なる人工的な方法でサツマイモの貯蔵穴と推察される。遺物は弥生式土器3、土師器壺14、壺5、瓦2が出土している。これらから推察すれば20、21はサツマイモの貯蔵穴の可能性が高い。

○ 22号土坑 （第40図、第43図）

本遺構は、8号土坑の東北側に検出され東西の径2.1m、南北1.9mの楕円形状プランで立ち上がりは緩やか。掘り込み深さは10cmと浅い。覆土は2層で暗褐色、褐色で粘性、縞りはやや有る。遺物は、壺の破片11、壺4、同じく赤彩の破片が23片出土している事、壺形態から和泉期の土坑と推察される。土製丸玉が出土している。（43図）

○ 23号土坑 （第40図）

本土坑は、館西南側に位置し土壘が途切れる部分に検出された。南側には4号溝が東西に掘り込まれており、これに近接する。径75cm程の円形状プラン呈している。掘り込みは25cm程でなだらかな立ち上がりで有る。遺物は弥生式土器が1片、土師器壺3、壺3片が見られた。その他川



第40図 第19, 20, 21, 22, 23, 24, 25号土坑実測図

原石が1個出土している。いずれも出土遺物が土師器のみ有ることから古墳時代の遺構と推定される。性格は不明。

○ 24号土坑（第40図、第43図）

本遺構は、23号土坑の南側に位置し長円形状で東西1.5m、南北70cm程のプランを呈していた。掘り込みは中央部が深くなる碗状の形態で20cm程で有る。底部近くは自然埋積で1、2、3層は人工的な埋め戻しで有る。覆土の色調は黒褐色、鈍い赤褐色、黒色、褐色の4層でいずれも焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、粒を含む。粘性、締りは弱く土師器壺底部と30片、石器がある。土層から性格は不明、時期は古墳時代。

○ 25号土坑（第40図）

本遺構は、24号土坑の南側に位置し円形状で径80cm前後で皿状の掘り込みで深さは20cm程でなだらかな傾斜を示す。東側は若干凹凸をもつ。底部はやや締りをもつ。覆土は1層で黒色。ローム粒子、焼土粒子を極少量含み粘性、締りは弱い。出土遺物は、弥生式土器3、土師器壺7、杯1が出土した。これらから時期、性格を特定する事は困難であるが古墳時代の遺構か。

○ 26号土坑（第41図）

本遺構は、25号土坑の南側から検出された。径60cm程の梢円形状プランで掘り方は壺状で深さは17cm、底部は平坦でしまりをもつ。覆土は自然埋積、2層確認された。色調は黒褐色、暗褐色でローム粒、粒子を含み粘性は弱くしまり歯やや有る。遺物は土師器杯が4片出土している。その他石器状の物が2点出土している。時期は前述の古墳時代が推察される。性格は不明。

○ 27号土坑（第41図）

本遺構は、27号土坑南側に位置し方形プランで東西50cm、南北40cmを測る。さも深い部分は南側に寄り深さ20cmを測る。北側は緩やかに立ち上がる。底部は締りはやや有る。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色。ローム粒子、ブロックを含む。遺物は、土師器壺の破片が2片程見られた。時期、性格は断定出来ない。

○ 28号土坑（第41図）

本遺構は館南側、3号堀中程の南側から検出されたピット状掘り込みで、深さ40cmを測り、底部の締りはよく櫛、もしくは柱穴状掘り込みが推察される長円形プランで長軸60cm、幅30cmの規模で弥生式土器が出土している。4本単位の櫛揃で鋸歯状の文様が頸部磨消部に施文されている。その他土器片錐が見られる。弥生式土器細片が26片程出土している。土師器は壺、杯が2片程見られるが遺物の出土量から弥生時代の遺構と考えられる。

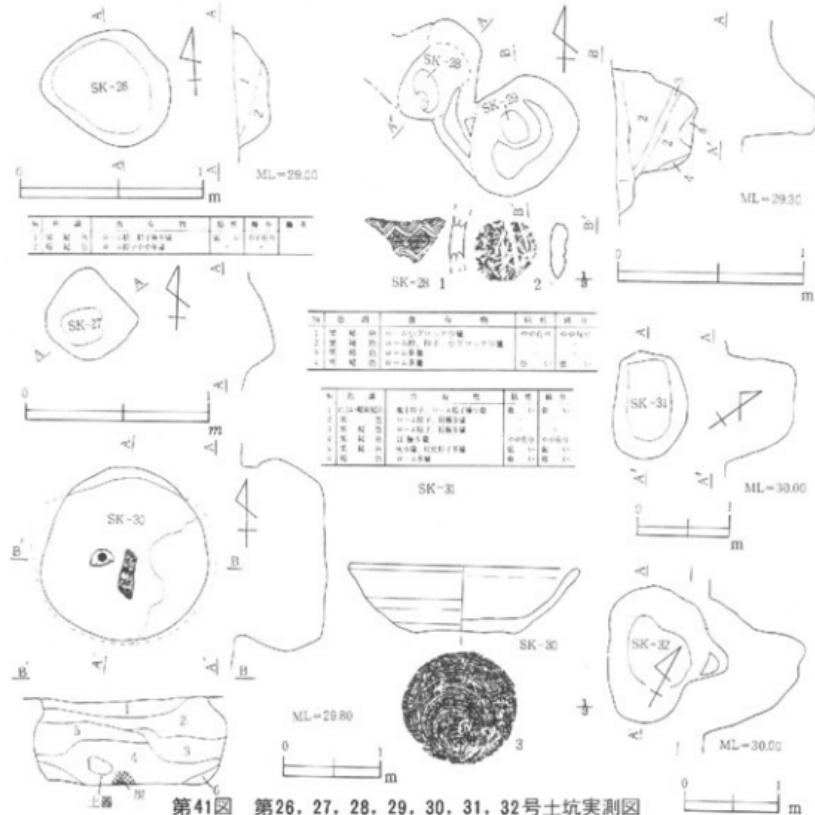
○ 29号土坑（第41図）

本遺構は、28号土坑と隣接し東側にわずかに切り合い関係にある。梢円形状プランで東西50cm、南北65cm程の規模で掘り込み深さは40cmで底部はやや北側に傾斜をもつ。底部は締りは強い。覆

土は4層に分類され色調は黒褐色、明褐色等でローム粒子、ブロックの混入の差で有る。層序から人工的な埋積と推定される。遺物は、縄文土器14、弥生式土器8、土師器壺23、壺6、川原石47個が出土している。これらの遺物から古墳時代の土坑と推察される。

○ 30号土坑（第41図、第43図）

本遺構は、建屋群の北側、土塁、内堀の間に検出された土坑でかなりの淡水産の貝が検出されている。ほぼ円形で底部がフラスコ状に掘りこまれている。混じり層の中から41図10の灯明皿が出でている。径90cmで掘り込み深さは48cm。底部の縮りは強い。貝層は厚さ15cm程で投げ込み的な検出状態であった。貝は大部分海水産のウスハマグリが見られ、ウスハマグリが99%を占める。これは周辺の遺構から検出されず他地方の【みやげ】として搬入された物と理解したい。その他



第41図 第26, 27, 28, 29, 30, 31, 32号土坑実測図

43図9の石器が出上している。建屋遺構と時期的に関連があると考える。

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
3	土師器	A 12.4 B 3.5 C 5.5	皿に近い浅い杯で底部に縁が付着。口クロ成形で体部は外反して立ち上がり口唇部は丸く肥厚し収める。	クロクロ水挽きナデ	細石、長石 褐色 良い	80% 床直

○ 31号土坑（第41図）

本遺構は、館南東側に位置し長形状プランで長軸1.15m、幅80cm、深さ70cmを測る。底面は縄りを持ち柵列、掘立の柱穴、墓壇等が推察される。掘り方、プラン等から館に直接関連する遺構とは考えられない。覆土は3層で黒褐色、暗褐色、褐色でいずれもローム粒子、粒を含む。粘性、縄りはやや有る。遺物は皆無で時期は不明。

○ 32号土坑（第41図）

本遺構は、31号土坑の西側に位置し梢円形プランを呈し南北1.5m、南北1.3m、深さ1.1mで南側に最も深い部分が見られ底部は良好な縄りをもつ。覆土は暗褐色、褐色、明褐色の3層で感じから柱穴の一部と推定される。遺物は土師器壺2、磁器1が出土している。時期は江戸時代以降の掘立遺構の柱穴と思われる。【33号土坑欠番】

○ 34号土坑（第42図、第43図）

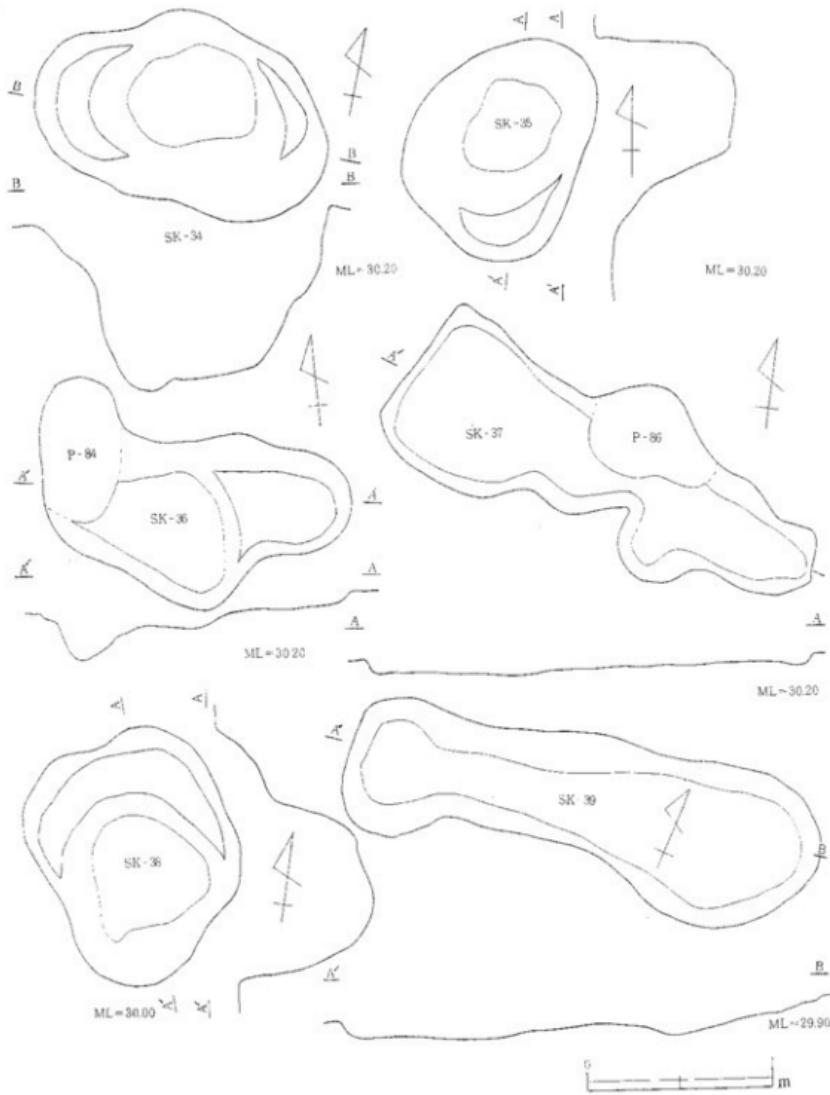
本遺構は、32号土坑東側から検出された土坑で長円状形態で東西1.9m、南北1.04mで中央部がさも深く縄りをもつ。一部円形の部分が見られる。覆土は前述の土坑同様で柱穴の一部と理解される。遺物は土師器壺が1点見られたにすぎない。

○ 35号土坑（第42図）

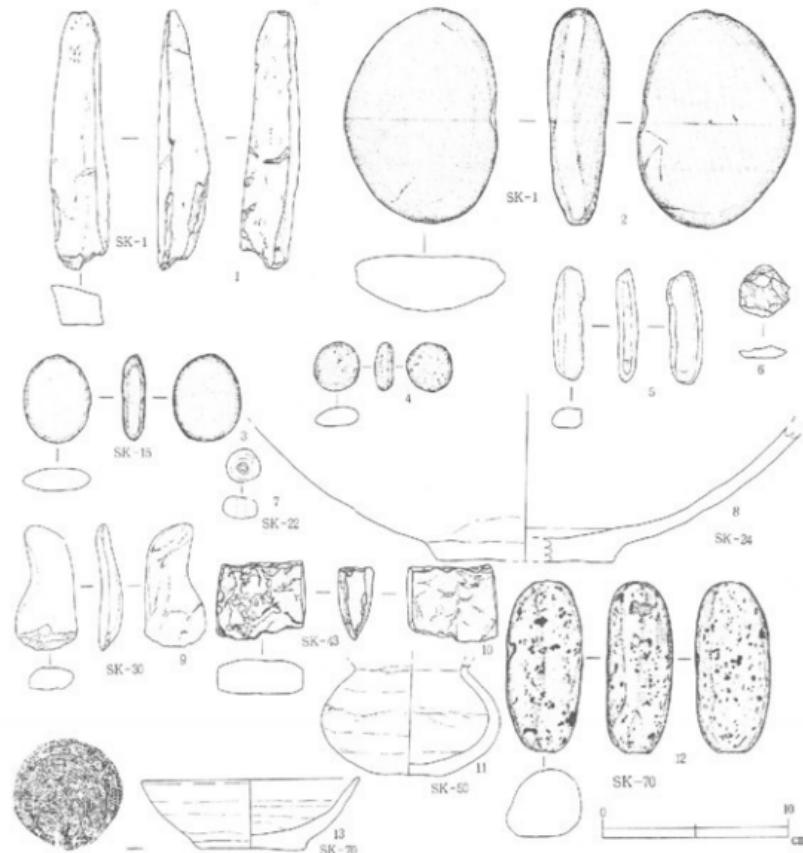
本遺構は、34号土坑の向きをかえたようなプランで長さ1.2m、幅90cmで掘り込みは75cmで壁面は垂直気味で底部は縄りは良好で有る。覆土は3層で暗褐色、褐色、明褐色で縄りはやや有る。遺物は、弥生式土器が3片出土している。形態、プランから柱穴の一部と推定される。

○ 36号土坑（第42図）

本土坑は、34号土坑の南側に位置し検出された遺構で北側に小ピットがあり複合関係にある。梢円形状で東西70cm、南北50cmの不整形な形態で深さは15cm前後と接い。覆土は2層で暗褐色、褐色でローム粒子、ブロックの混入差であり、粘性、縄りはやや有る。遺物は皆無で時期、性格は不明。



第42図 第34, 35, 36, 37, 38, 39号土坑実測図



第43図 第1, 15, 22, 24, 30, 43, 50, 70号土坑出土土器・石器実測図

石器・土製品一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
1	石器	14	3.0	2.1	135	安山岩	覆土中	砥石状 SK-1
2	石器	11.6	8.4	3.0	395	緑泥岩	覆土中	石釜状 "
3	石器	4.2	3.5	1.2	30	緑泥岩	覆土中	すり石状 SK-15
4	石器	2.6	2.5	1.0	5	緑泥岩	覆土中	すり石状 "

石器・土製品一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚					
5	石器	6.1	1.6	1.0	20	緑泥岩	覆土中	川原石状	SK-15
6	フレイク	2.8	2.6	0.6	5	頁岩	“	頁岩の剥片？	SK-15
7	丸玉	1.8	1.9	0.3	3	上製	“	そろばん玉状	SK-22
9	石器	6.7	3.3	1.2	32	安山岩	覆土中	川原石状で一部加工	SK-30
10	石器	4.0	4.6	1.8	60	緑泥岩	覆土中	刃部のみ、大半を欠失	SK-43
12	石器	9.3	3.5	3.5	210	安山岩	覆土中	両端に使用痕を認める。	SK-70

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
8	甕 土師器	A —	大型の甕底部で、上底である。	ナデ、ヘラケ ズリ	繩石 褐色 普通	10% 覆土中 SK-24
		B —				
		C 9.4	大半を欠失。			
11	埴 土師器	A —	地形土器で口縁部を欠失。	ナデ	繩石 赤褐色 普通	55% 覆土中 SK-50
		B —				
		C 3.8	やや新しい時期			
13	灯明皿 土師器	A 10.8	糸切りの底部から外反して立ち上がり 開く。口唇部は薄いが丸く収める。	—	繩石、長石、スコリア 淡い赤褐色 普通	99% 覆土中 SK-70
		B 3.8				
		C 5.7				

○ 37号土坑 (第42図)

本遺構は、36号土坑の東南側に位置し東西2.4m、南北の最大幅80cm、深さ10cm程の溝状プランを呈する。北側にピット86号が掘り込まれている。覆土は1層で暗褐色層で締り粘性は弱い。底部は締りはやや有る。遺物は繩文土器2、弥生式土器2、土師器甕2、壺1が出土しているが時期、性格は不明で有る。その他、川原石4個がある。

○ 38号土坑 (第42図)

本遺構は、37号土坑の南側に位置し2回前後の掘替えが推定される遺構である。東西1.4m、南北1.1mで南側は円形状で掘り込み深さは70cmで底部は凹凸がある。締りは強い。南側の欠失部分も旧土坑の残存部分で有る。覆土は、4層に分類され色調は暗褐色、褐色、明褐色で人工的な埋積状態で明確に北側の土坑を掘り込み粘性、締りはやや有る。遺物は、繩文土器1、弥生式2、土師器2、川原石5が出土しているが時期は新しく、掘立の柱穴の可能性が高い。

○ 39号土坑 (第42図)

3号掘の東端に位置し堀のなかに検出された遺構で東西2.6m、南北、幅は60~90cmで掘り込みは10cm前後と浅い。プランからは溝状の感じで覆土は2層で色調は褐色、明褐色で締り、粘性は弱い。時期、性格は堀の一部か。遺物は皆無で堀の中から掘り込んでいる。

○ 40号土坑 (第44図)

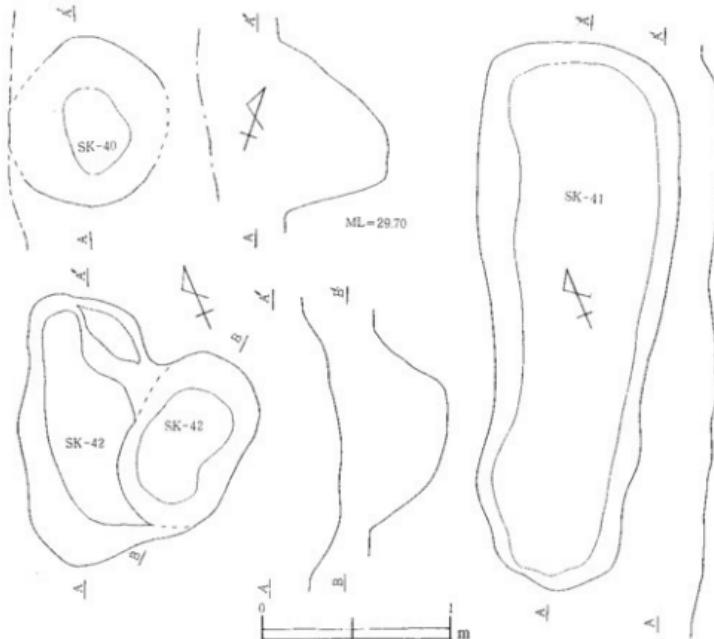
本遺構は、21号溝の中に掘り込まれた土坑で径90cm、深さ60cmで底部は楕円形状プラン。深さ45cmで底部の縮りは強い。U字状掘り込みでは柱穴状形態。覆土は、4層で色調は鈍い暗褐色、暗褐色、褐色、明褐色で粘性、縮りは弱い。埋積状態は人工的で乱れる。時期は近世か。遺物は皆無。

○ 41号土坑 (第44図)

調査区の東南に位置し浅い溝状のプランで東西幅80cm～1.1m、南北2.9mで掘り込みは5～10cmと浅い。前述の39号土坑同様の形態でこのような遺構は6基程検出されている。いずれも時期、性格を断定出来る資料は認められないが近世の遺構と推察される。

○ 42号土坑 (第44図)

41号土坑の南側に位置し南側は42号に掘り込まれ遺存する部分は浅く掘り込みは15cmで東西80cm、南北1.4mの長円形状プラン底部は凹凸が見られ縮りは弱い。覆土は、2層で色調は暗褐色、褐色で縮り、粘性は弱く自然堆積状、遺物は皆無で時期を特定する遺物はない。



第44図 第40, 41, 42, 42'号土坑実測図

○ 42号土坑（第44図）

本造構は、42号土坑の一部を掘り込み東側に位置して検出された。倒卵形形態で長さ1m、幅60cmのプラン、掘り込み深さは40cmで掘り込み形態は開いたU字状形態で底部は締りをもつ。性格は柱穴状で時期は不明。遺物は皆無。

○ 43号土坑（第45図）

本造構は、22号溝の中に位置し検出された土坑で方形形態プラン、東西幅12cm、南北1.5mで底部は中央部がさも深く締りをもつ、掘り込みは1.2m、開いたU字状形態で覆土は6層で色調は褐色、明褐色、黒褐色、やや暗い褐色で粘性、締りは弱い。人工埋積状層序。遺物は弥生式土器2、土師器壺3、壺2で有る。型態は柱穴状。時期は、近世の造構か。

○ 44号土坑（第45図）

本造構は、43号土坑の東側に位置して方形形態プランで東西1.2m、南北90cm、掘り込み深さは65cmでV字状形態。底部は締りをもち柱穴の可能性が強い。覆土は6層で自然埋積状。色調は、暗褐色・黒褐色・ぶい明褐色等で粘性、締りはやや有る。

人工埋積状層序、遺物は皆無。柱穴状の可能性が強い。

○ 45号土坑（第45図）

本造構は、45号土坑の中に46号土坑が掘り込まれ大半を欠失する。深さは70cm前後で東西1.4m、南北70cmで倒卵形状プラン。覆土は1層で色調は褐色。締りは弱い。底部の大半は46号土坑に掘り込まれている。遺物は、弥生式土器破片が3片出土している。時期、性格は近世の柱穴の可能性が高い。

○ 46号土坑（第45図）

本造構は、45号土坑の大半を掘り込み東西90cm、南北70cm前後のプランで掘り込み深さは1.3mで狭いわりには深い土坑で垂直に近い掘り込み形態で今までの土坑とは差異を認める。覆土は3層で色調は褐色、明褐色、暗褐色で粘性、締りは弱い。遺物は皆無。性格、時期を特定する物はない。覆土からは近世の造構と推察される。

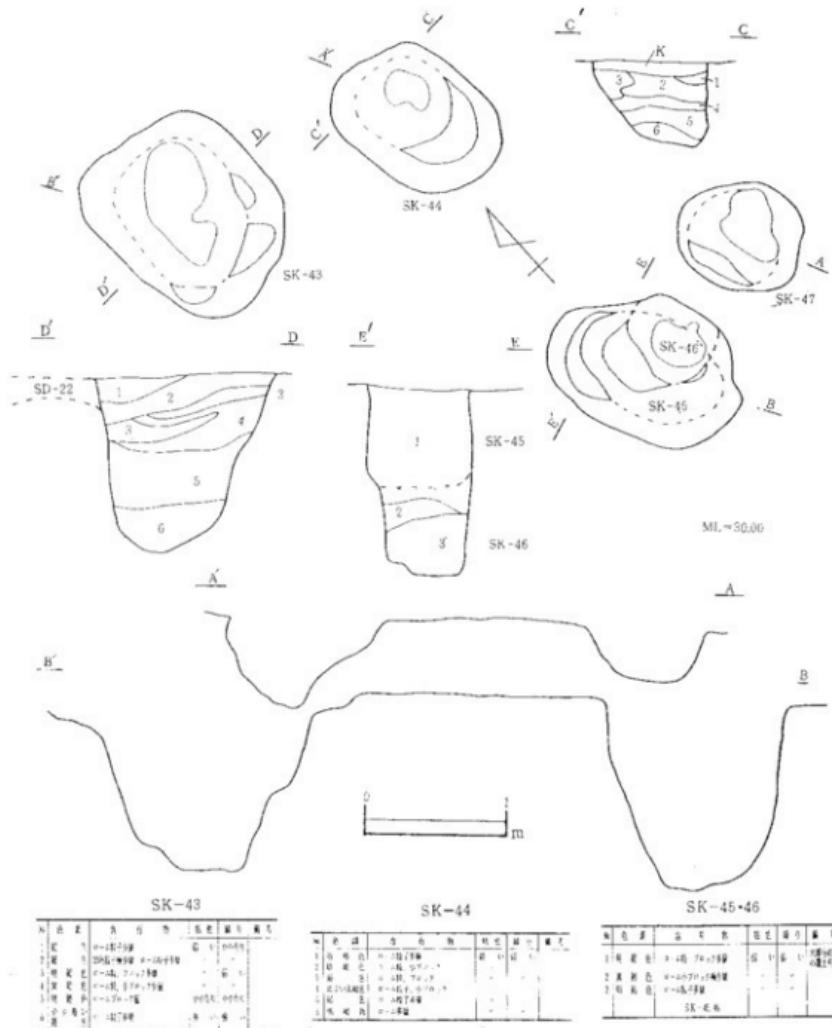
○ 47号土坑（第45図）

本造構は、46号土坑の東側に位置し円形状で径80cm前後で掘りの方は鍋底状形態。深さは30cm、底部はほぼ平坦で締りは弱い。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色、粘性、締りは弱い。遺物は、皆無。時期、性格を特定出来る遺物は無いが位置、土層から近世の造構と推察される。48号土坑は欠番。

○ 49号土坑（第46図）

本造構は、円形状プランで径70cm前後で掘り込み深さは1.5mと深く膨らんだU字状形態で底部の締りは強。覆土は3層で色調は暗褐色、褐色、明褐色で粘性、締りは強い。今までの土坑と

は掘り方プランに差異が見られる。遺物は甕11片、川原石46個が検出されている。時期、性格は



第45図 第43, 44, 45, 46, 47号土坑実測図

不明。墓壙の可能性もあり。

○ 50号土坑 (第46図、第43図)

本土坑は、1号建屋の南側に位置し瓢箪状プランで東西80cm～1.1mで掘り込み深さは50cm程度凹凸をもち縦りは弱い。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色で縦りは強い。

遺物は、いずれも刷毛調整をもつ五領式の甕の破片が出土している。遺物から本遺構は五領式前半の土坑と推察出来る。

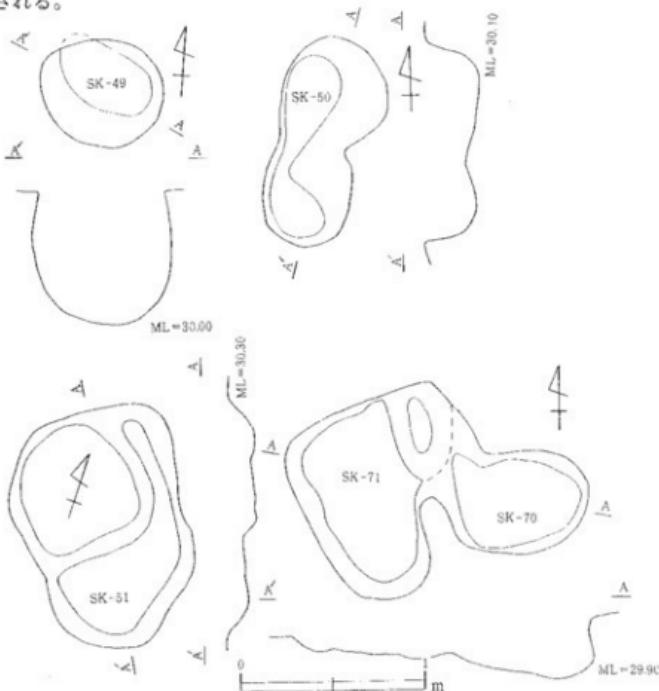
○ 70号土坑 (第46図、第43図)

本遺構は、西側のテラス状遺構の部分から検出されたもので長軸1.6m、幅1.1mの倒卵形状プランで掘り込み深さは65cm程を測る。底部は東側に傾斜を示し凹凸があり縦りはあまり良くない。覆土は3層で色調は黒褐色、暗褐色、褐色で底部の白色粘土で止めてある。甕の破片が45片程度出土している。いずれも破片で図示出来る物は無い。その他灯明皿が出土している。遺物から本時期の遺構と推察される。

○ 71号土坑

(第46図)

本遺構は、70号土坑の南側に位置し緩やかな掘り込みで70号土坑側に傾斜を示している。底部は凹凸があり縦りはややあり傾斜を示す。掘り込み深さは20cm前後で東西10～15cm、南北2.1mで長方形状プラン。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色で粘性、縦りはやや有る。遺物は土師器甕が1片出土している。時期は70号土坑同様か。



第46図 第49, 50, 51, 70, 71号土坑実測図

8. 中、近世の建屋遺構と柵列

本遺跡東南側に長屋状の建屋と推定される土坑群が散在して見られ、これらはすでに土坑として述べたがピット、土坑の組み合わせで2軒の長屋状建物が存在していたと推定される。以下これらの建屋、柵列について後述する。

○ 6号建屋 (第47図)

本建物は農道として使用されていた部分に位置しN-20°-Eに長軸を置き東西6.4m、南北2.4mの長屋状建物が推定される。土坑はすでに掘り方プラン。底部、出土遺物から柱穴の可能性を指摘してきた。37、38、39、ピットは83、85、88がこれらに該当する。特別な遺構はないが36、42号土坑はこれらに付随する遺構と推察される。時期は出土遺物から近世である。

○ 7号建屋 (第47図)

本建屋は6号建屋の西側に位置し長軸をN-10°-Wに置き東西2.65cm、南北7.2mの長屋状建物が推定される。上坑、柱穴は14、16、17、32が推察されピットは67、68が柱穴と推定される。これらの遺構は掘り方プラン、形態は共通性がみられる。その他1~3号柵列が見られ遺構と建物が差程の時間差をもたないで存在したと理解する。1号建屋と2号、5号柵列が同時期の遺構と推察される。2号建屋と1号、3号、4号柵列が時期を同じくすると推察する。特別な遺物は出土していない。

○ 8号建屋 (第48図)

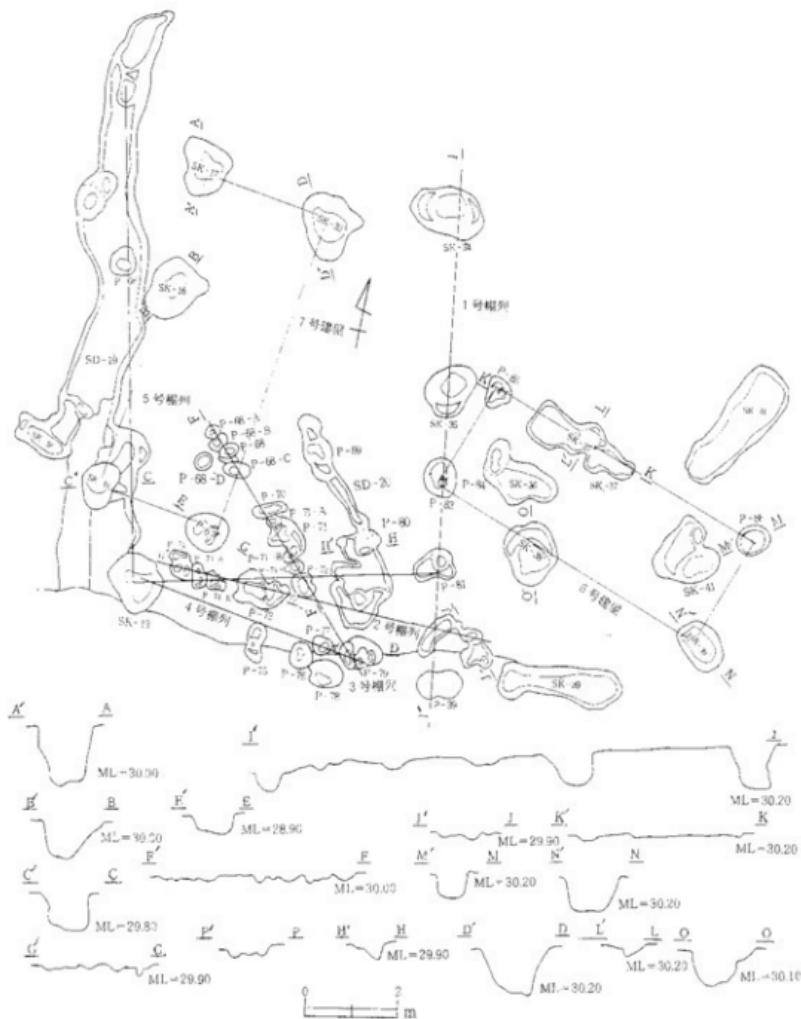
本遺構は、屋敷段階の『門』と推察される柱穴でピット62、63、65が該当し遺跡南側の中程に位置し主軸をN-9°-Wに置き東西2.75m、幅2.5mでいわゆる四足門の形態で時期的には館以前の遺構と土層から推定される。6号柵列はやや南側に位置し径70cm程で3基並列している掘り方、規模とも同一に近い。遺物は皆無。

○ 7号柵列、8号柵列は館時代の柵列と推定され前述の43~47号土坑がこれに該当する。前述の文章からも推察出来る。

○ 9号柵列は1~3号建屋の東側に位置し小型で小さい掘り込みで建屋の柵と推察されピット12、14、17、18、19、23が該当する。館の専線、防御的側面をもつ遺構か。20、21、27も同様と理解される。いずれも掘り込みは浅い。これは上部が畠地耕作のため70cm前後擾乱を受けているためである。

○ 10号柵列はV字状形態で掘り込み、プランから9号同様館に付随したものと推察される。時期、性格を特定出来る遺物は出土していない。

○ 11号柵列(第50図)は館の北東側4号建屋の周辺から開むような感じで東西、南北の方向に7列見られる。11号は北側に位置しピット28、29、40、46、12迄続く比較的径は大きいが、



第47図 近世の建屋遺構第6号、7号建屋と櫛列（1, 2, 3号櫛列）

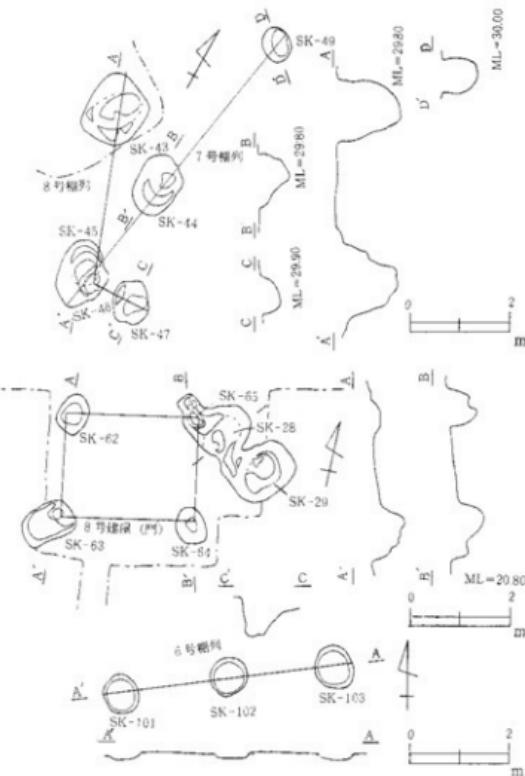
いずれも掘り込みは浅い。本櫛列は以下は館段階の時期か。

○ 12号櫛列は11号櫛列の北東側に近接して位置しピット 51, 54, 55 と連続して掘り込まれて

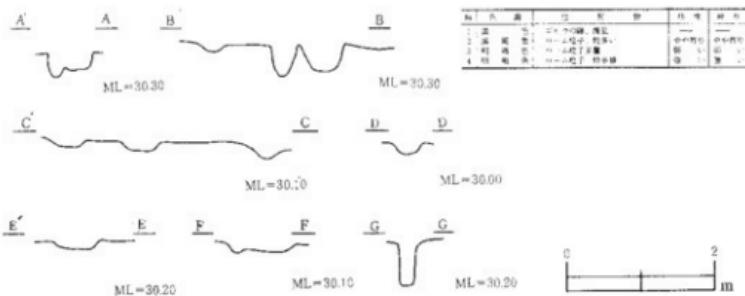
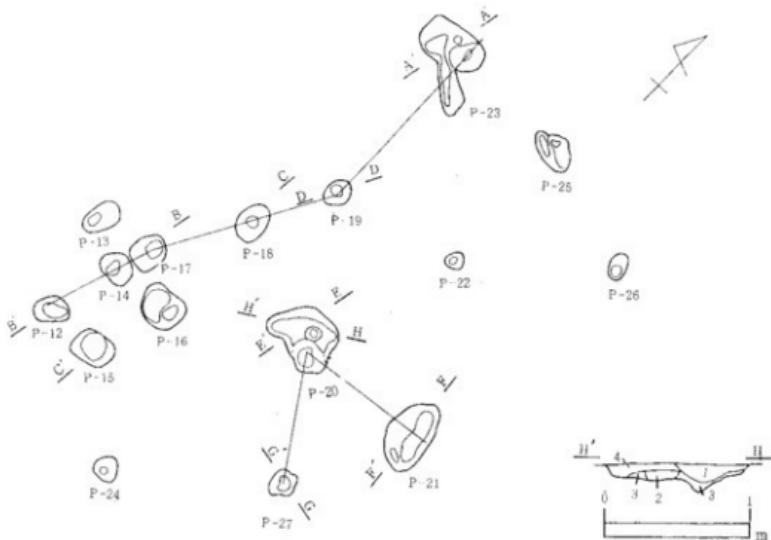
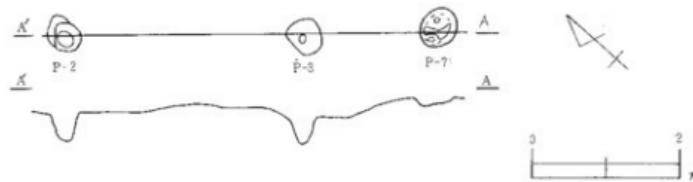
いる長さは2m前後と短い。本ビット群からも特別な遺物は出土していない。

- 13号柵列、本遺構は13, 41号ビットと2基の列で11号柵列の控えの感じで有る。
- 14号柵列は、11号柵列の控え寄り防御的要素をもったビット群で有る。11号柵列に対し30°前後の角度で内側に狭い。46, 45, 57, 58号ビットでいずれも浅い。遺物は皆無で本柵列群では55号から土師器甕、壺、陶器が出土しているにすぎない。
- 15号柵列は11号柵列と同じ方向で平行して見られ、長さ4.5mで52, 49, 47, 58, 56号ビット群が該当する。いずれも円形状形態で掘り込みは浅い。特別な遺物は出土していない。
- 16号柵列は15号柵列の控えの要素をもつ。前述の11号柵列の14号同様で30°前後内側に内傾する。50, 49, 48号が該当する。本遺構からも時期、性格を特定出来る遺物は無い。
- 17号柵列は、くの字状に折れる防御的要素をもった遺構で有る。30, 42, 43, 44, 59の一群で11号柵列と並んでひとつの機能をもったビット群と理解したい。本ビット群からも特別な遺物は出土していない。

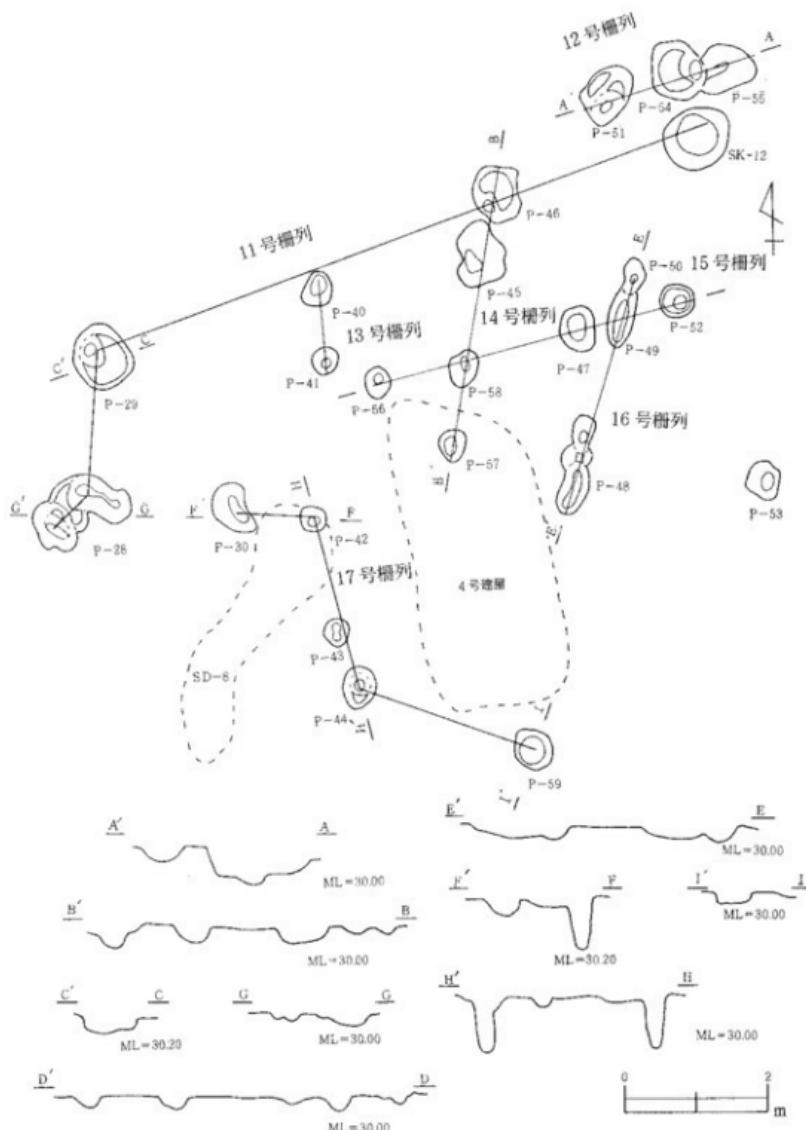
以上の文中に述べられなかったビットに2, 3, 13, 22, 23, 24, 25, 26の一組が有る。これらの一群からは性格、時期を特定する遺物は無い。59, 66, 68, 75, 76, 78, 84等が検出されたが、これからも時期、性格を特定する遺物は無い。いずれも各ビットの並列から推察した柵列であるが推測の域をでないことを断っておきたい。又は畠地の搅乱層70cmと言う深さから欠失した遺構も数知れないと考える。



第48図 8号建屋と6, 7, 8号柵列



第49図 9号，10号柵列



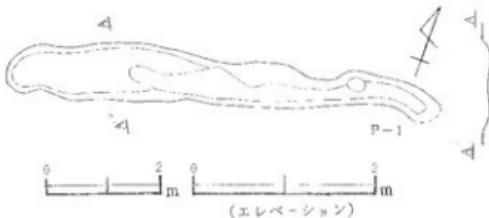
第50図 第11, 12, 13, 14, 15, 16, 17号柵列

9. 溝

大半の溝は消失し本来の形状を残している遺構は少ないと推察するが遺存している状態を後述したい。欠番等はその都度文末に記したい。

○ 1号溝 (第51図)

本溝は、館北東側に位置し東西方向で、長さ7m、幅5~9mで掘り込みは15cmと浅い。底部は比較的平坦で締りは良い。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色で締りはややあり粘性は弱い。他に2号溝が有るが、これは屢歴として前述してあるため省略。3号は欠番。



○ 4号溝 (第52図)

本遺構は、館南側に東西方向で検出された。長さ23.3mで幅は90cm~2mで掘り込みは緩やかな掘り込みで深さ30cm~50cmで東側南より砂が堆積しならかの儀式的様相をもった溝か。覆土は、2~3層で色調は鈍い黒褐色、褐色で粘性、締りはややある。途中西側では搅乱部分で2、3溝を掘り込む。遺物は、弥生式土器10片、土師器壺46、壺4、川原石49、摺り鉢1、鉄滓1、煙管雁首1、等が出土している。

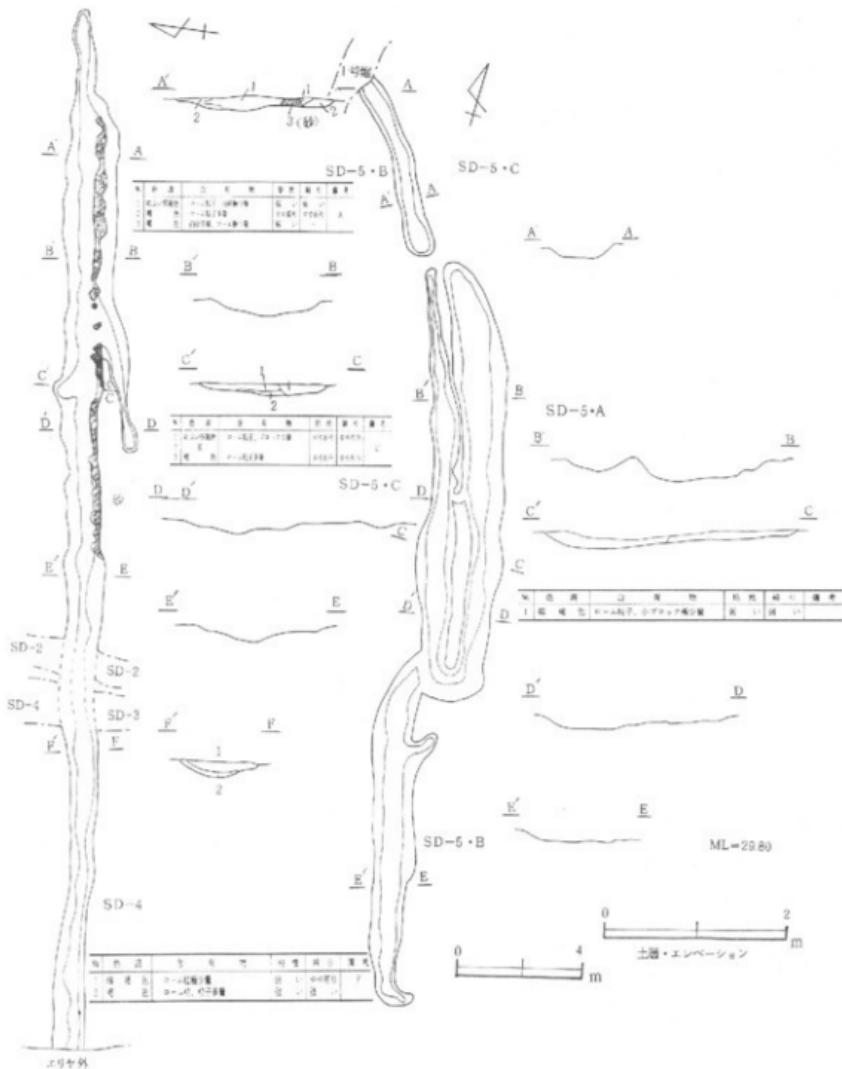
本溝の意味、意義、性格は不明で有る。時期は出土遺物から江戸時代以降が推察される。砂の意味が理解出来ず近くには無い。搬入品で有る。

○ 5号溝 (第52図)

本溝は、屋敷の区割りの一部として捉え館の部分で述べているので細述は控える。北側の1号堀に掘きられて南に伸び一旦切れて幅広のC部分に続く、南側B部分はC部分に掘切られ先端部は鍵状に曲がり掘り込み深さは浅い。A部分も同様、C部分のみ40~70cmの深さをもつ。遺物は、弥生式土器4、土師器壺52、壺4、川原石93、磁器1等が見られた。

○ 6号溝 (第54図)

本遺構は、1号建屋群の東側に位置し東西長さ2m、幅70cmで掘り込み深さは20cm。なだらかに掘り込み底部は凹凸有り、締りはあまりよくない。溝より土坑状形態。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色で締りはやや有る。遺物は土師器壺底部1が出土しているほか、何も無い為性格、時期は不明。



第52図 第4号, 5号 A, B, C, 溝実測図

○ 7号溝 (第54図)

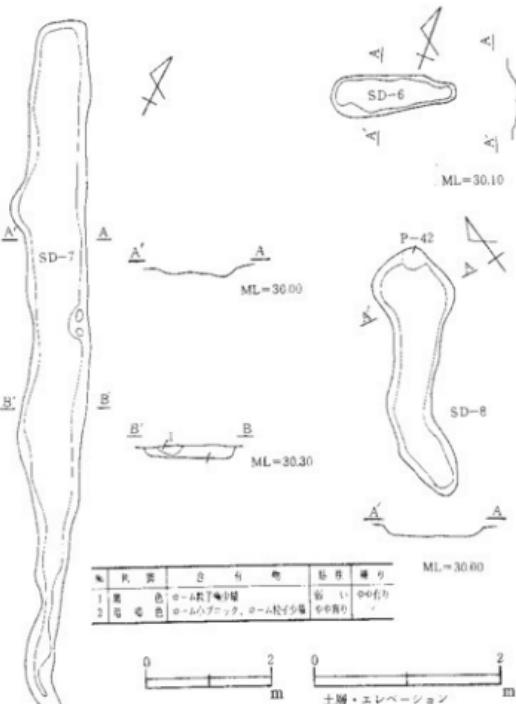
本遺構は、1号建屋群の東南側に位置し南北方向に長く11.4m, 幅は北側で1m, 南側で40cm前後の幅で狭くなる。掘り込みは鉛角的で底部は平坦で縦りはある。深さは20cmと浅い。覆土は2層で色調は黒色, 暗褐色, いずれもローム粒子, 小ブロックを含み粘性, 縦りは弱い。遺物は羽口破片1, 上師器甕7, 川原石25等が出土している。これらの遺物から奈良~平安時代初頭前後の遺構と推察される。

○ 8号溝 (第54図)

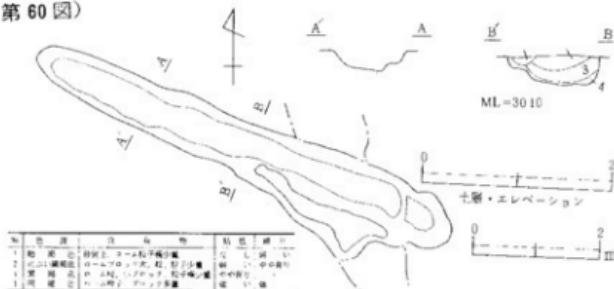
本遺構は、7号溝の東北側, 館隅部のピット群近くに位置し検出された遺構で長さ南北4m, 幅は70cm~1.2mで底部は平坦縦りはややある。先端部にはピット42号がある。掘り込み深さは15cm前後と浅く。覆土は1層で暗褐色, 縦り粘性は弱い。遺物は皆無。時期, 性格は不明。

○ 9号溝 (第54図, 第60図)

本遺構は、館のはば中心部に位置し10号溝と切り合い関係にある。10号溝を掘り込み東西7m, 幅70cm~90cmで半円形状形態で深さは30~42cm程で底部はやや凹凸気味, 縦りはやや有る。覆土は4層



第53図 第6, 7, 8号溝実測図



第54図 第9号溝実測図

で色調は暗褐色、鈍い黒褐色、黒褐色、明褐色で1層のみ砂を含む。他はローム粒、ブロックの混入差で粘性締りは弱い。

遺物は、第60図の1、2の石器がある。1は川原石を利用した粗製の石斧状、2は石核。

○ 10号溝 (第55図、第60図)

本遺構は、一部9号溝に掘り込まれ長さは南北方向に14.4mで幅は60cm~1m前後でほぼ直線的で東側で鍵状に曲がる。掘り込みは浅く15cm前後で平坦、締りは強い。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色でロームブロックを少量含む。遺物は、縄文土器が6、土師器壺3、坏2、川原石27が出土している。67図10、11の時期の違う弥生が出土。

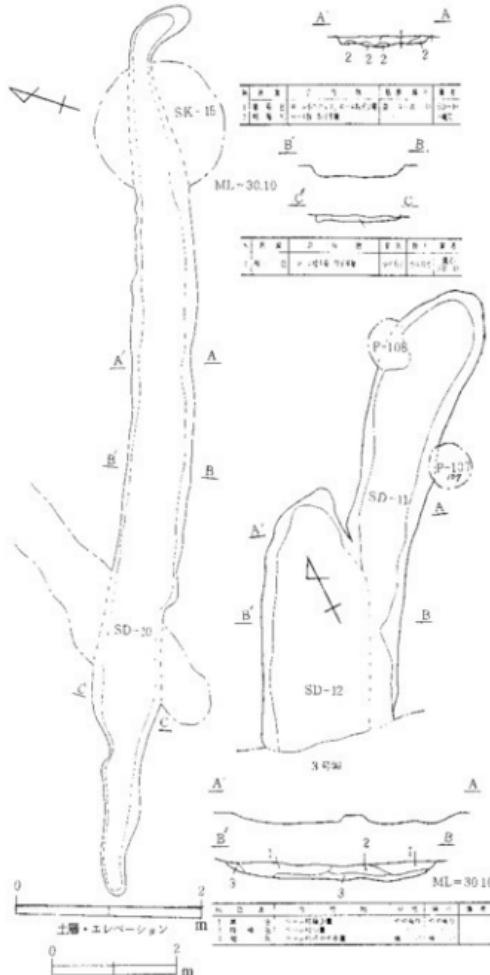
○ 11号溝 (第55図)

本遺構は、南側で12号溝に掘り込まれ明確でない。南北方向に掘られた南側は3号堀に合流し堀と同時期の遺構と推察する。長さ6.7m、幅1.1m~1.5m前後で掘り込みは10cm前後で凹凸があり締りはやや有る。覆土は3層で色調は黒色、暗褐色、褐色。

遺物は、弥生式土器2、土師器壺3、坏2が出土している。館の堀の時期か。

○ 12号溝 (第55図)

本遺構は、11号溝の南側に位置し、一部を掘り込んでいる。長さは南北方向で4.1mで南側を3号堀に接続する。一部11号堀を掘り込み幅1.9m前後と推察する。覆土は11号同様で一部11号溝が埋まった時点での掘られ11号溝とは若干の時間差がある。



第55図 第10, 11, 12号溝実測図

遺物は、皆無で有り館の時期前後が推定され底部の縮りはやや有る。

○ 13号溝 (第56図)

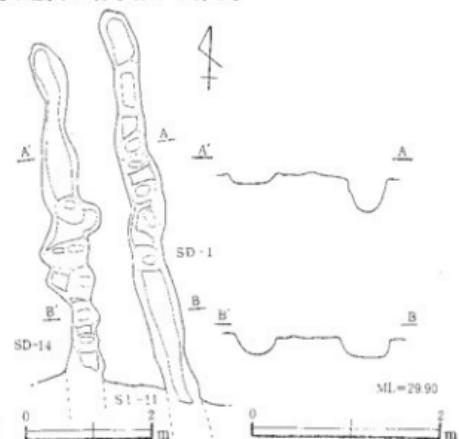
本遺構は、4号住居跡の北側に位置し検出された溝で南北方向に長い。底部は凹凸が激しく前述の4堀の形態に近い。長さ6.5m、幅40~60cmで掘り方はU字状から鍋底状形態。深さは20~35cmと浅い。遺物は土師器甕が4片程出土している。本遺構の時期、性格は不明、4堀の枝堀？。

○ 14号溝 (第56図)

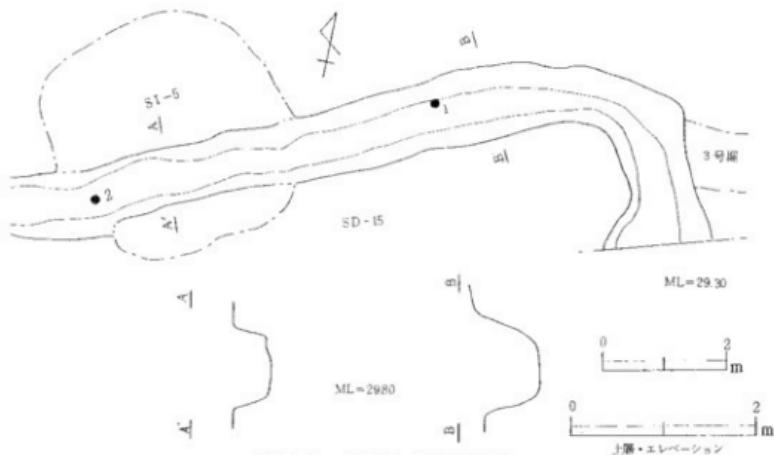
本遺構も13号溝と平行し掘り方底部形態が南北逆になるだけで、長さ、幅、深さとも一回り小さいだけで大差はない。遺物は、皆無で時期、性格とも前者と変わらないと推定される遺構で有る。遺物は甕と思われる破片が出土しているのみで有る。

○ 15号溝 (第57図、第58図)

本遺構は、館遺構の南西部に位置し西側、南側をエリア外に置き5号住居跡を掘り切っている。したがって西側の端部、南側端部の納まりは不明で有る。西側から11m程直線的に伸び、鋭角的

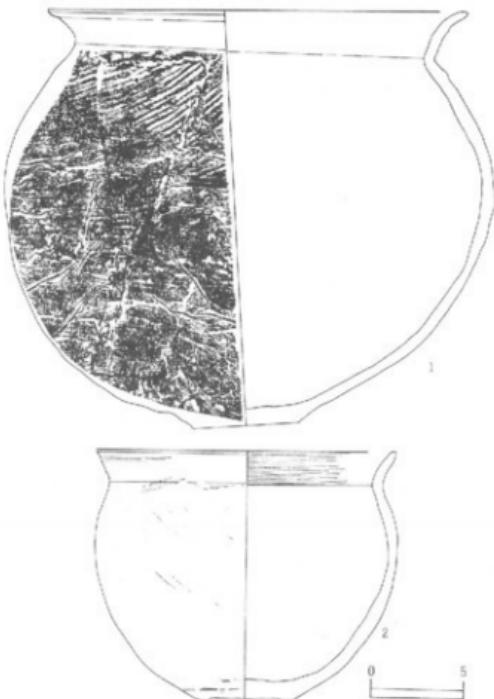


第56図 第13, 14号溝実測図



第57図 第15号溝実測図

に南に折れる。南側1mは傾斜面道路へ移行する。西側は尾根状に伸びるが、これに付随するとは考えられない。幅は1m前後で掘り込みは箱状で西側で40cm、東側で65cmと深く掘り込まれていた。底部は粘土層まで掘り込む。遺物は、広頸甕が大小2個体出土している。（第58図）1は斜めのヘラ状工具で斜めに調整している。胴部はややつぶれた球形状を呈し、頸部の括れは弱く短い。[く]の字状に強く外反する。焼成は良い。2は小型で鉢に近い形態。胴部はやや開き気味で頸部の縫りは弱い。口縁部にナデが見られる。胴部は刷毛状工具でナデ調整している。（第66図）7は打製の石器で端部に磨耗痕が見られる。その他（第59図）12～19がある。14は東海系の土器か、燃糸に付加条文が施されている。17は刷毛目状工具で調整。その他、羽状構成、附加状2種の縄をもつものが見られる。時期は古墳時代、王領期に相当する。



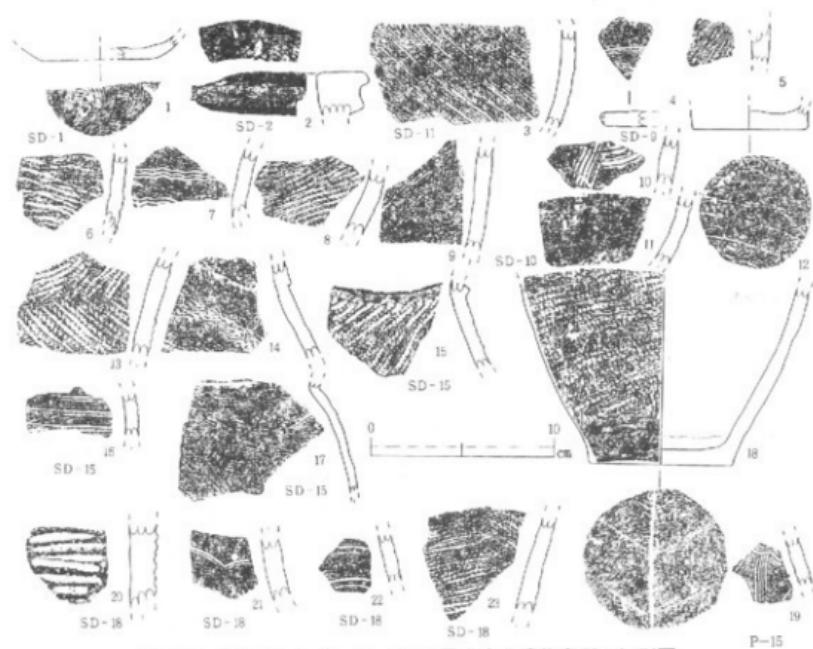
第58図 第15号溝出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	広頸壺 土師器	A 22.5	底部はやや上底気味で球形胴部から頸部の縫りは弱く短い。口縁は外反し水平に近く口唇部はうすく丸く收める。	カキ調整 ヘラケズリ ナデ	細石、スコリア、砂 にぶい赤褐色 普通	80% 覆土中
		B 22.4				
		C 5.7				
2	広頸甕 土師器	A 13.5	広頸。上底状 口縁部は短く開く。	ヘラ状工具で 成形	細石、スコリア 淡い赤褐色 普通	
		B 8.0				
		C 5.0				

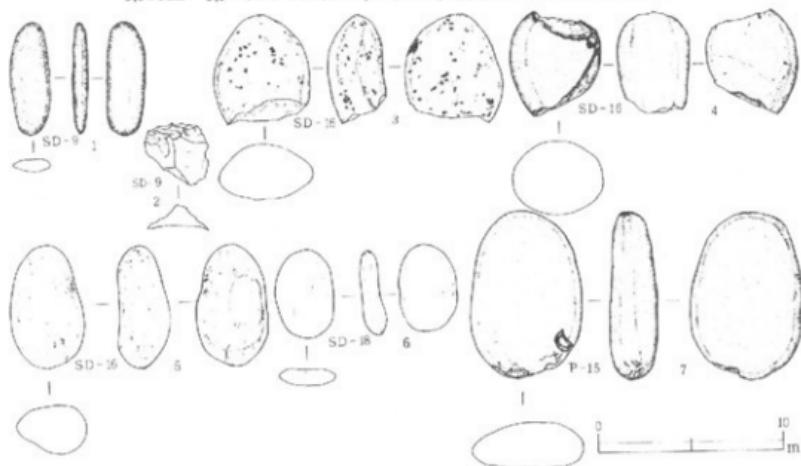
出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
18	広頸壺 弥生	A 一 B 一 C 7.8	上部大半を欠失し器形からは広頸壺か? 胴下半部は付加条1種か。底部木葉痕。	ナデ	細石、長石、砂、スコリア、にぶい黒褐色 やや不良	



第59図 第1, 2, 9, 10, 11, 16, 18号溝出土遺物実測・拓影図

P-15



第60図 第9, 16, 18号溝・第15号ピット出土遺物実測図

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
1	材製石斧	6	2.1	0.6	15	流紋岩	覆土中	完形 SD-9
2	フレイク	3.3	3.3	1.2	10	チャート	覆土中	“ SD-9
3	打製石斧	5.5	5.2	3.0	115	安山岩	覆土中	半欠 SD-16
4	“	5.6	5.0	4.0	140	流紋岩	覆土中	1部欠失 SD-16
5	“	6.5	3.9	2.7	105	安山岩	覆土中	完形 SD-16
6	“	4.3	3.1	0.9	19	安山岩	覆土中	完形、小形 SD-18
7	“	9	6.1	2.4	210	流紋岩	覆土中	完形、やや大型 P-15

○ 16号溝 (第61図、第60図)

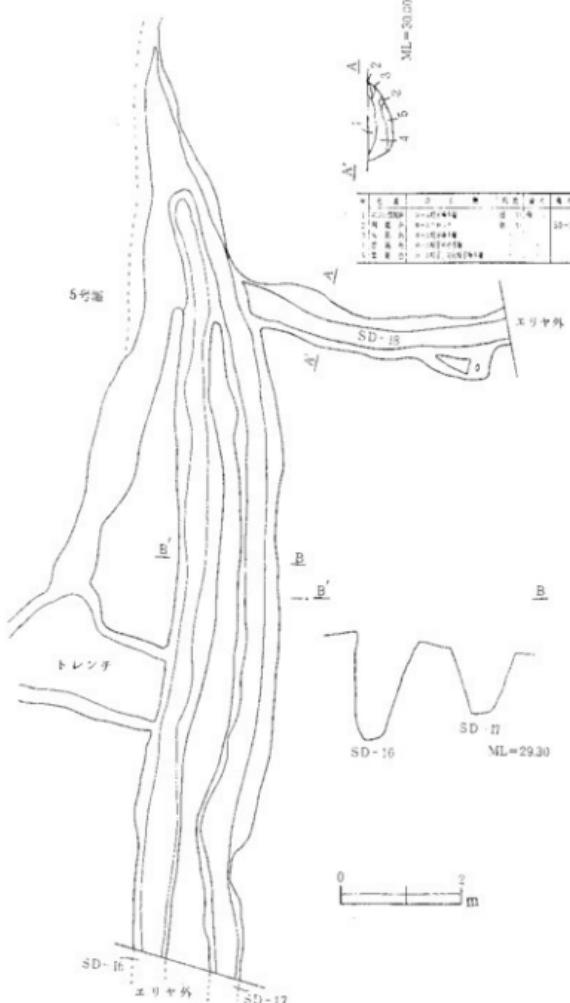
本遺構は、5号掘の南側に見られた道路(通路)状遺構で東西方向に長さ15m、幅70cm前後で底部は幅30~50cmでかなり良好な状態に固められ、長い期間通路と利用されていたと推察される。深さは中央部1.9mと深く覆土から館遺構と時期の差が見られ屋敷段階のものと推察する。大半の覆土が人工的な埋積土に覆われている事からも肯定される。覆土は人工的な埋積で17号溝も同様な覆土の層位である。遺物は縄文土器9、弥生式上器17片、土師器甕16、壺3、川原石79、石器4が出土している。

○ 17号溝 (第61図)

本遺構は、16号溝と平行して検出された溝で2m程長いだけではほぼ同一の様相を示し16号同様下端は地山にいたる。これが元の地形と理解する。南側端部は土砂崩れの為2m程残して調査を終了した。よって登り口は不明。もともと下部は畠として利用され削平を受け検出は不可能である。遺物は縄文土器7、弥生式21、土師器甕15、壺7片が出土し器形の窺えるものはない。覆土も同様である。

○ 18号溝 (第61図、第60図)

本遺構は、17号溝の東側から検出された遺構で南側はエリア外になり不明。長さは南北4.4mで幅50~70cmで掘り込み深さは40cm程で緩いU字形状態。覆土は、5層で色調は鈍い黒褐色、明褐色、黒褐色、暗褐色等でローム粒子、ブロック混入の差。粘性、締りは強い。館関係の遺構と推察される。堆積状態は自然埋積。遺物は、60図に示した縄文土器20、弥生式土器21~23、土師器甕15、壺7等がある。時期を特定する遺物は無い。



第61図 第16, 17, 18号溝実測図

○ 21号溝 (第62図)

本遺構は、館中央部東側に位置し南北6.3mで幅1m前後で掘り込みは緩いU字状掘り込みで

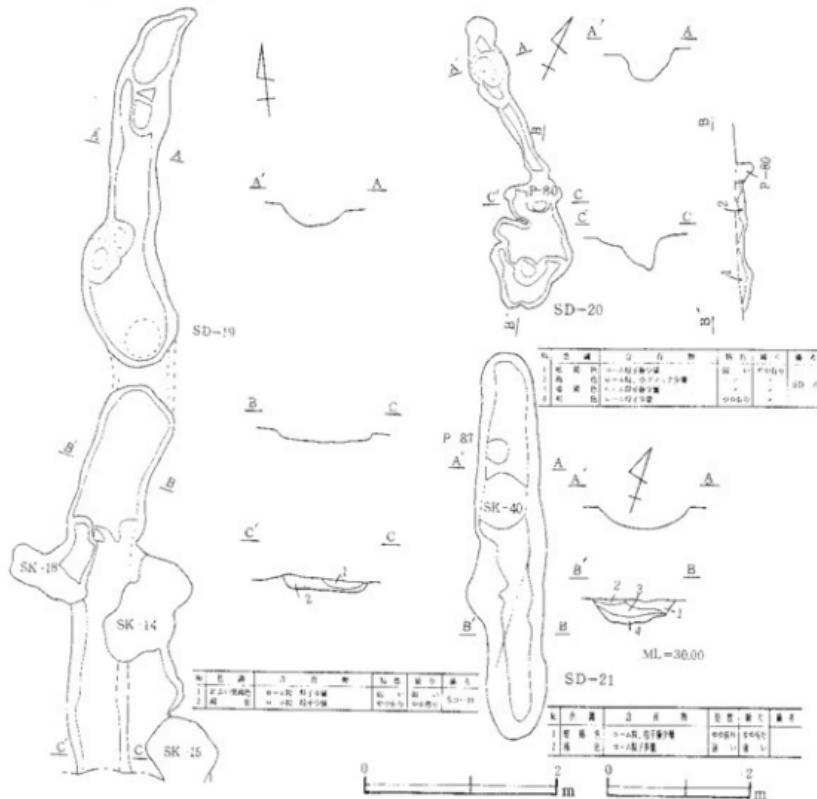
○ 19号溝 (第62図)

本遺構は、館南東側に位置し4号堀の東側に並列する。南北12.5m、幅80cm~1m程のプランで深さは15~30cmと浅く弱いU字状形態。覆土は2層で色調は鈍い黒褐色、褐色で粘性、締りは弱い。遺物は磁器1、川原石8が出土している。館の堀の一部と推察される。

○ 20号溝 (第62図)

本遺構は、19号溝の東側に位置し長さ南北4.7m、幅30cm~1.3mと不規則な掘り込みでピット69、80号に掘り込まれて不規則な形態。深さは15~40cmと不規則、凹凸がある底部で締りは弱い。覆土は2層で色調は暗褐色、褐色で粘性、締りはやや強い。遺物は弥生式土器2片、土器破片4片が出土している。

底部はやや締りをもつ。深さは40cmではほぼ自然埋積と推察される。色調は暗褐色、褐色等で粘性、締りは弱い。ローム粒子、小ブロック混入の差。中央部に40号土坑と87号ピットが掘り込まれていた。遺物は、皆無であった。



第62図 第19, 20, 21号溝実測図

○ 22号溝

本遺構は、21号溝の西側に位置し南北方向に長さ16.7mを測る。幅は1~2mで不規則なプラン。掘り込みは10~20cmで浅く底部は凹凸がはげしい。締りは悪い。覆土は2層で色調は褐色、暗褐色で粘性、締りはやや有る。内部には土坑が1基掘れています。遺物は、土器12, 瓦1, 内耳1, 瓦5, 濱戸1, 磁器2, 川原石49等が有る。出土遺物からは近世の遺構と推察される。

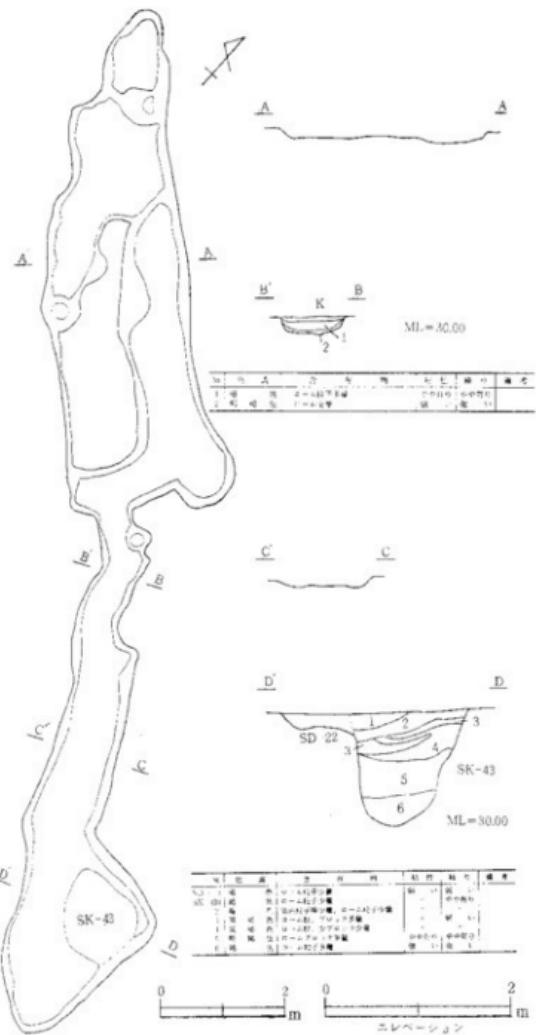
以上のべてきた遺構からは直接館、屋敷に係る遺構は少ない。性格の不明な遺構が多い。それ

程地形的には生活に適していない地理的環境に恵まれていたと理解すべきか。

10. トレンチ (第64図、第65図)

その他地形、遺構確認のため4本のトレンチを設定し遺構の確認に努めた。その結果各トレンチから若干の遺物が出土している。主な遺物について個数を述べておきたい。

- 1トレンチからは弥生式土器1。2トレンチからは縄文土器20、弥生式土器12、土師器甕55、壺7。3トレンチからは縄文土器12、弥生式土器36、土師器甕100、壺2、磁器1、セト1、石器1。4トレンチ縄文土器4、弥生式土器14、土師器甕17、壺3、高壺1等が見られた。縄文1、弥生式土器12、土師器甕1、石器4点を図示した。7はアナグラ属の腹縁を利用した早期田戸下層式上器の深鉢。1~3.5.6、8~14は弥生式土器。複合口縁で口唇部に縄を施す1、附加状の地紋の上に3本単位の沈線でY字状モチーフをもつ2,

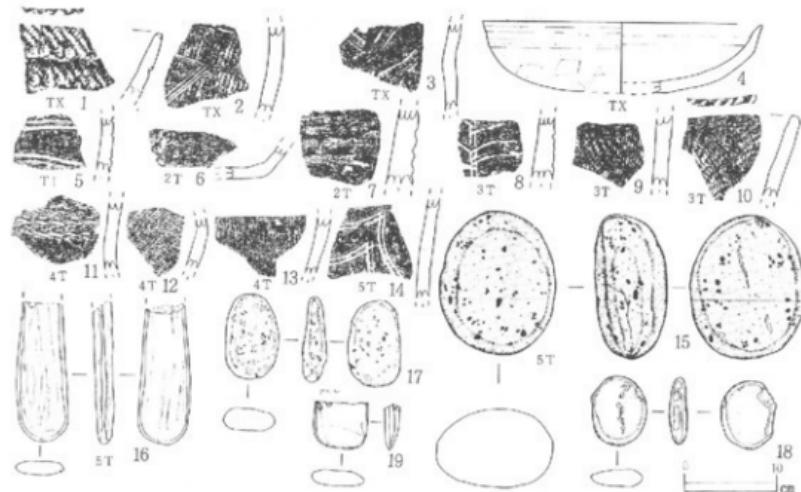


第63図 第22号溝実測図

4本単位の沈線で網状文様帯を構成する3。5は半裁竹管による平行沈線が2本見られる。8は肋骨文のモチーフ9、10は細かな縄目をもつ土器で10は口唇部に縄が施される。12、13は撲糸で胴部文様体でやや古手の破片。14は半裁竹管による山形状のモチーフをもつ頭部。弥生式土器

は一部を除き頸部磨消に沈線による文様態をもつ。4は皿に近い杯で口唇部は尖る。15からは石器でいずれも川原石をもちいた安山岩、粘板岩をもちいている粗製の石器群である。18は指り石状。その他遺構確認等で出土した遺物がある。(第64図)

65図は表面採集した遺物で1~3は縄文土器。半裁竹管による平行沈線文が横走する。4, 5は弥生式土器で平行沈線が曲線、又は横走する。6はループ状文が二本見られる。これらはいずれも頸部磨消部である。10, 11は常滑の破片である。13からは半粗製の石器で13は大型の石斧、14, 15は川原石を利用した粗製の石器。16は半欠した石器。縁閃文岩が多く利用され一部安山岩も見られる。



第64図 各トレンチ出土土器・石器実測図

出土土器観察表

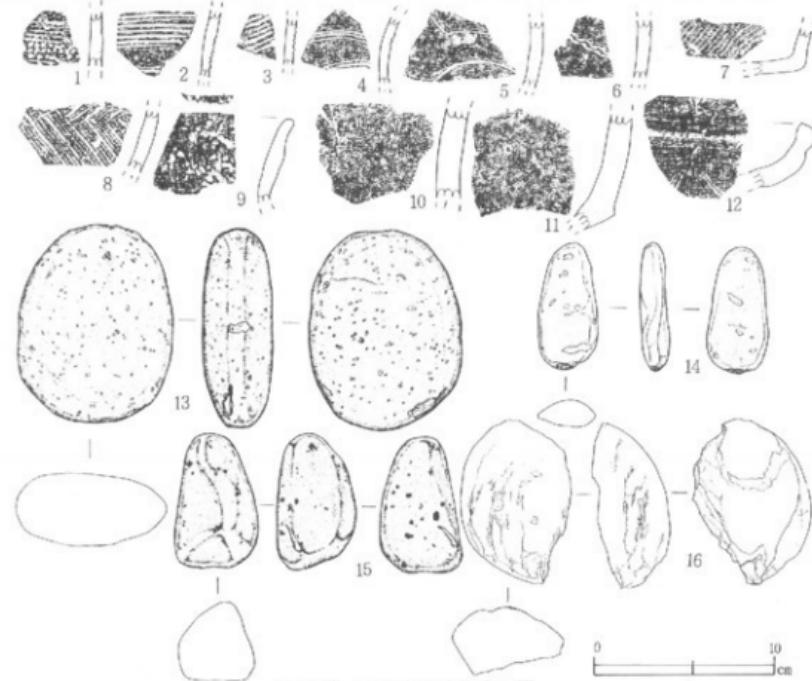
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
4	土師器	A 15 B — C —	大部分欠失している。 口唇部は光る。	ナデ ヘラケズリ	細石 褐色、普通	覆土中

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
15	打製石器	7.8	6.3	4.2	249	安山岩	覆土中	たたき石、先端と両端に使用痕を認める。
16	磨製石斧	7.5	2.8	0.8	30	粘板岩	覆土中	半欠ハマグリ刃

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
17	材製石斧	4.6	2.9	1.2	22	安山岩	覆土中	小型
18	"	3.6	2.9	0.9	18	安山岩	覆土中	やや大型の石斧
19	磨石	2.5	2.9	0.8	10	安山岩	覆土中	小型

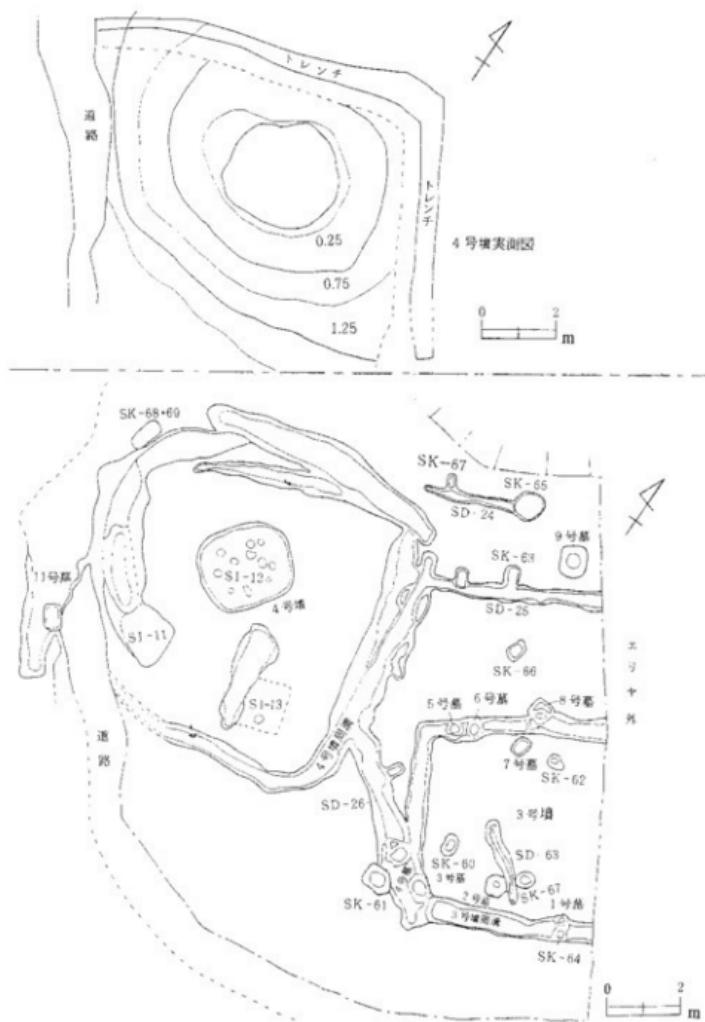


第65図 表探出土遺物実測図

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
13	打製石斧	10.6	8.4	3.9	460	安山岩	覆土中	
14	"	6.8	3.2	1.4	95	安山岩	覆土中	
15	"	7.2	4.3	4.2	180	安山岩	覆土中	
16	"	8.5	5.9	3.5	210	安山岩	覆土中	かなり使用 半分欠失。

VI 大麻古墳群



第66図 3号墳・4号墳測影図・溝・土坑・墓全測図

はじめに（第66図）

本古墳群は古くからその存在が知られ古来より幾多の人々によって掘替えされ、また畠地、麻生高等学校、土砂採取によって古墳群は現在ほぼ煙滅に近い状態にある。

以前平成2年土砂採取により一部煙滅し残った部分を調査した所、本調査区には古墳は存在しない事が判明した。いずれも江戸時代初頭から後半の墓で有ることが明白と成了。これは出土した副葬品、埋葬に使用された常滑の甕が雄弁に物語っている。これらから隣接する本地区を調査するにあたり「墓」が検出される事が当初から推察できた。そして古墳が1基存在する事もほぼ確認出来た。このような状態で調査に入った。（第66図）

以下住居跡、古墳、溝、墓の順に調査の概要を述べる。なお調査に至る経過。調査日誌は前述の項とだぶるので省略する。なお遺構番号は小屋ノ内からの通し番号を使用した。

1. 住居跡

本遺跡からは4号古墳上から3軒の住居跡が検出された。以下11号住居跡、12号住居跡、13号住居跡の順に概要を述べる。

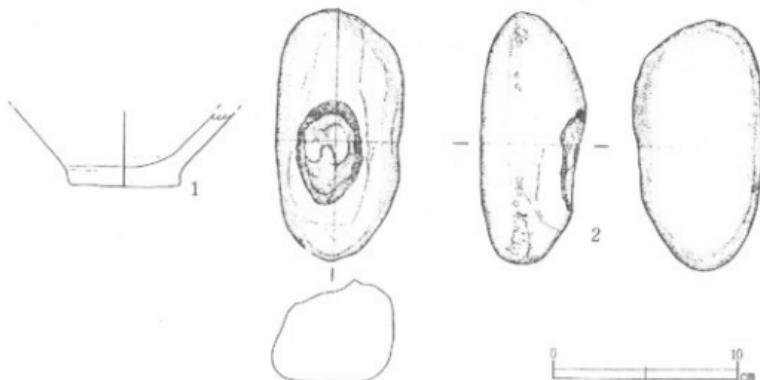
○ 11号住居跡（第67図、第68図）

本遺構は、4号古墳西南側に存在し大半を削平され東北側隅部が遺存していたに過ぎなかった。焼土、炭化物の残りから推察すれば北側に炉をもつ遺構と推察される。主軸をN-20°-Eに置き東西約5m前後の方形プランの遺構で有る。東側で25cmの掘り込みをもつ。床面は貼床で良好な面を残す。一部周溝を認める。大半は道路と古墳築造によって欠落した。柱穴は、確認出来ない。覆土は、2層で色調は褐色、暗褐色で2層中には多量の炭化物、焼土粒子を多量に含む。締り、粘性はややある。甕、炉は確認出来なかった。

遺物は、甕の底部が見られやや上げ底気味で開いて立ち上がる。2は大型の打製石斧で先端部に磨耗痕が認められ中央部には剥落痕が見られる。



第67図 第11号住居跡実測図



第68図 第11号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様			整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1 土器	土器	C 6.0	上底気味で外反して立ち上がる。 二次焼成 底部のみ。			ナデ	砂、褐色、普通	覆土中 20%

石器一覧表

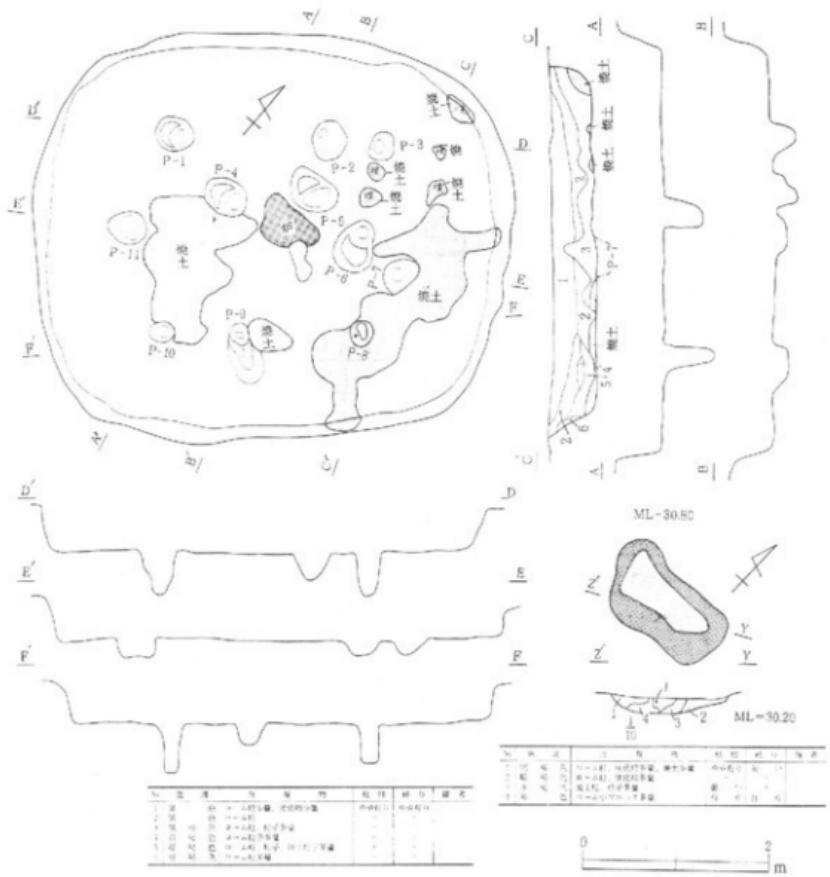
番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
2	打製石斧	13.5	6.8	5.5	732	安山岩	床直	1部欠

○ 12号住居跡 (第69図、第70図)

本住居跡は、4号古墳中央部に位置し主軸をN-55°-Eに置き隅丸形態で東西4m、南北3.7mを測る。掘り込み深さは45cm前後で古墳盛土の下部から検出されている。床面には多量の焼土が散在して検出され、炉は中心部やや北よりに位置し認められた。床面は貼床で中央部を中心と良好に固められている。一部焼けた面が認められれば平坦で周溝は認められない。

炉は、東西1.45cm、幅70cmの地床炉で深さ15cmを測り4層に分けられる。色調は、明褐色、暗褐色、赤褐色、褐色でローム粒、炭化粒、焼上粒子、ロームブロックを含み粘性、締りは全体的に弱い。炉は、東西方向に長いやや変則的な形態である。柱穴は、1, 3, 8, 10が該当する。いずれも径25cm~40cmで深さ40cm前後の円筒形状形態ではほぼ同一である。その他7個のピットが見られる。

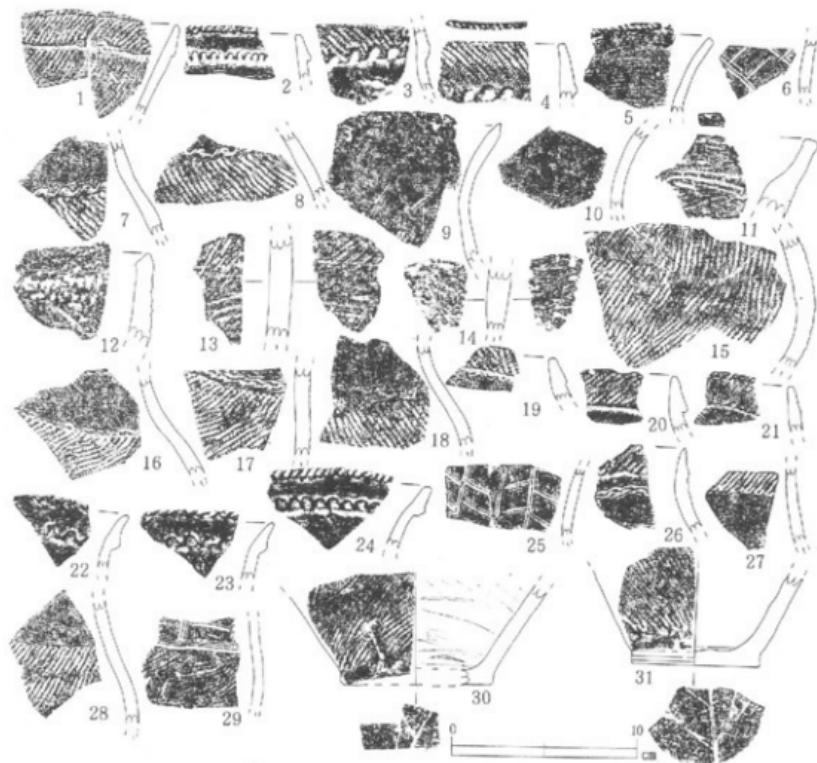
覆土は、6層に分けられ色調は黒色、黒褐色、暗褐色等でローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含む。層序は、レンズ状の自然埋積を示し粘性、締りはやや有る。遺物は、100片の縄文式土器が見られた他は土師器70片が有る。主体を占める物は弥生式土器で215片程の出土を見た。その他川原石が145個が出土している。1, 2, 4, 5, 11, 22, 23, 24は口唇部に縄を施している。



第69図 第12号住居跡実測図

る。5を除きいずれも複合口縁部をもつ土器で器形は広頸壺が大部分である。1は単節の縄、2～4, 22～24は、磨消部に押圧を加え3, 4は単節の縄が施されている。5のみ磨消で無文帯である。9は頸部磨消で下端に僅かに縄が見え18も同類で有ろう。(縄が反対) 16, 17, 18は頸部磨消で胴部文様帶にループ状結節文が見られる。26は複合口縁部の下端に施している。20, 21は

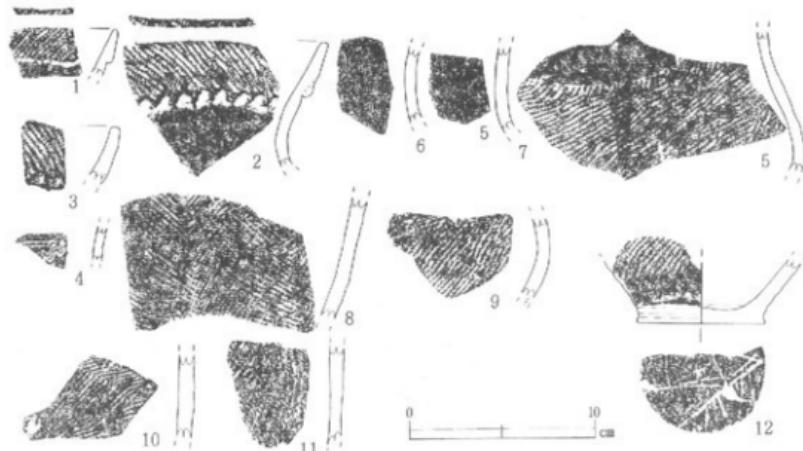
複合部に縄を施す。25, 29は同一固体と思われ半裁竹管状工具で格子状文様を施す。30, 31は底部で30は洞部が開く広頸壺か、31は上げ底気味の底部をもつ小型の長頸壺と推察され、松延に近い一群の土器で2系統の土器が見られる後期末の住居跡で有る。13, 14は縄文時代茅山式の破片で有る。



第70図 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
30	広頸壺 弥生式土器	C 8.0	底部のみで大形の器形か。肩部は開く。	ナデ、縄	長石、暗褐色、普通	
31	広頸壺 弥生式土器	C 6.8	やや小型で長頸か。肩部は直立気味。	ナデ、縄	長石、暗褐色、普通	



第71図 第12号住居跡出土遺物実測図

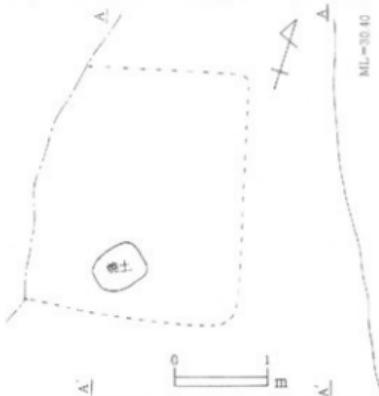
出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
12	広頸壺	A — B — C 9.0	やや大きめの底部から外反して立ち上り、かなり長脚形状剖部、頸部、口縁部を欠失する。	ナデ ヘラケズリ	細石、長石 暗褐色 普通	20% 覆土中

その他、文章、図版作成後本住居跡の遺物が20片程紛れていた。その中から12片を図示した。(第71図) 1, 2, 3はいずれも口縁部で1は複合口縁部で口唇部に縄を施す。複合口縁を呈する小型の広頸壺か。二段の可能性あり。2, 3は、かなり大きめの広頸壺で一段の複合口縁、下部に指頭の押圧が見られる。5は頸部で磨消、その他、羽状繩文、刷毛目調整の二種類が見られる。

○ 13号住居跡 (第72図)

本遺構も4号古墳の上に床面のみ遺存していた。床面のみ一部明瞭に存在していたが広がり、範囲は捉えられず図面も図示出来なかったが4号古墳の中に破線で想定しておいたのが推定である。柱穴、炉は検出されない。したがって時期は不明で有る。



第72図 第13号住居跡実測図

2. 土坑

本遺跡からは11基の土坑が検出された。遺構の番号は小屋ノ内館遺跡の番号を続けて使用した。60号～69号までで有る。以下遺構の概要を後述する。

○ 60号土坑（第73図）

本遺構は、3号古墳の中に掘り込まれた墓壙状の遺構で長さは南北1.2m、幅75cmで掘り込み深さは40cmで底部は平坦。締りは弱い。覆土は2層で暗褐色、褐色で締り、粘性は弱い。遺物は皆無で時期等は遺構位置、古墳内部の状態から江戸時代末か。

○ 61号土坑（第73図）

本遺構は、3号古墳西側の周溝に一部かかり検出された。ほぼ方形プランで東西1.45cm前後で掘り方はゆるやかなU字状形態で深さは55cm程を測る。底部は倒卵形形状で締りはやや有る。遺物は縄文土器3、弥生式土器1、鉄滓1が出土している。遺物からは古墳時代前後の遺構と推察されるが特定する遺物は無い。底部に焼土が散在する。

○ 62号土坑（第73図）

本遺構は、3号古墳北側に位置し抜根状の土坑で東西1m、南北70cm程のプランで掘り方は緩やかで底部の締りは弱く、深さは20cmと浅い。遺物は皆無で時期、性格を特定するものはない。感じから江戸時代以降の遺構と推察する。

○ 63号土坑（第73図）

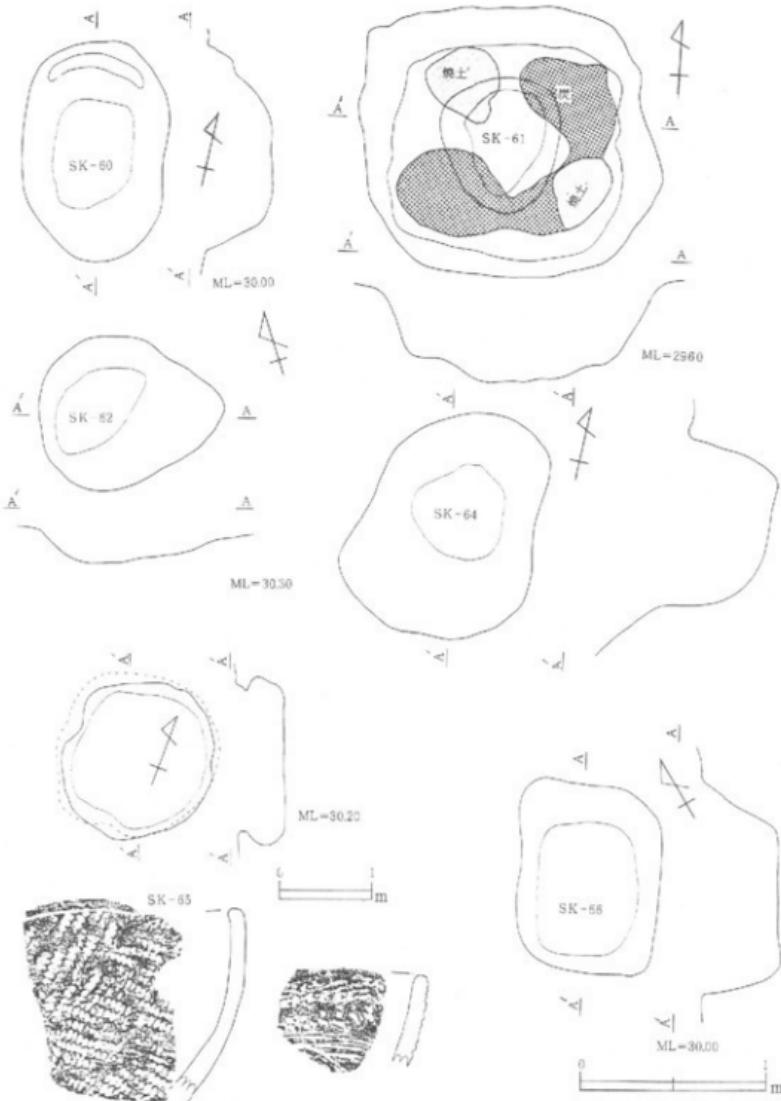
本遺構は、遺跡北側の9号墓近くの25号溝に一部掘られて検出された遺構で有る。長方形状遺構で規模は東西1.3m前後で幅80cmで掘り方は緩やかなU字状掘り込みで底面は締りはやや有る。覆土は3層で色調は褐色、暗褐色でロームブロック、粒子、粒の混入の差で締りは強い。遺物は皆無で覆土から江戸時代以降の遺構とすいさつされる。

○ 64号土坑（第73図）

本遺構は、遺跡南側の3号古墳周溝から検出された遺構で北側には1号墓が所在し一部切り合った関係にあり南北1m、幅70cm前後で掘り方は墓壙状で90cm、底部の締りは弱く覆土は、3層で人工的な埋積を示し色調は黒褐色、暗褐色、褐色で締りは弱い。遺物は土師器が65片程出土している。遺構時期は江戸時代前後か。

○ 65号土坑（第73図）

本遺構は、遺跡北側に位置し径1.65mの円形の縦穴状土坑で中央部20cm程膨らみフラスコ状形態をもつ遺構プランで有る。遺物は縄文土器が17、弥生式土器が5片、土師器甕50片程見られた。掘り込み深さは50cmで底部の締りは良い。覆土は3層で色調は黒褐色、暗褐色、褐色で締り、粘性は強い。遺物は73図1、2を図示した。1は繊維を多量に含み口縁部に半裁竹管の押し引き



第73図 第60, 61, 62, 64, 65, 66号土坑実測図

で文様を構成する茅山上層式の土器で類例は少ない。2はやや内傾気味の粗製の深鉢形土器で単脱の縄が羽状構成している。これらの遺物から縄文時代前期の所産である。

○ 66号土坑 (第73図)

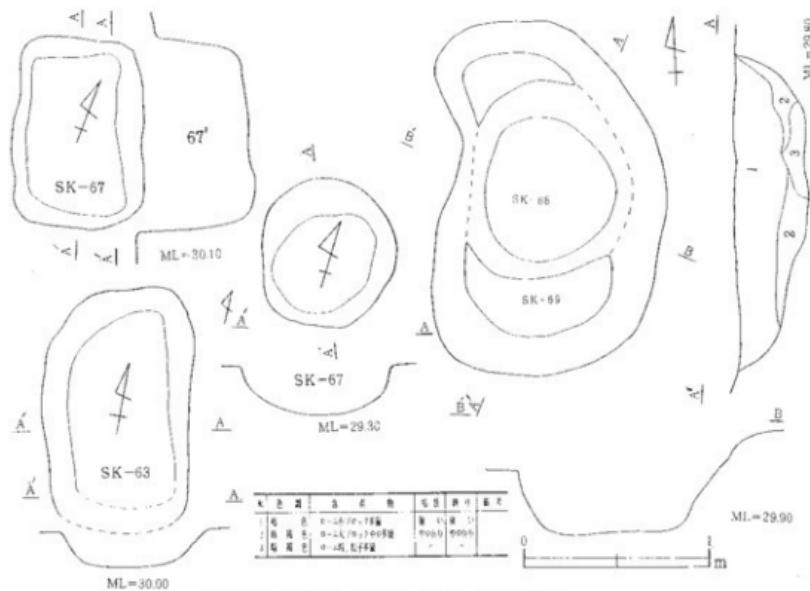
本遺構は、3号古墳の北側に検出された長方形状の遺構で東西75cm、南北1.5mのプランで掘り込みは台形状態で深さは40cm測る。底部は平坦で縛りは弱い。覆土は3層で色調は暗褐色、褐色、明褐色でローム粒子、ブロックの混入の差で縛りは弱い。遺物は皆無で時期を特定するものはないが、覆土は人工的埋積を示すことから江戸遺構の遺構と推察する。遺構形態からは墓壙の可能性が想定される。

○ 67号土坑 (第74図)

本遺構は、3号古墳の中、64号土坑の西側に位置する小型の円形状プランの遺構で有る。径80cm程で掘り込みは鍋底状で深さ20cm。底部の縛りはやや有る。覆土は、2層で色調は暗褐色、褐色で自然堆積で粘性、縛りは弱い。ローム粒子、粒、ブロック混入量の差で有る。遺物は皆無で時期、性格を特定出来るものはないが覆土層序、位置等から江戸時代以降と推察する。

○ 67'号土坑 (第74図)

本遺構は、25号溝の西側部分に位置しサツマイモ貯蔵穴の形態で南北1.1m、幅70cm、深さ90cm壁面は鋭角で近世の埋葬用の『くら』に共通する形態で有る。覆土は人工的埋積で1層、色調



第74図 第67, 67', 68, 69号土坑実測図

は褐色でローム粒子、粒、ブロック等が混在する。底部に少量の黒色土が見られた。遺物は、皆無で時期を特定するものは無い。25号溝を掘り込みこの溝より新しくなることは断定出来る。

○ 68, 69号土坑（第74図）

本造構は、長円形状土坑で4号古墳西側から検出され南北に一段テラス状に存在する部分が見られ中央部の低い部分は深さ40cmで中央部に円形状に一段低い部分が見られる。底部の締りは良好で覆土は、3層で色調は褐色、暗褐色等でロームブロック、粒、粒子の混入量の差。粘性、締りは強い。遺物は、土師器甕1、川原石3、陶器1、入歯1が出上している。これらから近世戦後の造構と推察した。旧を68号とし、切りこみ土坑を69号土坑とした。

VII 古 墳

1. 古 墳

○ 3号古墳

本古墳群からは2基の古墳が検出された。当初は4号古墳のみで地形測量は4号古墳のみ測量調査を実施した。3号古墳は表土（旧畠地層）を除去した所溝が方形に認められ、これを調査した

エリヤ外



第75図 第3号墳周溝実測図

所古墳と判明した。形態は周溝のプランから方墳と推定される。南北11~12mで東西は12m前後か。周溝の掘り込み形態は地形の高低が有るために差が有るが、ほぼ鍋底状で一定の形態で有る。幅は80cm~1.2mで深さは40~80cmで底部は比較的平坦で縁りはやや有る。東側の一部はエリア外になるため全容は把握出来ない。周溝覆土は、地形状高低がある為に部分的に差が有る。全体には3~4層で色調は黒褐色、鈍い黒褐色、暗褐色、明褐色層で有る。いずれもロームブロック、粒、粒子等の混入量の差である。いずれの部分も自然埋積と断定出来る。

遺物は、土師器が50片、弥生式土器が40片程出土している。1は胴部円形状の球形状の壺で口縁部を欠失している。周溝から出土している。2はロクロ水挽きで成形痕残し底部に回転糸引き痕を残す完形の杯で周溝より1m程墳丘側に位置しローム土の中に半分埋まって出土している。特別な遺構は存在しない。単独で出土した。かなり新しい時期の所産で平安時代。方墳の時期は特定する遺物はないが1の土器の後、奈良時代に入ると推察される。3,4は東海系の赤彩された壺の頸部破片で同一固体で有る。5,7,9も同一で有る。6,11は縄文時代の遺物で6は加曾利B式の粗製土器か、11は土製品で有孔円盤の一部である。その他川原石76、石器2、陶器1が出土している。



第76図 3号墳出土遺物実測図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考	
1	壺 土師器	A	上底から球形胴部に向って立ち上がり 脚部は球形、頸部、口縁部は欠失し不明。	ナデ ヘラケズリ	細石、長石 褐色 普通	70% 覆土中	
		B	—				
		C	6.5				
2	灯明皿 土師器	A	11.9	やや上延気味でゆるやかに外反し立ち上り 上り口縁部の大半に媒が付着し灯明皿	ロクロ水挽き ナデ	青母、長石、細石 淡い赤褐色 普通	99% 床直
		B	3.7	として使用したと思われる。			
		C	5.2				

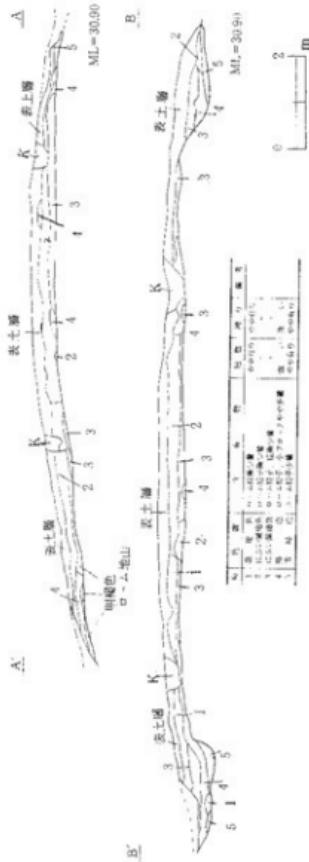
○ 4号墳

(第66図、第77図、第78図、第79図、第80図、第81図)

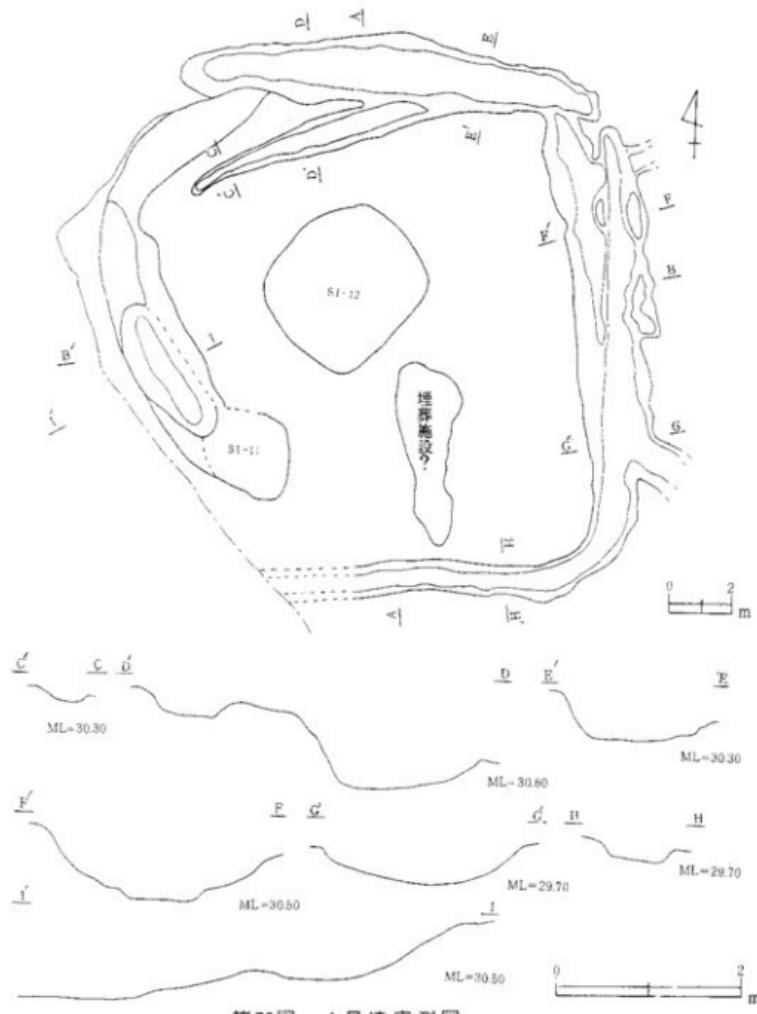
本遺構は、遺跡西側に位置し西側には農道が位置し一部消失する部分が存在する。西側、北側は畠地の傾斜面でかなり削平を受けていた。本墳自体も畠地に利用されかなり変形している。草刈り、測量の結果古墳として断定するにいたった。それまでは地彫れではないかと疑ったが籠竹を刈り 試掘段階で古墳であることは明白になった。測量調査の結果墳頂部を0mとした場合0は北よりに点として見られた。-25はほぼ円形状に巡るが西側でやや流れる。-50では長円形状北側部分のみ旧畠地のため変形、-75ではほぼ50のセンターをナツル、間隔はやや狭くなる。1mでは東側、西側で端部が流れる。一周するラインは75cmで1m、1.25mでは地山となり流れる。西側は道路として消失東側は畠地で平坦になり墳丘の流れは無い。

調査は、東西南北の4区に分割し2区、4区の表土層の除去をすすめた。その結果77図に示すような土層が認められた。これによれば大半は畠地で搅乱され下端は住居跡で地山に変わる。生きている部分はローム層が検出された。

土層は、以前畠地の為墳丘の盛土、土層は僅かで有る。東西方向では耕作上の下に1.2が見られ、これらは古墳構築時の盛土で単純なかけ揚げ的に見られるが上部は畠地で耕作搅乱が存在するため、この層の状態は不明で有る。鈍い黒褐色層でこれは下部に有る12号住居跡の覆土



第77図 4号墳墳丘土層実測図



第78図 4号墳実測図

である。周溝部分は自然埋積状で色調は鈍い黒褐色、褐色、暗褐色の3層が主体で有る。南北方向では南側が自然傾斜を示している為傾斜をもつ。土層的には差程の差は無い。埋葬施設と理解される部分の上部にもとくに変化は無い。締りは弱い。東西18m、南北18m前後の方形プランの方墳と理解する。

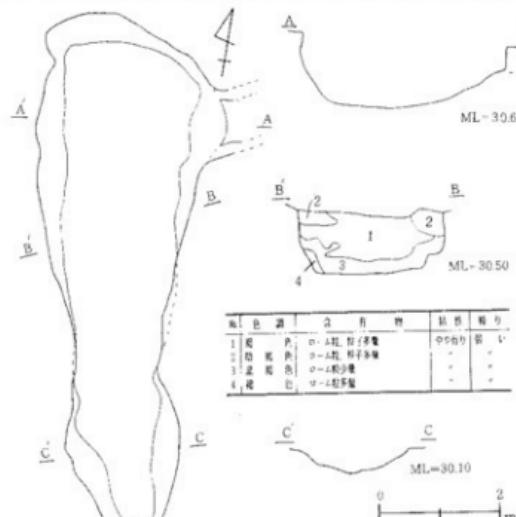
埋葬施設は、南側の2区部分から横穴式状の掘り込みが認められ、これが埋葬施設と推察したが遺物、副葬品は検出出来なかった。(第79図) 本埋葬施設は、古墳南側周溝部から掘り込まれ、南側に開口部を有する横穴式土坑を呈する。石材は1も片検出されず当初から地山を掘り込む施設と推察する。周溝部の入り口、羨道部は緩やかなU状で幅2m、深さ35cm前後で長さ3m程で前庭部長さ1.5m、幅2mで深さ1m程を測る。底面はやや踏み固められ、ここまではかなり出入りの存在が肯定出来る。前部からほぼ水平に遺構し明確な玄門は確認されず前室の部分を玄門として計測すると玄室は長さ3.3m、幅3mで底面では2mで長方形プランで有る。この部分はかなり上部が欠失し明確な計測は不可能に近い。覆土は4層で色調は褐色、暗褐色、黒褐色等でいずれもローム粒、粒子の混入量の差で有り粘性はややあるが縮りは弱い。

副葬品は皆無で鉄製品、玉類破片、石材、人骨等の痕跡は確認出来ない。これらの事から本古墳に埋葬がなされたのか疑問がもたれる。盗掘にしてはあまりにも見事な仕事ぶりで素人の掘り方では無い。もっとも本古墳群の大半は某氏によってかなり丁重になされたと聞く。

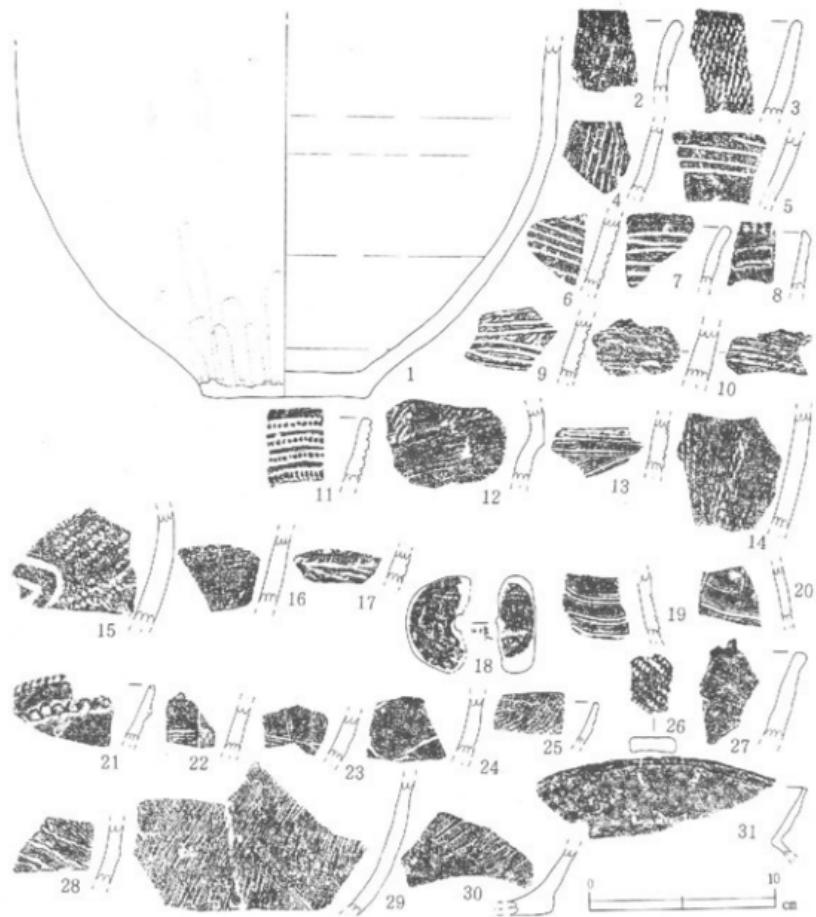
ひるがえって本埋葬施設が使用されなかった場合、施設はおとりとも考えられ本来空墓として作られ使用を目的としないと推察する。そうした場合副葬品が皆無であっても否定出来ない。しかし、上部の土層からは当初から本施設は存在したと理解したい。

80図は4号墳出土の遺物で1は、北東隅部周溝出土の土師器甕、胴下部のみ僅かにヘラケズリが見られる。2~18

は縄文時代の遺物で2、3、7、8、11は口縁部、2,3,4は燃り糸紋で稻荷台式。5~7,9,11,13は浮島式、8は黒浜式?。15は加曾利E式。18は土製品。19~30は弥生、頸部半裁竹管で磨消部に施文。21は口縁部、口唇部に押圧を加える東中根式に近い一群で有る。26は縄文の土器片で重さ5g。29は細い燃り糸を附加する胴下半部。30も同様。31は五領式の口縁部で薄く口縁部は、[く]の字に外反。口唇部は丸みをもつ。



第79図 4号墳埋葬施設実測図



第80図 4号墳出土縄文・弥生式土器実測、拓影図

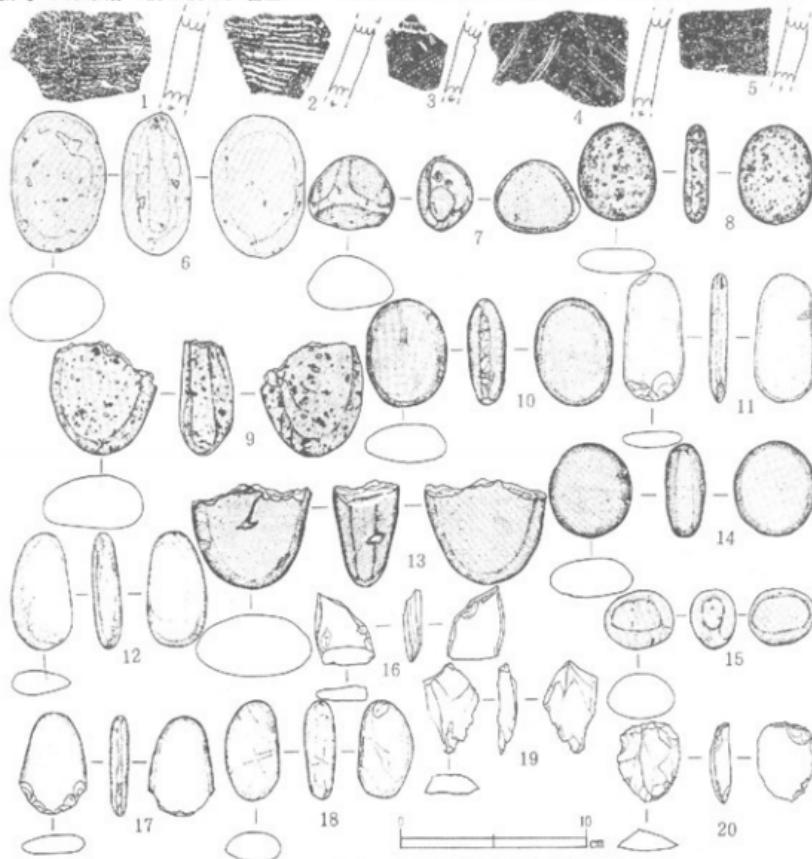
出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	縄土師器	A B C 9.0	やや大きめの底部から外反して立ち上がり長脚形状脚部、頸部、口縁部を欠失する。	ナデ ヘラケズリ	繊石、長石 暗褐色 普通	20% 覆土中

2. その他の遺物 (第81図)

本古墳からは縄文式土器 183 片、弥生式土器 71 片、土師器 397 片、石器 22 個、川原石 707 個が主な遺物である。その他瓦、ガラス、瀬戸等が出上している。これらは一度畠地として利用された事に一因すると理解する。

遺物はかなり磨耗、細片化が進み図示したのは 1、2 で条痕紋をもち纖維を多量に含む芽山式の胴部破片で有る。本類が多数を占める。3、4 は弥生式土器で 3 は平行沈線の間に細かな沈線が継位に見られる頸部下端の土器。4 は 3 本単位の山形紋を頸部磨消部に施す土器で大型の広径壺か。5 は常滑の胴部破片。石器は 6～20 で 18 迄は川原石を利用して打製の石器で先端部に若干



第81図 4号墳出土遺物実測図

の磨耗痕残す。緑泥岩、安山岩等で19、20は緑閃紋岩でかなり加工剥離がなされた19は石核、20はナイフ形の石器でかなり古い時代の加工方法が見られる。縄文早期前後か。

石器一覧表

番号	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大孔厚				
6	石器	7.6	5.0	3.7	215	緑泥岩	覆土中	両端に使用痕を認める。
7	石器	3.9	4.6	2.9	65	緑泥岩	覆土中	周辺部のみ加工痕を残す。
8	石器	5.3	4.2	1.3	48	緑泥岩	覆土中	円形状に加工している。
9	石器	6.3	5.6	2.9	142	緑泥岩	覆土中	上部欠失
10	石器	5.8	4.3	2.1	70	緑泥岩	覆土中	円形状に周りを加工している。
11	石器	7.0	3.3	0.9	32	安山岩	覆土中	一部剥離加工を認める。
12	石器	6.4	3.2	1.3	40	安山岩	覆土中	川原石状
13	石器	5.8	6.3	3.3	150	緑泥岩	覆土中	もを欠失する。
14	石器	5.1	4.5	2.1	65	緑泥岩	覆土中	すり石状
15	石器	3.2	3.7	2.4	31	緑泥岩	覆土中	すり石状
16		3.8	2.8	0.8	15	緑泥岩	覆土中	
17	石器	5.4	3.6	1.0	29	安山岩	覆土中	加工痕をもつ。
18	石器	5.4	3.0	1.6	41	安山岩	覆土中	使用痕をのこす。
19	石核	4.9	2.8	1.0	15	緑閃紋岩	覆土中	
20	搔器	4.4	3.4	1.1	20	緑閃紋岩	覆土中	片刃をもつ。 ブレ?

3. 溝

本遺跡からは3本の溝が検出された。以下この溝の特徴、時期、出土遺物について23、24、25、26号溝の順に後述する。溝番号は小屋ノ内遺跡からの通し番号をもちいた。

○ 23号溝（第82図）

本遺構は、3号古墳中の南西部に位置し検出された南北4.7m程の短い溝で幅4~80cm、深さ30~60cm程でU字状掘り込み。小規模な遺構で有る。南側に2号溝が掘り込まれ、一部欠失する。覆土は3層で色調は暗褐色、褐色、明褐色ローム粒、粒子、ブロック混入の差。締り粘性は強い。遺物は、土師器甕の破片が3片程見られた。時期、性格は不明。切り合いからは室町時代前後か。

○ 24号溝

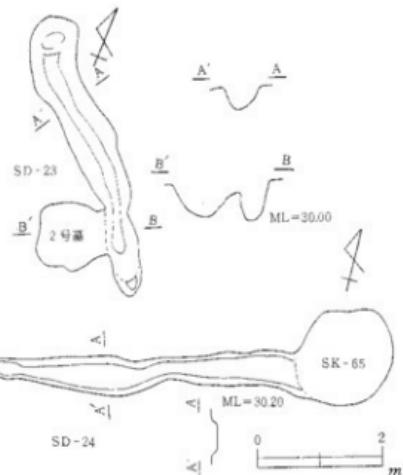
本遺構は、調査区北側に位置し検出された遺構出東側に65号土坑（縄文時代）が有り、これが

らのびるな形で西側に5m程のびる。東側は土坑の中で消える。幅は40~60cmで掘り込みは10cm前後と浅い。65号土坑と付随一体化は不明。可能性は強い。

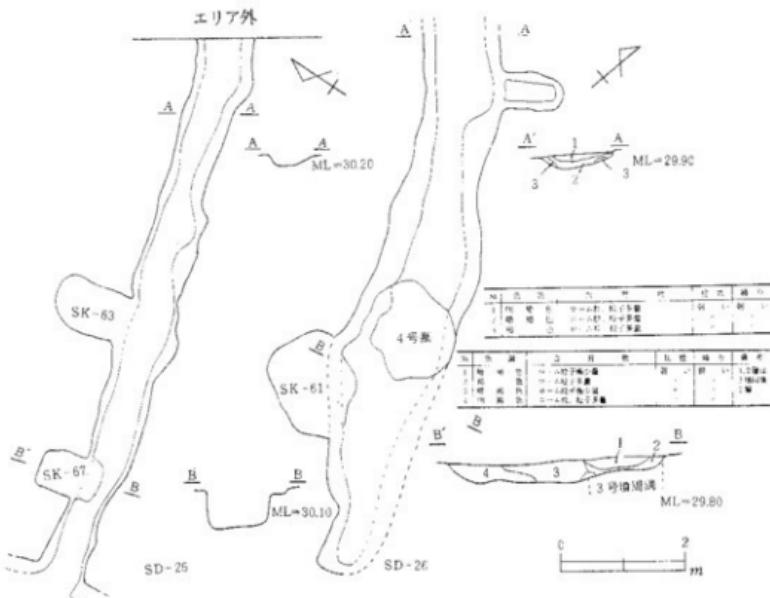
遺物は皆無で時期は特定出来ない。

○ 25号溝 (第83図)

本遺構は、3号墳北側から検出された遺構で東西9mで直線的な掘り込み。幅は70~1.1m程で掘り込みは浅く10cm前後で西側は4号墳周溝に合流する。時期的には古墳築造時期とさほどどの時間差はもないと思察する。中程、西側に63, 67号土坑が掘りこまれている。遺物は若干の土師器甕が出土している。



第82図 第23・24号溝実測図



第83図 第25号・26号溝実測図

○ 26号溝 (第83図)

本遺構は、3号墳と4号墳の間に掘り込まれた全長9m程の南北に長い遺構で北側は4号墳周溝から始まり南側は3号墳周溝と切り合う。時代的には古墳築造時期と差程の時間的差は無いと理解される。土層から見るかぎり3号墳に掘り込まれている。

遺物は土師器甕が出土している。

4. 墓 坑

本遺跡からは9基の墓が検出された。いずれも六紋銭から戦国時代～江戸時代の墓で南側、大麻古墳群の墓と同一であり大麻古墳群は中世、近世の墓と古墳が混在する遺跡で有ることが明白となった。言い換れば大麻2号、3号墳はいずれも中世、近世の墓であり、今回の調査で出土した1～9号墓と同様なものであることが明白となり、大麻2、3号墳は存在しなかった。そのため今回の調査で検出されたものを3号、4号墳とし調査し、邦文も現実に添った番号で報告した。以下墓はすべて副葬品から古墳の名称は使用しない。

○ 1号墓 (第84図、第86図)

本墓は3号墳南側の周溝の中に掘り込まれた64号土坑に掘られ一部欠失する。骨は屈葬で埋葬されたと推察される状態で出土している。頭蓋骨を東に大腿骨を南側に位置していた。頭蓋骨は後頭骨の一部でラムダ縫合は明瞭には観察出来なかった。外後頭隆起の一部と推察出来る部分が認められる。大腿骨左右とも上端は西側を向く。上腕骨は左右2本認められ上端は西側に位置する。その他鎖骨と思われるものの破片が見られた。

掘り方は長円形で東西1.1m、南北80cm前後で掘り込み深さは確認面から35cmで底部は平坦、骨の出土状態から推察すれば埋葬形態は屈葬で有る。

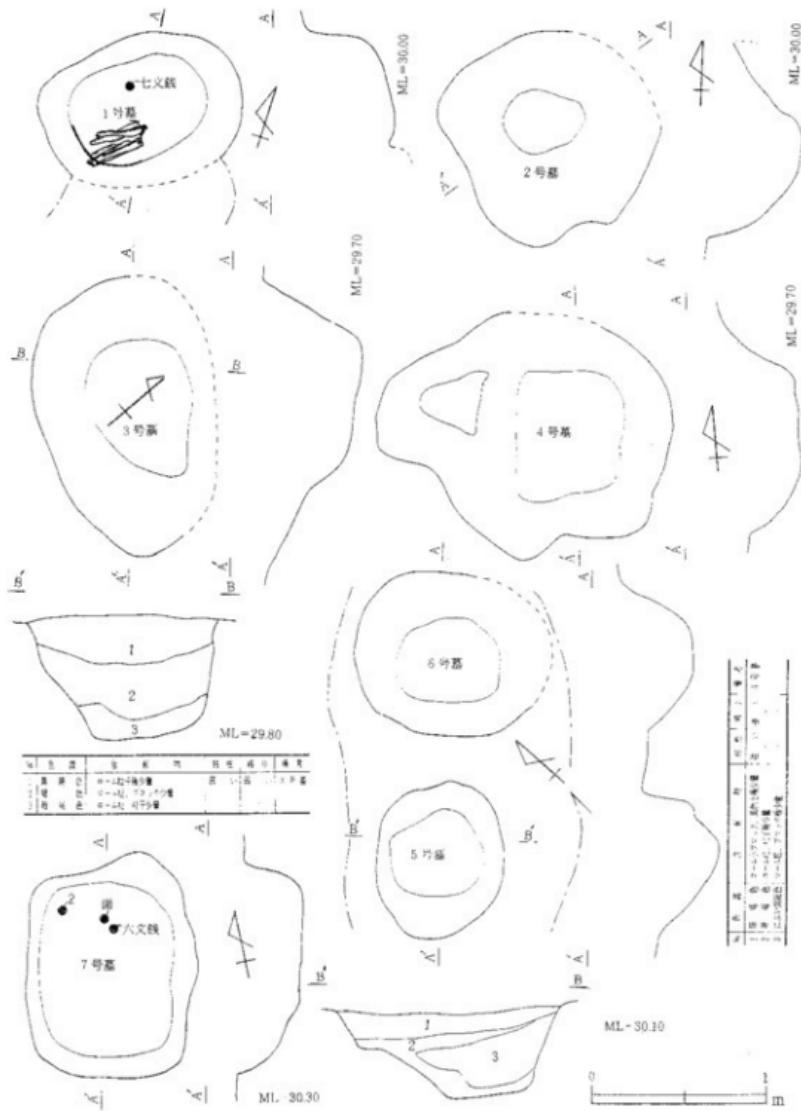
副葬品は六紋銭は7枚出土し洪武通寶2、永樂通寶1、開元通寶1、皇宋通寶1、紹聖元寶1、天聖元寶1が副葬され楷書は天聖元寶、紹聖元寶のみで有る。永樂通寶は天正15年鋳造(1587年)江戸時代初頭と私考する。その他特別な遺物は出土しなかった。

○ 2号墓 (第84図)

本墓は、1号墓の西側に位置し楕円形状形態で径1.1mで深さ50cm掘り込みは弱いU字状形態。底部の縛りは弱い。形態からは土坑状で副葬品、人骨は検出されなかった。遺骨自体を改葬した可能性があった為墓坑とした。

○ 3号墓 (第84図)

本墓は、3号墳南側の隅部から検出された遺構で東西1.5m、幅1m前後の倒卵形状形態で掘り込み深さは65cmで底部は平坦に近い。縛りはややある。覆土は自然埋積状を示し覆土からは墓の可能性はややある。掘り方プランは一連の墓と同様なプランを呈し、上端が変形し改葬の可能性



第84図 第1・2・3・4・5・6・7号墓実測図

が考えられる為墓とした。副葬品、人骨は検出されない。かなり多数の川原石が出土している。約40個。

○ 4号墓 (第84図)

本墓は、3号墳の周溝の中に位置し検出された墓で周溝を掘り込む。南北1.3m、東西1.1m程の長方形状で掘り込みは40cmと浅い。(周溝の中のため) 底部は方形で縁りはやや有り平坦に移行。掘り方は一連の墓と同様な形態であるが遺物は皆無。改葬した可能性が覆土から窺える為墓とした。上師器壺破片のみが10片程出土している。

○ 5号墓 (第84図)

本墓は、3号墳の周溝の中から検出された墓で北西側に位置し周溝を掘り込む。掘り込みは円形状で長径80cm、短径70cmで45cmの深さで台形状形態。覆土は3層に分類された。人工的な埋積状態を示す。遺物は土師器破片のみで副葬品、人骨は検出されなかったが本造構も覆土から改葬の可能性が推察される。

○ 6号墓 (第84図)

本墓は、5号墓の東側に位置し周溝の中から検出された。形態は長円状で南北1m前後、東西90cmで掘り込み深さは40cmを測る。弱いU字状形態。底部はやや縁りがある。その他、歯のみが18本検出されている。14本欠失している。遺物は、土師器破片のみで覆土から墓坑と推察される。一応改葬された墓とした。墓に関する副葬品は皆無である。

○ 7号墓 (第84図)

本墓は、3号墳の北辺に内側に位置し周溝ぎりぎりに検出された。長さ1.1m、幅90cmで掘り込みは確認面から30cm前後で底面はやや縁りをもつてほぼ平坦である。ほぼ北側に長軸を置き六紋銭、6枚、灯明皿が北側から出土し、この部分から六紋銭も出土している。遺骨は皆無に近く小破片が僅かに見られた。その他歯が5本出土している。これら遺骨の状態、上抗から屈葬で埋葬が行なわれたと理解される。

出土銭は、永樂通寶、政和通寶、元豐通寶、元祐通寶、皇宋通寶で楷書は政和、元豐、皇宋の各3枚で有る。永樂通寶は天正15年の鋳造。

人骨は前述のとうり細片で特定出来ない。歯は5本確認され、特定出来るものは1本のみで下顎に付随していない遊離歯4本が遺存する。歯はかなり磨耗、腐食が進み辛うじて推察した。



男女の性別は不明。

○ 8号墓 (第85図、第87図)

本墓は、3号墓の北辺、周溝部中央外側に掘り込まれていた。ほぼ方形プランで一辺1.3m、

掘り込み深さは55cmで底部は若干凹凸気味で有る。縫りはやや有る。遺物は、遊離歯が14本確認された。骨は極小さい細片で3片程見られたにすぎない。俗にこう六紋銭は検出されなかった。

歯は遺存状態は良く上顎部分はほぼ検出され、咬耗度は2度で推定年令は熟年期。

1	1	2	3	4	6	8
1	1	3	4	5	6	8

これらの状態から骨が皆無に近い事はやや変則的で六紋銭も見られない。掘り方プランも他の遺構と違い方形形状態。男女の性別は不明で有る。

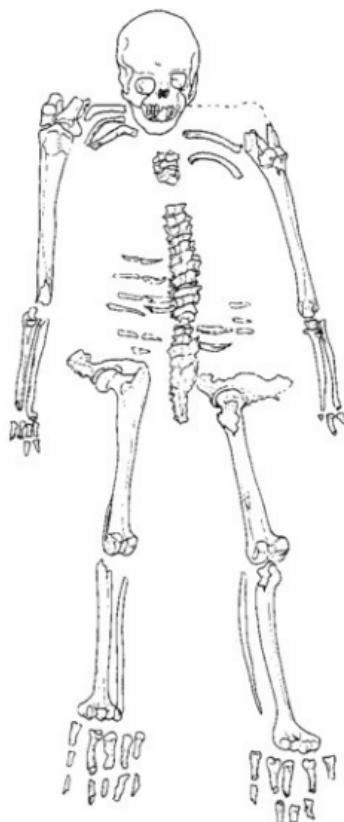
○ 9号墓 (第85図、第86図、第87図)

本墓は、調査区の北端に位置し検出された。掘り込み形態は南北1.7m、東西1.5mの方形状プランで深さは1.4mを計測する。本墓は常滑の水甕に埋葬されていた為遺存状態は良く、ほぼ人骨は復元出来る。埋葬方法は足を下にし、頭を北に向けて屈葬されていた。(第86図) 齧は頬についたままで検出されている。骨は、ほぼすべての骨が遺存し、骨盤から男性で推定身長1.6m程の熟年期の人物と推察される。

六紋銭は、6枚で、すべて寛永通寶でさも新しいものは書体、形状から明和年間1760年間の铸造ですべて銅銭、3枚、2枚、1枚づつ年代に差がある。

埋葬に使用された常滑焼きの水甕は江戸時代後半の作り、器形で有る。(図版87) これらの副葬品、人骨の状態、常滑の器形から推察し埋葬された時期は江戸時代後半が推察され、人の世のはかなさを感じる。甕に迄丁重に埋葬された人が僅か100年で無縁仏になってしまう人の世の浮き沈みと死とは忘れ去られる事で有ることに調査をすめ乍ら痛感した次第で有る。

南無阿弥陀仏…… 南無阿弥陀仏……

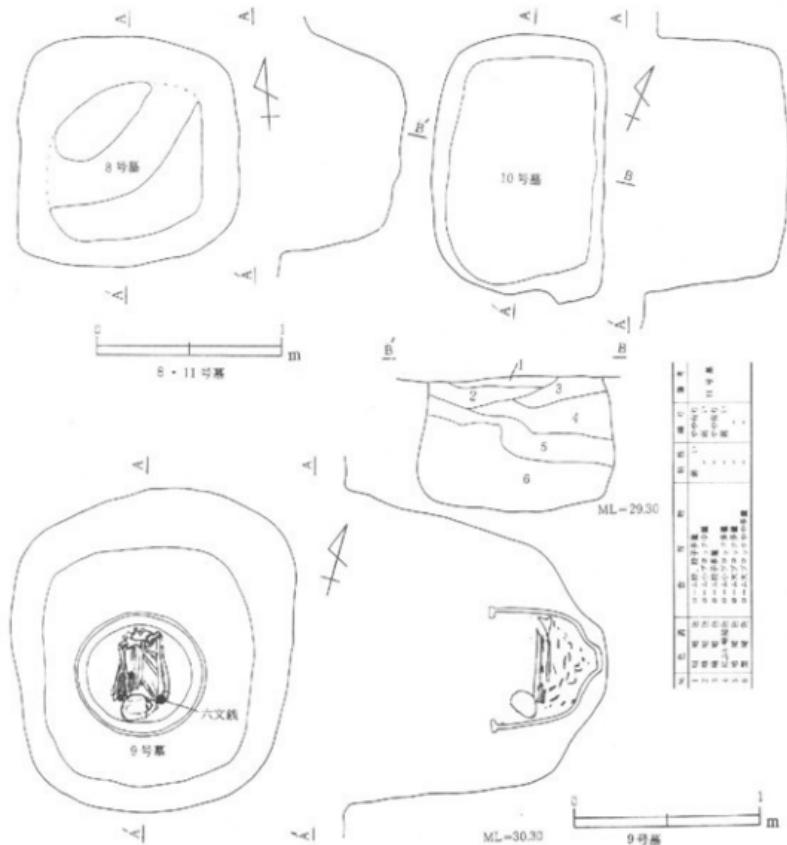


第85図 第9号墓人骨遺存状況

身長は、1.6m前後で遺存状態は良く、頭骨はほぼ全形が保たれ顎上下が分離している。頭蓋最大長は198mm、同最大幅は141mm、上面觀は長い卵円形。縫合は完全に閉鎖しインカ骨はやや突き出る。眉部は円形状に突き出す。顔面骨格は部分的に遺存、鼻骨は消失し不明。右の眼窩縁と頬骨下稜間は35mm、ほぼ円形に近い。歯は、上顎に5本、下顎は7本。咬耗度は3度に近い。歯の保存状態は次のとおりである。

0	0	0	0	4	3	2	0	0	2	3	0	0	0	0
0	0	0	5	4	3	0	0	0	2	3	4	5	0	0

篩を用い調査したが欠失歯は認められなかった。○は空齒槽、0は歯槽破損。



第86図 第8, 9, 10号墓実測図

○ 10号墓 (第86図)

本墓は、4号墳西側周溝部分から検出された（蔵）状遺構では北向き、長さ1.4m、幅90cm、深さ75cmで薩摩芋貯蔵穴状形態。底部は中央部が僅かに低くなるがほぼ平坦に近く若干の綺りをもつ。墓壙としたが遺物、副葬品、人骨等から考えて可能性は弱い。覆土は人工的に埋めた感じをもつが土層は改葬のみとは断定できない。覆土に6層の黒褐色層が底部を覆う為一応（墓）とした。時期はかなり新しくなると推察する。明治以後が推察される。



第87図 第1号墓・7号墓・古銭及びカワラケ出土遺物実測・拓影図

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土・色調・焼成	備考
1	灯明皿 国分	A 8.2	底部に糸切り痕を残す。部分的に黒色 部をもつ。副葬品	ロクロ水挽き ナデ	雲母、繊石 褐色 普通	覆土中 完形
		B 2.5				
		C 4.5				
2	灯明皿 国分	A 5.0	底部はナデで糸切りをしている。一 部媒をもつ	ロクロ水挽き ナデ	雲母、繊石 褐色 普通	覆土中 完形
		B 1.8				
		C 4.6				

VIII 総括

本遺跡の館、古墳、墓を総括し結語としたい。

小屋ノ内館として登録されていた地区は調査の結果『屋敷』に近い縄張りであり、時期は2つに分かれると推察出来る状態であった。以下館、屋敷と分け新しい館から屋敷の古い部分に分け後述したい。

本館の年代を推察することは非常に困難であるが土塁構築形態、堀の掘り込み様相から本遺構は2回にわたって構築されていることが明白である。

館の縄張りは方形館跡とは西側の一部が丸みをもつため断定は出来ない。地形の制約からは特定出来ないが土塁構築状態、規模横矢かかりが見られなく直線的な堀の掘り方と深さ、幅から館の時期の期間はかなり短く建屋は掘立が3軒前後、厨屋1軒が検出されている。その他不明が1軒存在。いずれも極浅く言い換えればかなり搅乱され(80cm)存在したとしても消失した可能性

がある。遺構規模から推察すれば麻生氏の初期の館とも推察出来るが遺物が少なく決め手は無い。時期は鎌倉時代が推察される。土塁は後世の改築、かなり低い土塁と深いV字状内堀と幅広の浅い堀からなる館である。

屋敷の段階は時期的には麻生氏が土着する以前の存地名主の屋敷で現在の字麻生の範囲を支配した人の屋敷と推察される。それが50cm前後の土居と推察され東側に一部残存していた。テラス部分は西側、東側に見られるが改造し構築、館、屋敷の時代とも皆無に近く畑にした時期に若干の削平が見られたにすぎない。一部北側に裏門的部分のみで有る。この時期に明確に該当する遺構は溝としたもの。当時の屋敷の範囲を示していたと推察され館のはばの三分の一前後で館はかなり南側の傾斜地を造成し堀を二重にしている。

門（虎口）は屋敷と館では東と南に分かれ差が見られる。建屋に関しては明瞭な遺物が出土していない為断定は出来ないがすべて館の遺構と推察する。

住居跡は弥生時代の遺構が2軒、古墳時代の遺構が5軒、奈良時代の遺構が3軒、時期不明の遺構が2軒で小屋の内、大麻古墳群で都合12軒となり断片的に集落が存在したことが推察出来る。

時期は弥生時代後半東中根、松延に近づく時期が2軒見られた。古墳時代は五領式の1式が1軒、和泉2式が2軒、鬼高郡が2軒、奈良時代真間期2軒が主な遺構である。弥生時代の遺構は炉を中心部やや北よりに置く地床炉で五領、和泉迄同様と理解するが明確な炉が確認される遺構が少ないので断定は出来ない。

土坑は、縄文時代中期加曾利E5式の微隆起線文が見られ、深鉢をもつ15土坑がある。その他掘立の土坑が多数を締め建屋東から井戸状の2号土坑が検出されたが遺構の性格を推察出来る遺物は出土を見ない。時期的には館の年代か？

溝は16、17号のように屋敷段階の通路と推察されるものと出土遺物から江戸時代後半の新しい溝が見られる。前者は南側部分を館の時代かなり大規模な工事が行なわれたことが断定出来る。後者は、出土遺物から土面等江戸の遺物が出土している。性格は不明。

その他ピット群があり、これらは柵等の痕跡と理解され北東、南東に集中する。

大麻古墳群では新たに方墳が見つかり3号古墳とした。遺物は周溝部から若干の土師器が出土したが時期は古墳時代後期後半が推察される。4号墳は封土が20cm程見られたが大半は畑地になり搅乱されていた。完全にはほぞ遺存していたのは周溝のみで埋葬施設とした部分は断定出来る程の遺物は出土していない。遺存していた遺構を埋葬施設と見れば南側から掘り込まれ中央やや南側に玄室設ける古墳と理解する。本遺構からは土師器数点の出土で埋葬施設に関する遺物は皆無である。時期は3、4号墳とも奈良時代前半に入ると考えられる。

また戦国時代から江戸時代にかけての無縫仏が4体出土している。副葬品の六紋銭からほぼ特定され新しい仏は江戸時代末で常滑の水窯に埋葬されていた。本仏の六紋銭はすべて寛永通寶で

あった。

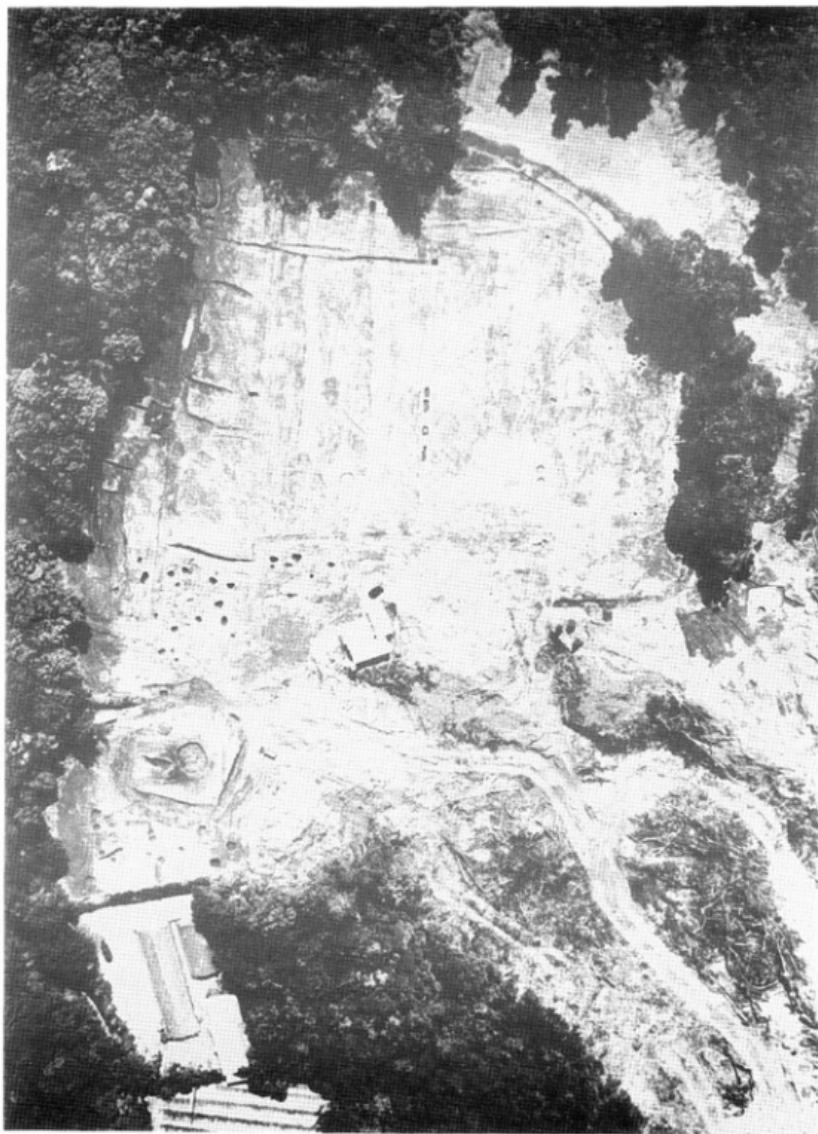
両遺跡を通じ中世の遺物、陶器、磁器、瓦器等は皆無に近い遺跡であった。ただ4人の無縁仏の供養と小屋ノ内館遺跡性格が判明し、本地域の鎌倉時代前後の時代の複雑な動きの一端を『かいま』見たような気がする。最後に大麻古墳群から出土した仏は普門寺住職にお願いし丁重な供養を行い再埋葬した。

(文責 汀 安 衛)

参考文献

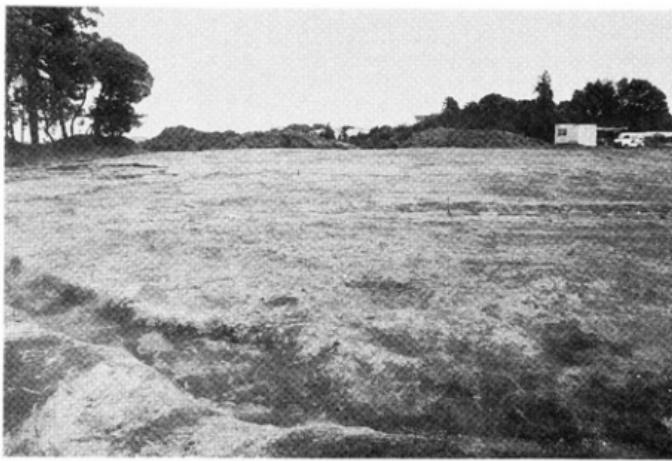
常陸梶山古墳	大洋村教育委員会	汀 安衛 橋本博文
棒山古群（庚申塚古墳）	潮来町教育委員会	汀 安衛
麻生町遺跡地名	麻生町教育委員会	茨城大学考古学研究室(未)
大麻古墳	麻生町教育委員会	汀 安衛

調查終了全景





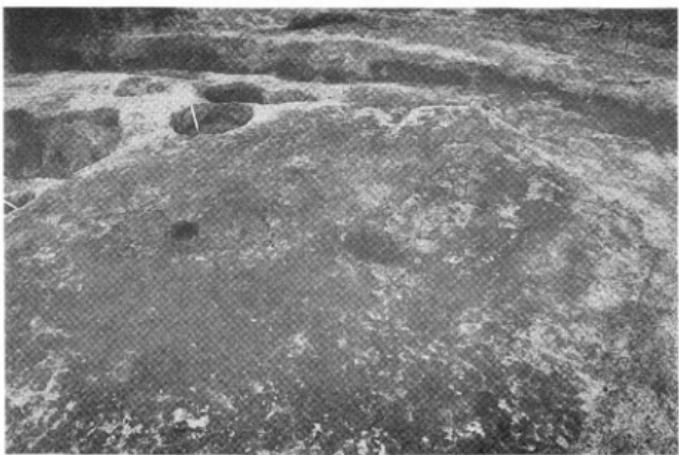
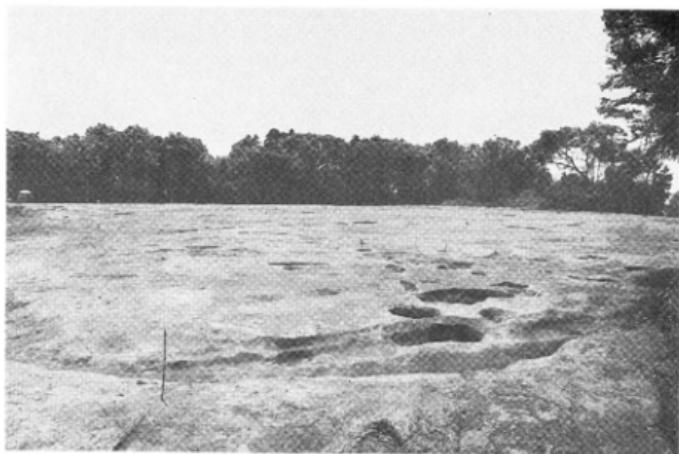
P L - 1 調査区中央部(上) 同北東部(下)



P L - 2 西側消失した土壘と内堀（上）同中央部（下）



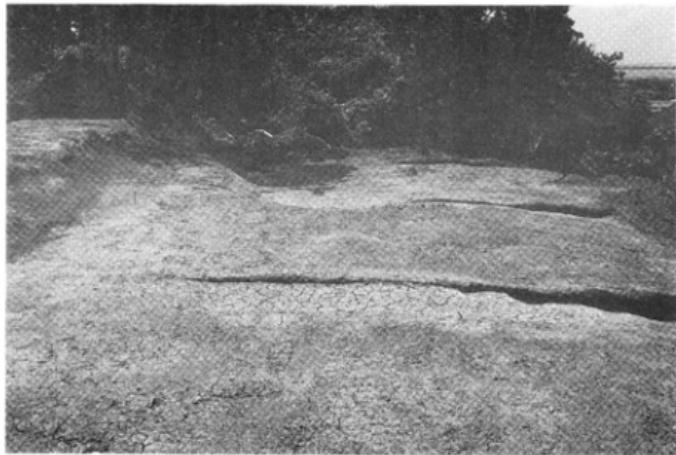
P L - 3 北側土壘（下） 同西側土壘



P L - 4 北東側から見た調査区（上） 同 内堀部（下）



P L - 5 外側からの土壘西側（上）同 北側（下）



P L - 6 テラス状部分（上） 同 調査後（下）



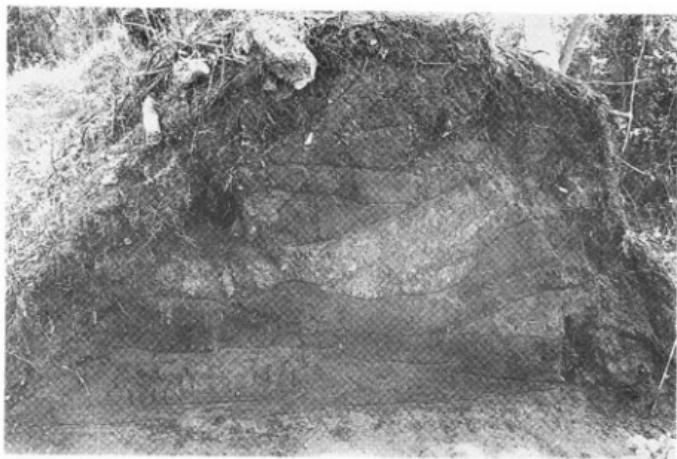
P L - 7 南側からテラス状部分を見る（上）同土壘（下）



P L - 8 裏門と思われる部分（上） 同調査後（下） 同右



P L - 9 土壘の構築状態(上) 同近景(下)

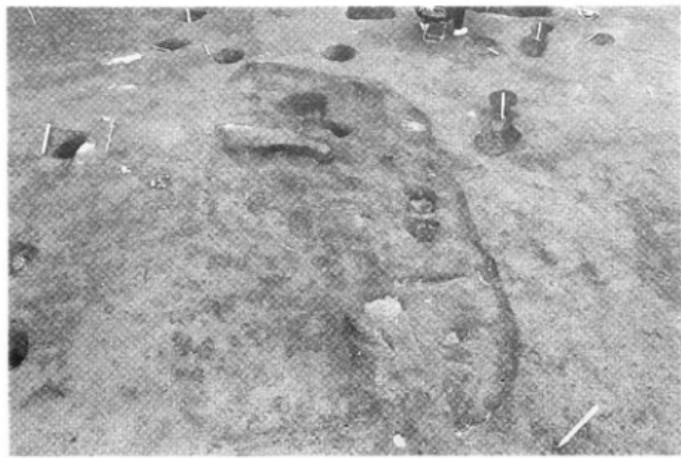


土壌土層



1号・2号・3号建屋

PL-10 北側土壌構築状態(上)建屋とピット群(下)



P L - 11 3号建屋と焼土(上) 同完掘(下)



P L - 12 1号堀土層（上） 3号堀完掘（下）



3号堀



4号堀

P L - 13 3号堀全景(下) 4号堀全景(下)



6号堀



6号堀

P L - 14 6号堀南東部(上) 同北側(下)



4号堰

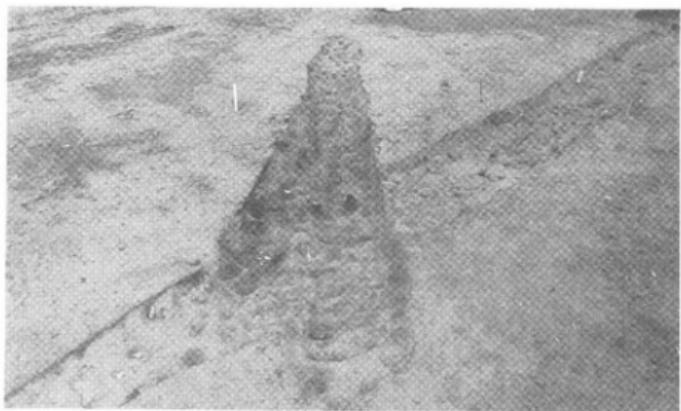


4号沟

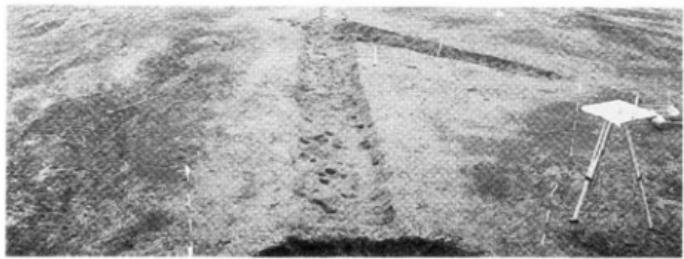
P L - 15 4号沟完掘(上、下右、下左)



8号沟



9号沟

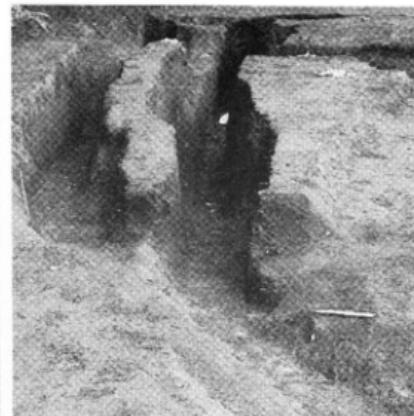


10号沟

P L - 16 8号、9号、10号沟完掘(上、中、下)



19号溝

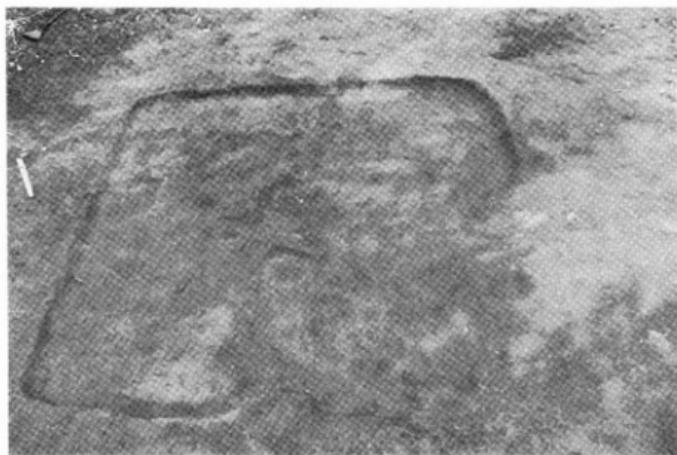


16·17号溝



21号溝

P L - 17 19号、16号、17号、21号溝全景(上右、上左、下)

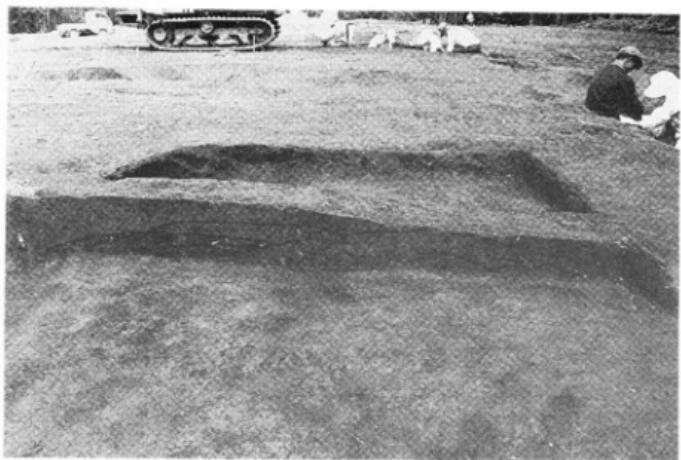


1号住



3号住

P L - 18 1号住完掘(上) 3号住遺物出土状態(下)



3号住



5号住

P L - 19 3号住土層（上） 5号住遺物出土状態（下）

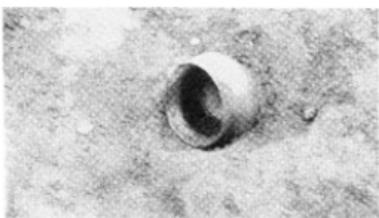
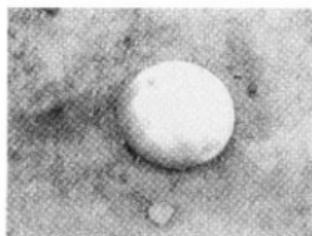


6号住



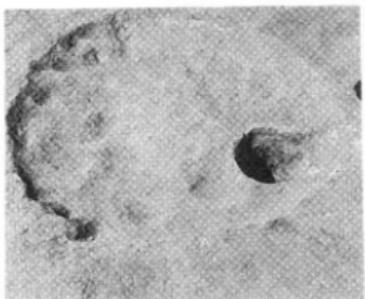
6号住

P L - 20 6号住遗物出土状态(上) 同完掘(下)

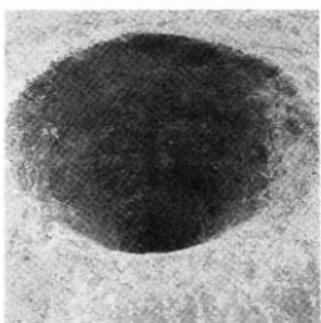
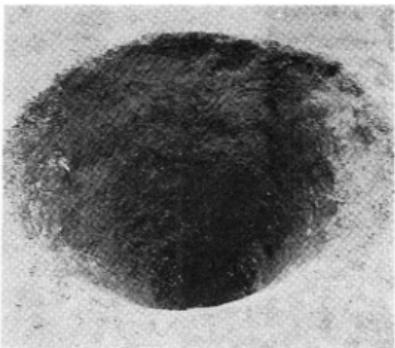


8号住

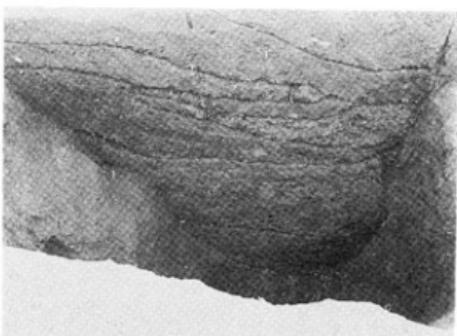
P L - 21 8号住遺物出土状態(上) 同細部(中) 同完掘(下)



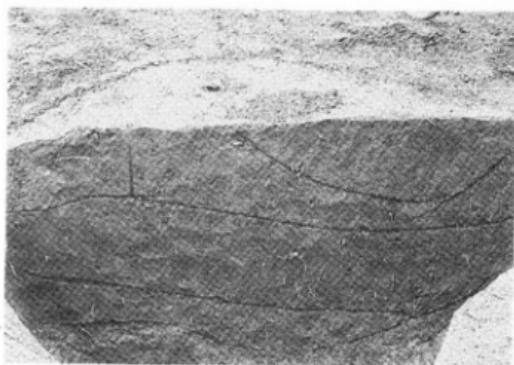
1号土坑完掘



2号土坑完掘



2号土坑土层

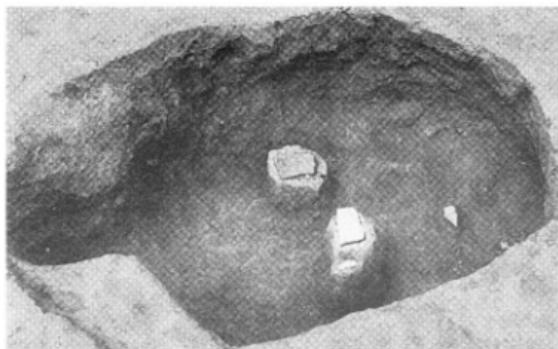


土层细部

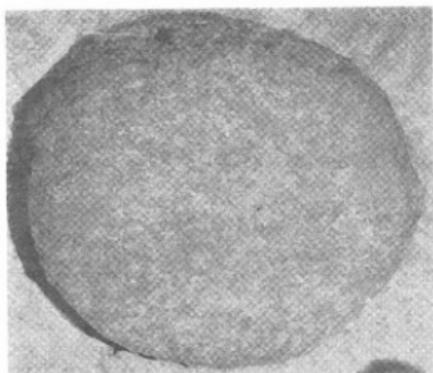


3号土坑完掘

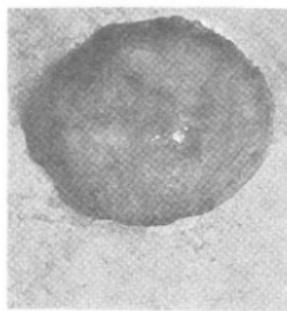
P L - 22 2号土坑 同上部， 3号土坑



4号土坑



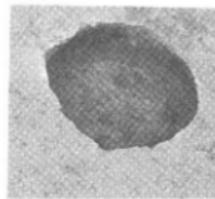
5号土坑



7号土坑

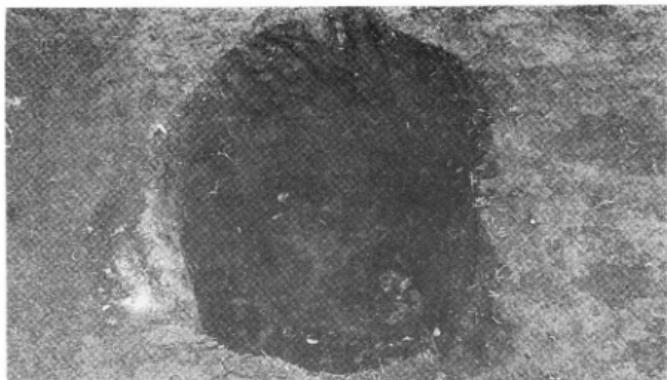


6号土坑



8号土坑

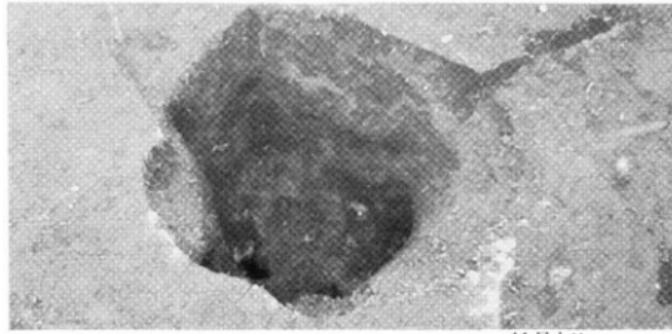
P L - 23 4、5、6、7、8号土坑完掘



9号土坑

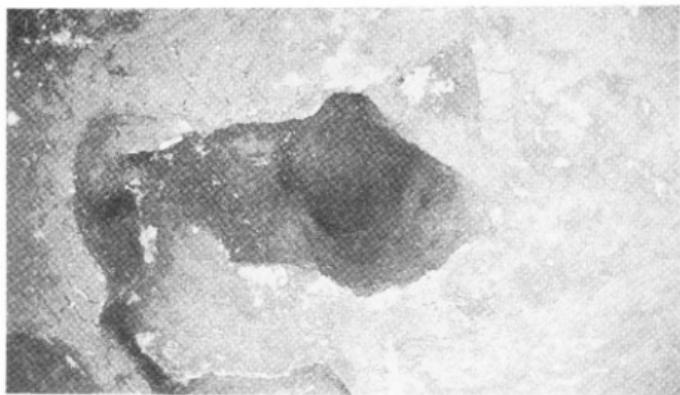


10号土坑

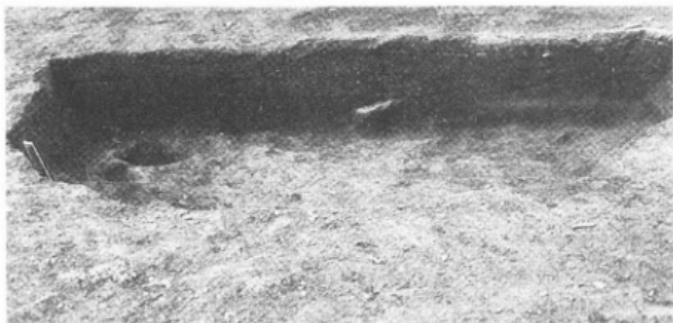


11号土坑

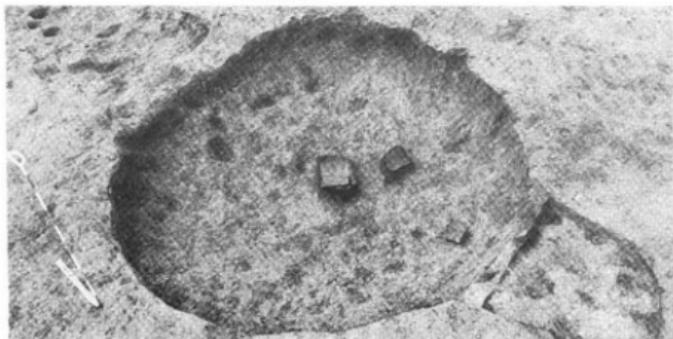
PL-24 SK-9 10、11号完掘
(上)(中)(下)



14号土坑



15号土坑

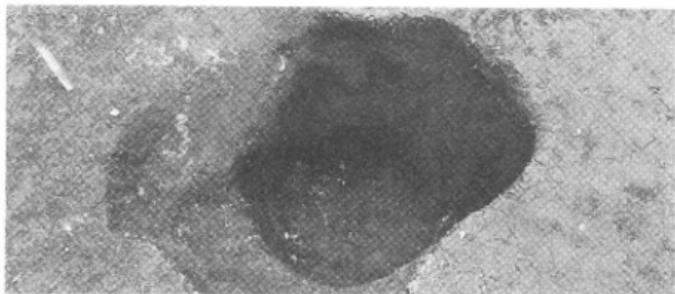


同遺物

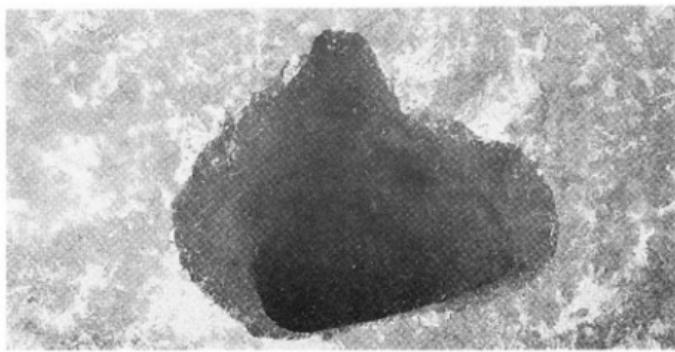
P L - 25 14、15号土坑完掘（上） 土層（中） 遺物出土狀態（下）



16号土坑

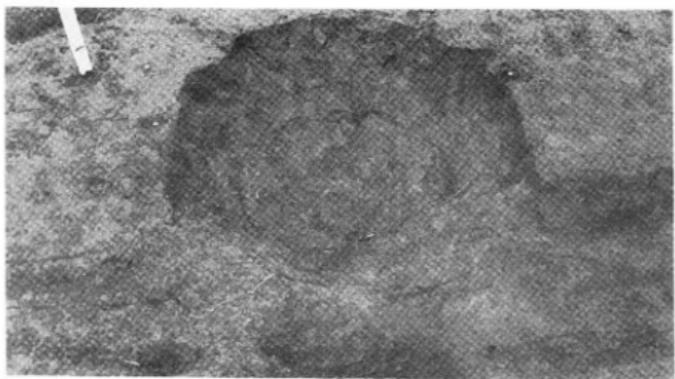


17号土坑

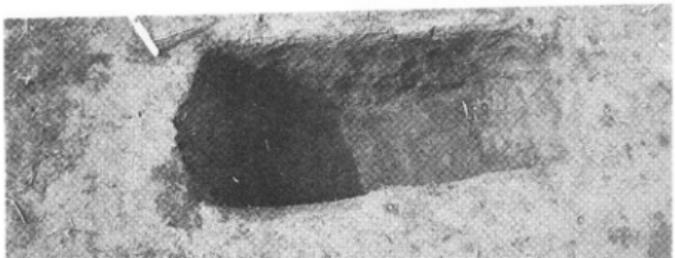


18号土坑

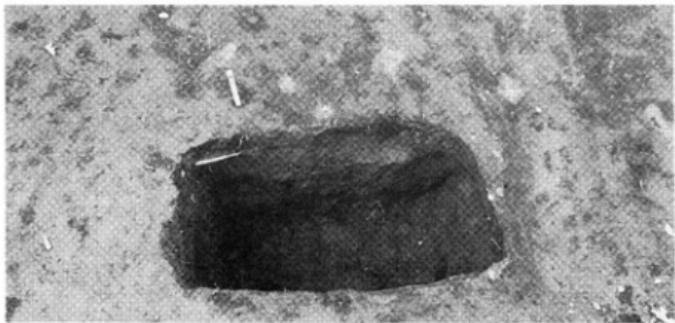
P L - 26 16 (上)、17 (中)、18号 (下) 土坑完掘



21号土坑完掘



20号土坑完掘



19号土坑完掘

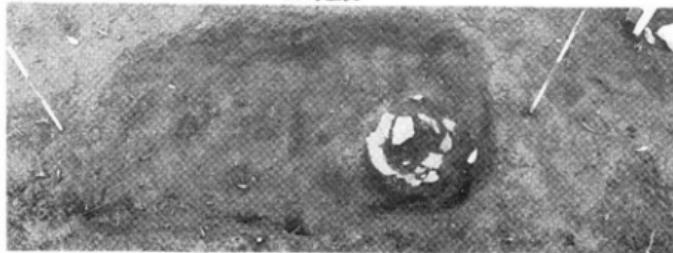
P L - 27 21 (上)、20 (中)、19号土坑 (下) 完掘



23号土坑

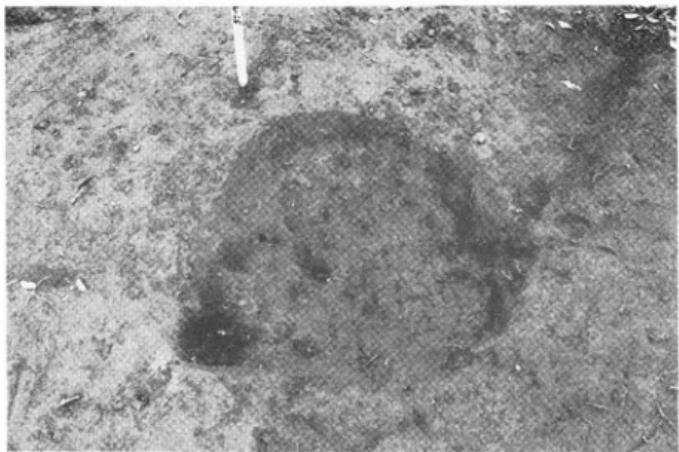


25号土坑

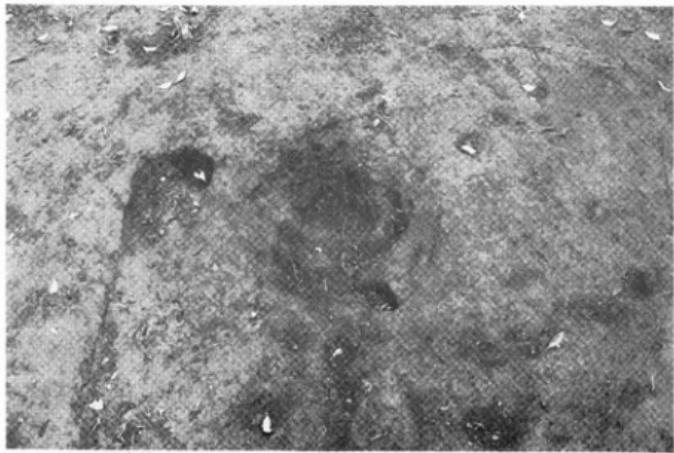


24号土坑

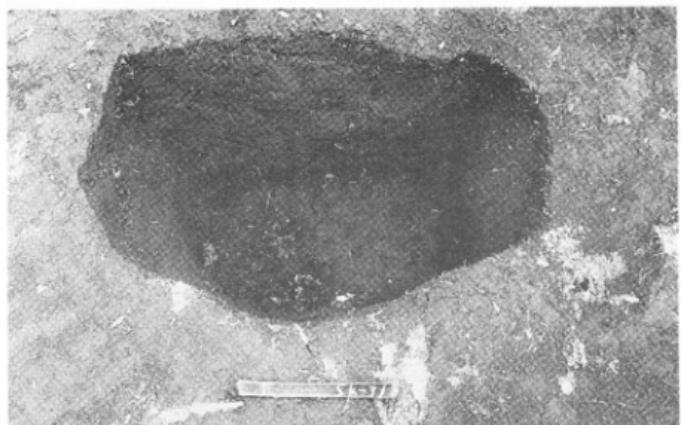
P L - 28 23 (上)、25 (中)、24号土坑 (下) 完掘



26号土坑完掘



27号土坑完掘



31号土坑完掘



35号土坑完掘

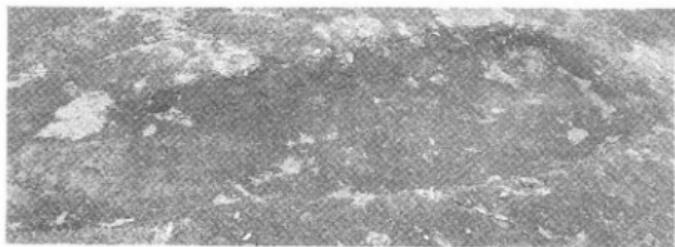


38号土坑完掘

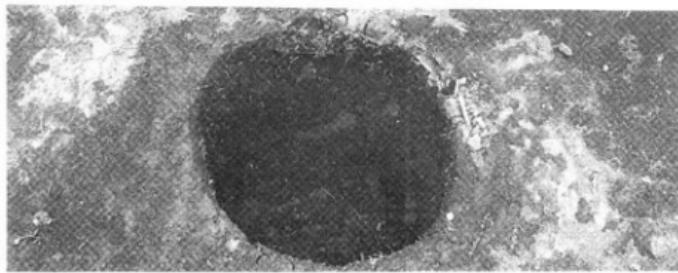
P L - 30



39号土坑

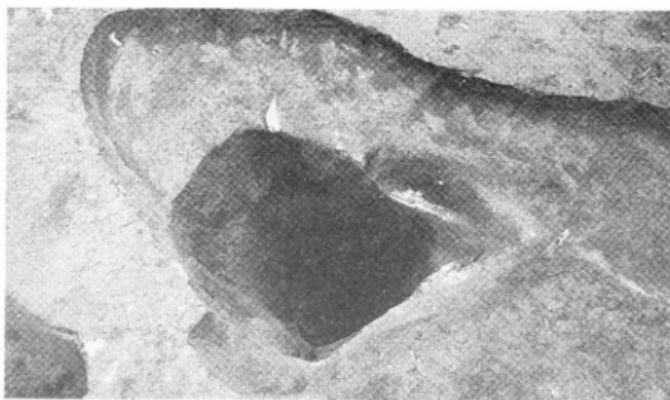


41号土坑

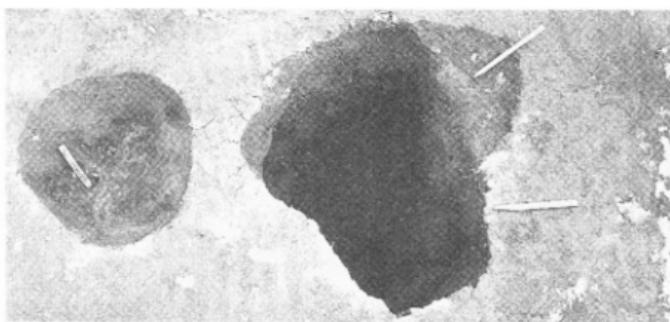


42号土坑

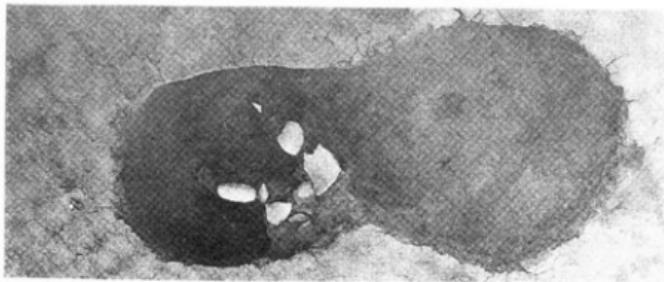
P L - 31 39 (上)、41 (中)、42号土坑 (下) 完掘



43号土坑

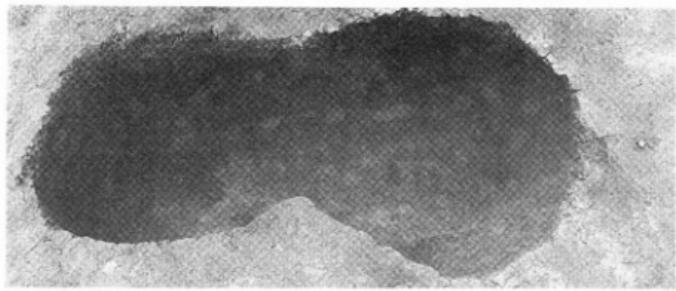


45号·46号·47号土坑

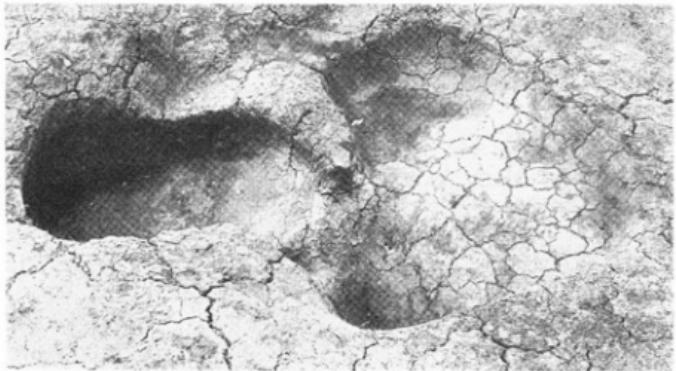


50号土坑遗物

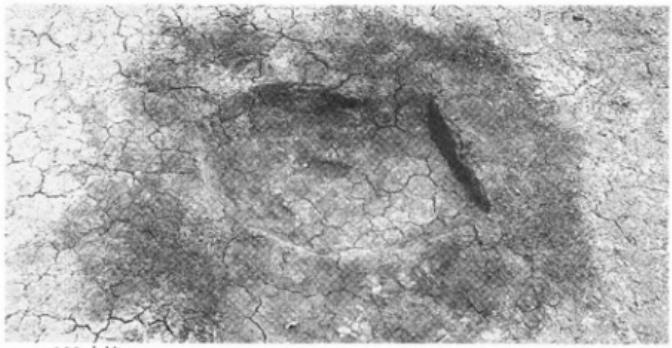
P L - 32 43(上)、45、46、47(中)、50号土坑(下) 完掘



50号土坑



70号·71

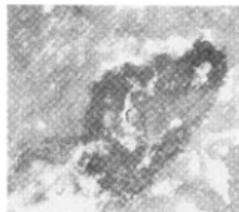


100号土坑

P L - 33 50 (上)、70、71 (中)、100号土坑 (下) 完掘



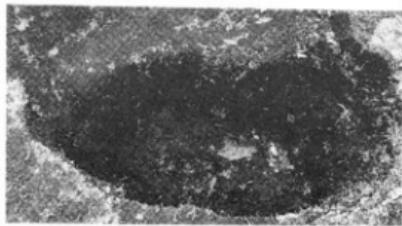
100号土坑



P - 15



P - 45 遗物

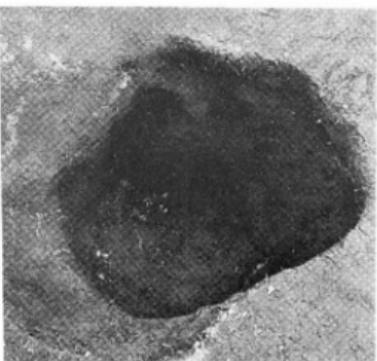


P - 78

P L - 34 100号土坑（上）完掘

P - 15、45(中)完掘

P - 78、83（下）完掘



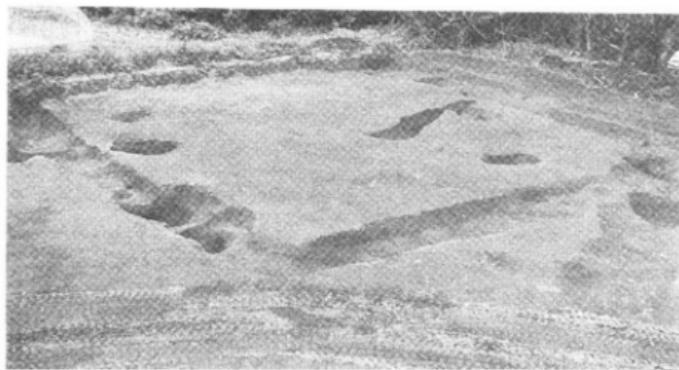
P - 83



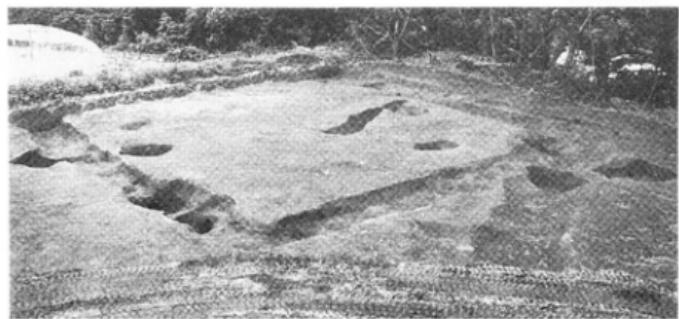
3号塘周满出土器



同皿状土器



3号墓完掘



P L - 35 3号塘周溝 (上)、近景 (中)、全景 (下)

同完掘全景



3号、4号填周溝と溝



4号填周溝、遺物

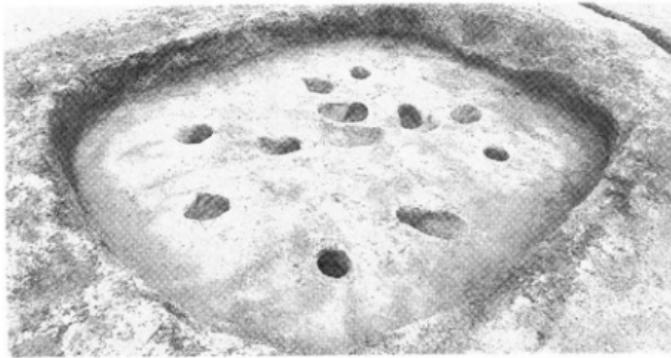
P L - 36 4号填周溝（上）、遺物出土状態



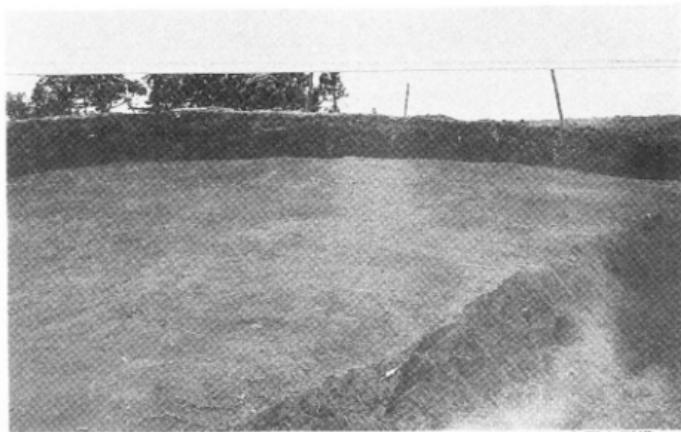
11号住居跡



12号住遺物



P L - 38 11号住 (上)、12号住 (中)、(下) 完掘



4号墳土層と周溝



同東側溝



PL-37 4号墳（上）、（中）、（下）

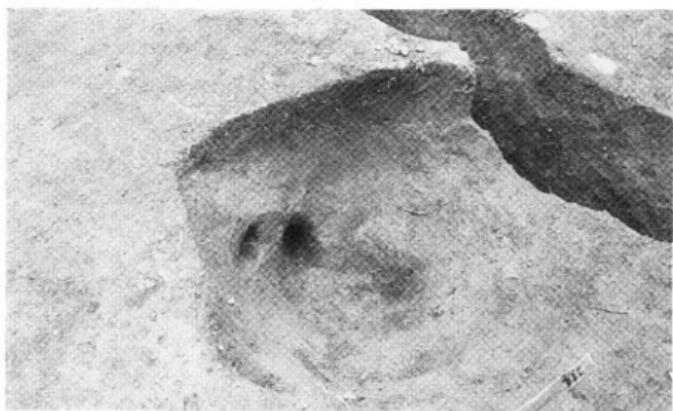
4号墳調査風景



1号墓人骨



P L - 39 1号墓（上）、同完掘（下）

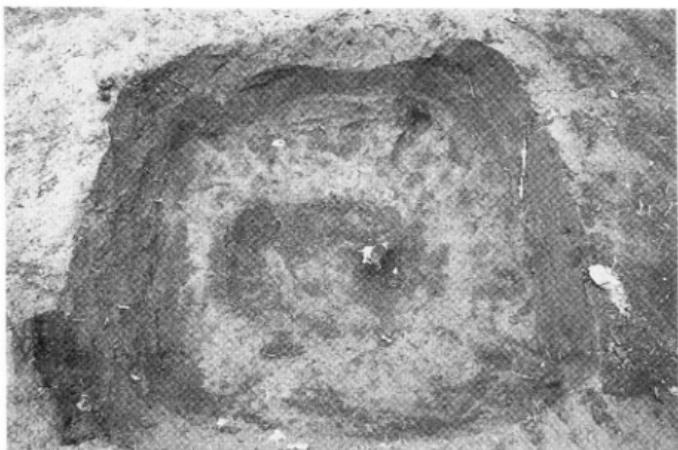


2号墓完掘

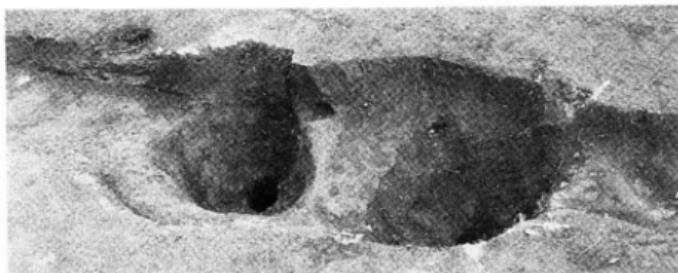


3号墓

P L - 40 2号墓（上）、3号墓（下）完掘

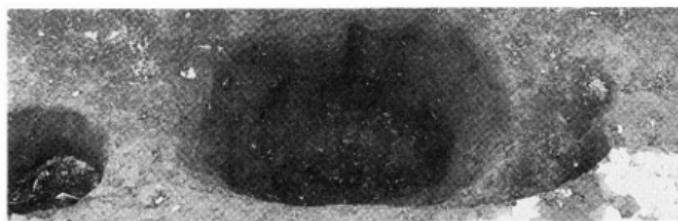


4号墓



5号墓（右）

6号墓（左）



64号土坑

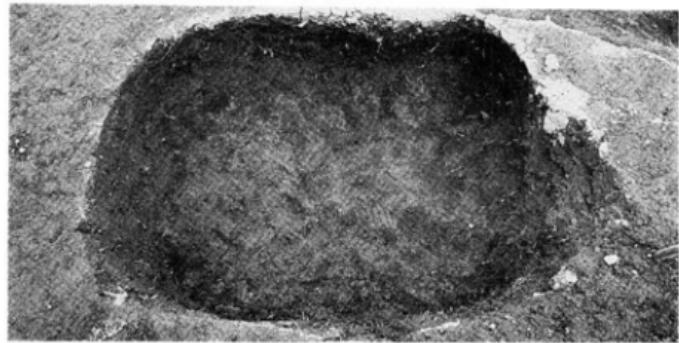
P L - 41 4号墓完掘（上）、5号、6号（中）、64号（下）土坑（下）完掘



7号墓遺物



同細部



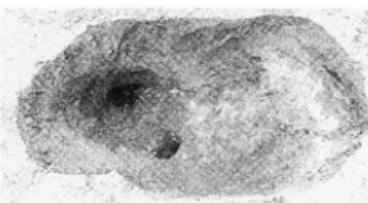
P L - 42 7号墓 (上)、(中)、(下)

同完掘

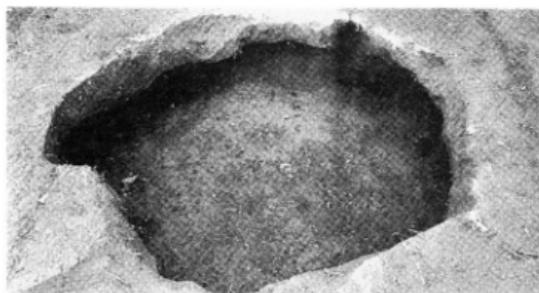


9号墓、10号墓、25号沟

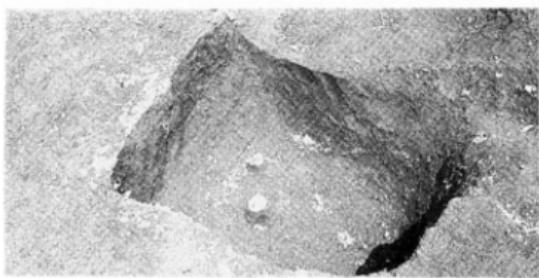
63号、66号坑



60号土坑

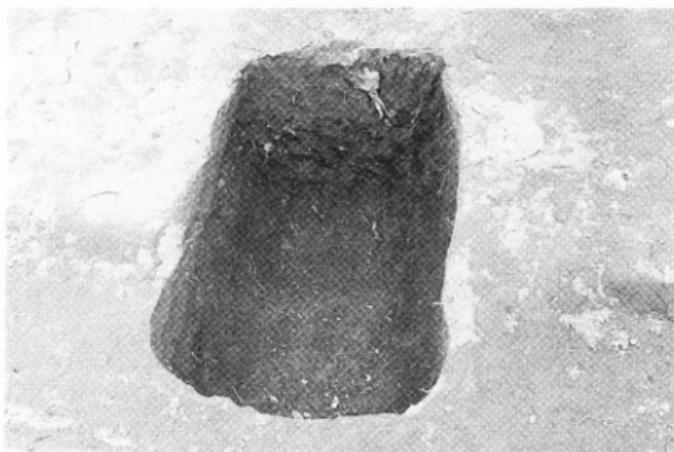


65号土坑

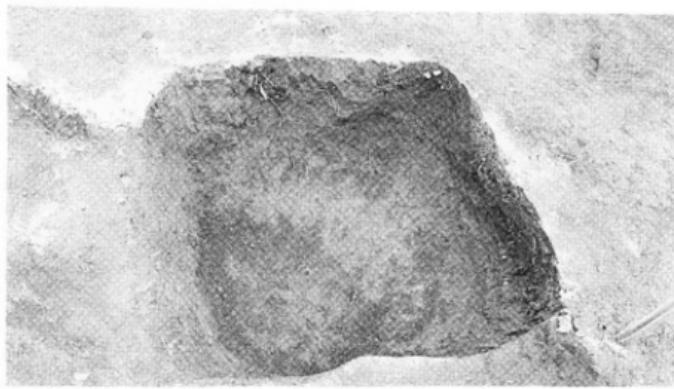


66号土坑遗物

P L - 43 各遗物完损状态



8号墓



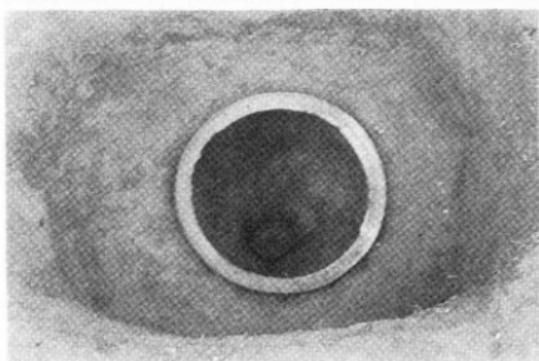
10号墓

P L - 44 8号墓（上）、10号墓（下）完掘

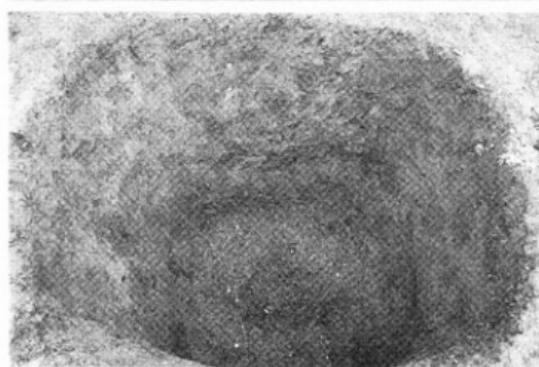
九号墓



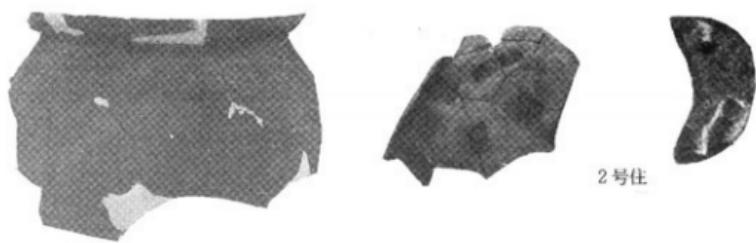
同繩部



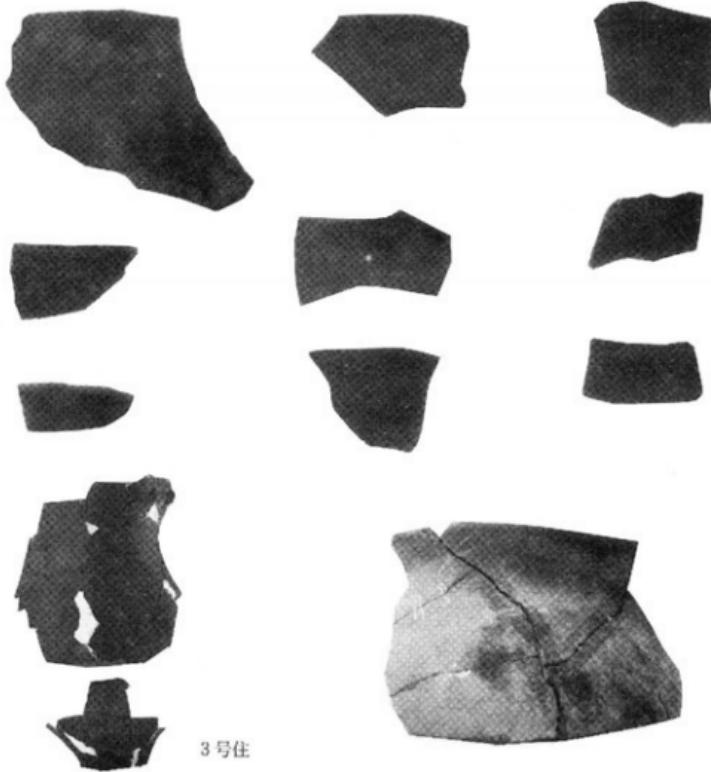
同完掘



P L - 45 9号墓 (上)、(中)、(下)



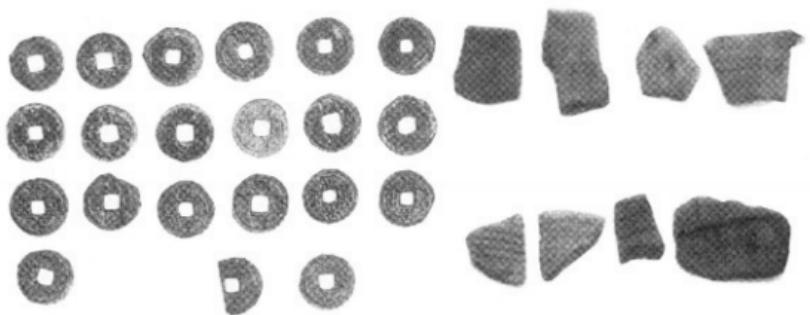
2号住



3号住



1号墓



9号墓

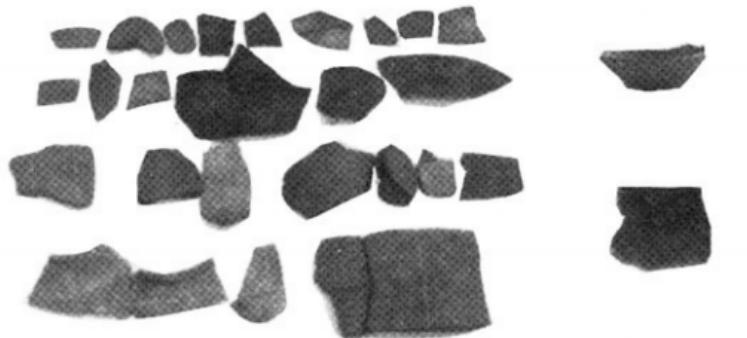


4号填

PL-47 大麻 1、7、8、9墓、4号填出土遗物

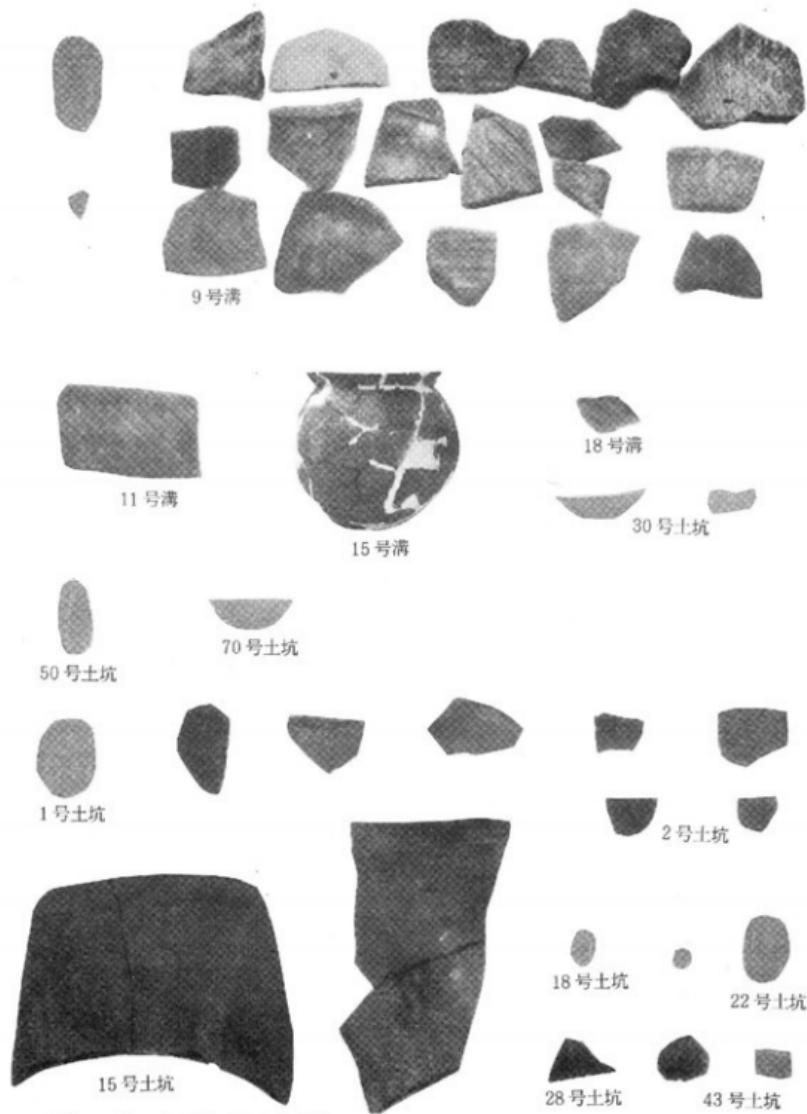


12号住

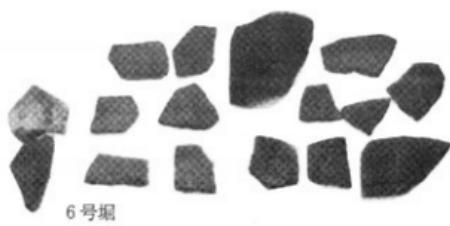
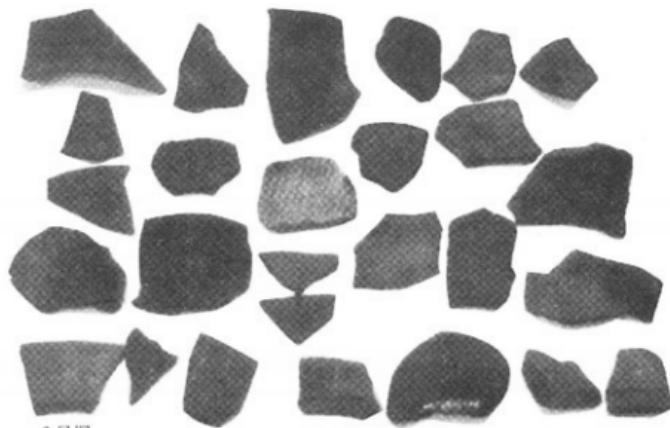


4号填

P L - 48 12号住出土遗物(上) 4号填出土遗物(下)



P L - 49 9、11、15、18号溝・1、2、15、11、22、28、30、
43、50、70号土坑出土遺物



1号掘



6号掘



1号掘

P L - 50 3号、6号、1号掘出土遗物(上、中、下)



6号住



8号住

P L - 51 6号、8号、9号住出土遗物

小屋ノ内館跡・大麻古墳群
発掘調査報告書

1997年12月

編集 鹿行文化研究所

発行 麻生町遺跡発掘調査会
麻生町教育委員会

印刷 久保田印刷
麻生町四鹿 963-20